殊類甲乙

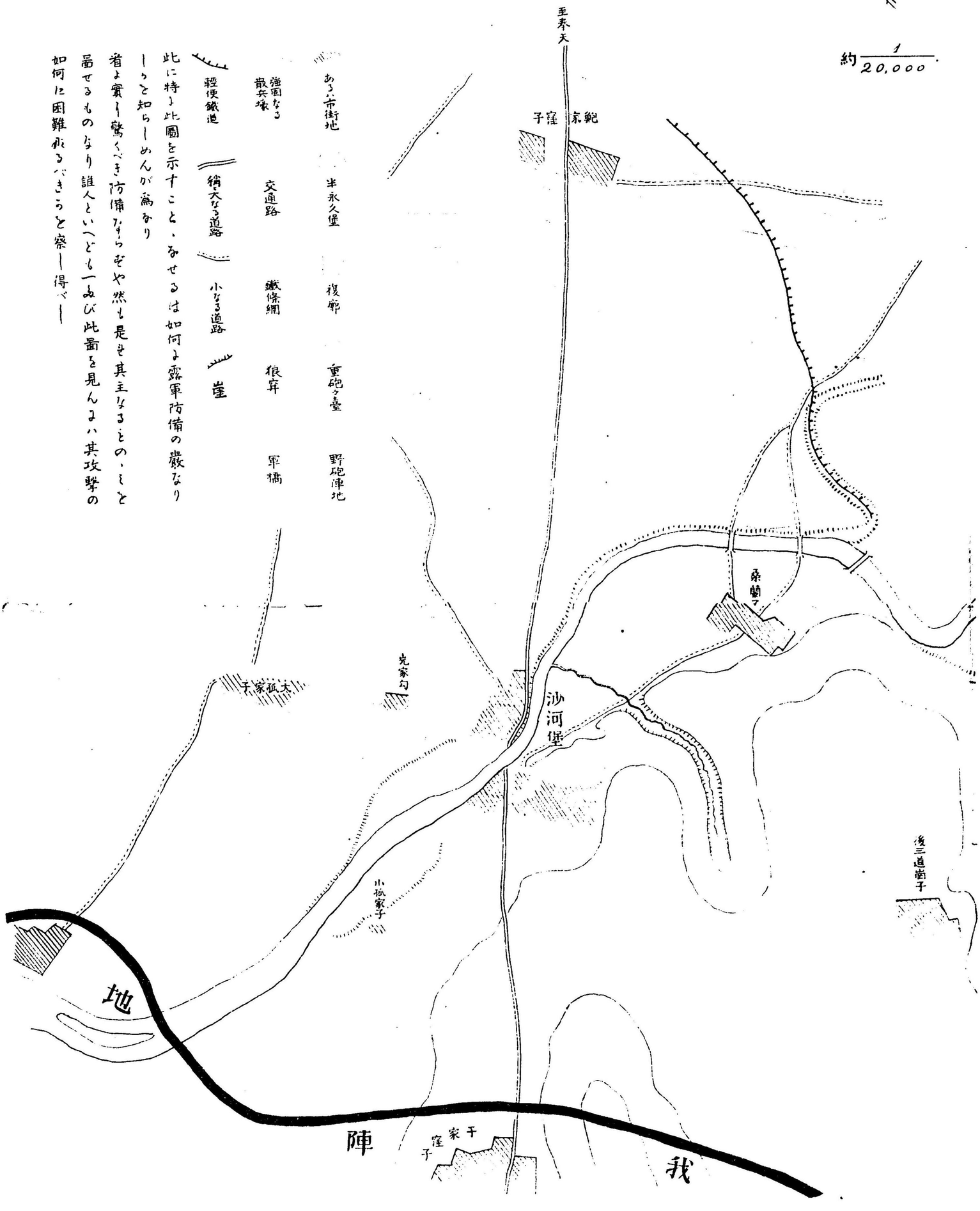
森林太郎著

112
284

金亦石透

中將春野書

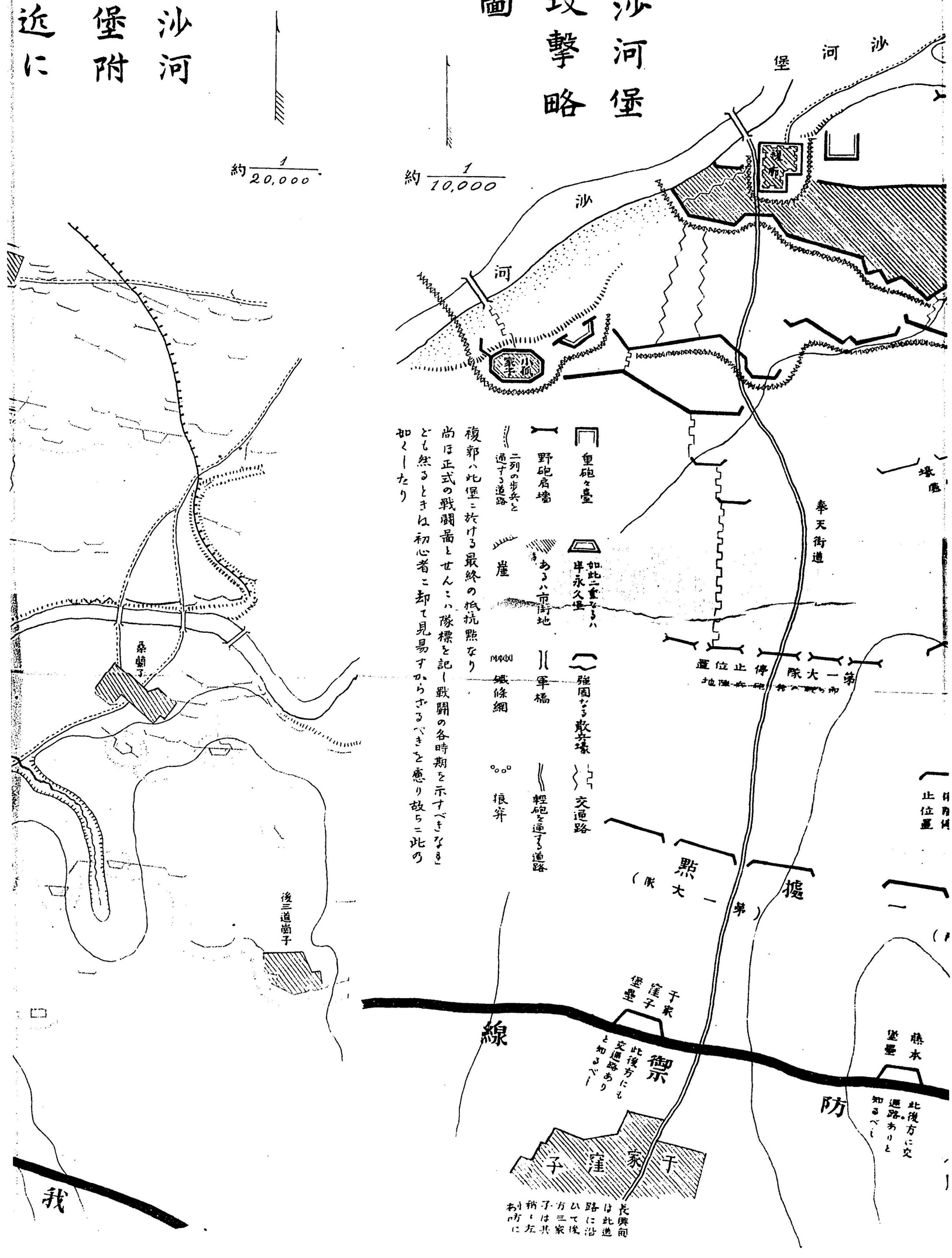
沙河堡附近に於ける敵防禦陣地



此に特に此圖を示すことゝなせるは如何に露軍防備の嚴なりしかを知らしめんが爲なり

者よ實に驚くべき防備なりとせや然も是も其主なるものゝ一にして此圖を見んにハ其攻撃の如何に困難なるべきかを察し得べし

沙河堡攻撃略圖


沙河堡附近
約 1/20,000
約 1/10,000
沙河堡
沙河
鎮市
小孤家子
重砲々臺
野砲胸墻
二列の歩兵を通ずる道路
崖
あるハ市街地
加此二重なるハ半永久堡
鐵條網
軍橋
強固なる散兵壕
交通路
輕砲を通ずる道路
複郭ハ此堡に於ける最終の抵抗點なり
尚ほ正式の戰鬪品とせんこハ隊標を記し戰鬪の各時期を示すべきなるども然るときは初心者こ却て見易すからざるべきを慮り故ちに此の如くしたり
奉天街道
第一大隊停止位置
第一大隊
據點
桑蘭子
後三道崗子
于家窪子堡壘
御示線
此後方にも交通路ありと知るべし
藤水堡壘
此後方に交通路ありと知るべし
于家窪子
長興甸は此道路に沿ひて後方三家子・稍子は其左方にあり
我防

沙河堡攻撃略圖

1/10,000

沙河堡

沙河

復郭

小孤家子

敵の空擬兵

敵即ち我兵

此敵の敗兵壕は此戰に關係せず

奉天街道

第二大隊止位置

孤立角面堡

第二大隊角面堡附近の位置

第一大隊停止位置

第一大隊の前哨陣地

四木木

聯隊本部及豫備隊停止位置

第一（第二大隊）

第一（第一大隊）

壕

于家窪子堡壘

御示

此後方にも交通路ありと知るべし

于家窪子

長興甸は此道路に沿ひて後方三家子は其稍左側に

藤本堡壘

此後方に交通路ありと知るべし

我防線（勝山）

重砲々臺

野砲胸墻

二列の歩兵と通ずる道路

崖

ある人市場地

如此二重なるハ半永久堡

軍橋

強固なる散兵壕

鐵條網

交通路

輕砲を通ずる道路

狼穽

復郭ハ此堡に於ける最終の抵抗點なり

尚ほ正式の戰鬪畫とせんこハ隊標を記し戰鬪の各時期を示すべきなるも然るときハ初心者に却て見易すからざるべきを慮り故ちニ此の

稀有の戰記

公孫居主人

緒言

これまで澤山に出てある戰鬪記事は、大抵素人向か黑人流かのどちらかに偏つて、それが旨く調和されてあるのが實に稀い。で、遂に左の如き利弊あるを免れませぬ。

素人向の方

一　文章は面白い、形容も澤山で、銃砲の音から駄馬の嘶く聲、夜營の篝火の工合から食事の狀態まで、それは實に事細に目に覩るやうに書いて、天地の風物から人の感情までも書いてある。

二　で、趣味と人の精神上に感動を與ふることに於ては、それは實にたいしたものである。

三　けれども、肝腎の軍事上より注意すべき點に就いては殆ど零で、あつても多くは豆

所謂素人向戰鬪記事の面倒な說き得て痛快

腐を掴むやうな、又は掴まれる豆腐のやうな、恐々そつと、ふはり〳〵といつたやうな工合である。

四、隨て、批評もなければ、意見なども見當らない。あつても恐らくは、旨いところにはゆくまいと思はれる。

五　故に、黑人、即ち軍事專門者の側から見ると、眞に戰鬪記事として見るべきほどのものは、實に甚だ稀なのである。

黑人流の方

一　先づ公表にされる戰鬪記事としては、あの公報にあるやうな、戰鬪詳報、あゝいふの、あれが、一番詳しいのである。

二　あゝいふ單簡なもの、あれでも、黑人側の眼から見れば、戰鬪の經過は歷然と分明つてをる、尤も、細い戰術關係などのことは別だが、其間の動作も、大略は判うと分明つてをる。

三　けれども、素人側から見るときには、勝つたは只勝つたといふばかりのことで、

乾燥無味の戰鬪詳報が素人讀者の希望する滿足には從來ぬのして通ぜにに記者の同感で說にある

勝つたに就いての精神上の感動を別としては、戰況も知れなければ、部隊の動作もわからず、何が何だか、其無味なること、宛然板でも撫でたやうなものであらう。

四　隨て、所謂危險悲慘の情狀、壯絕快絕の光景なども、舊來の軍書や傳說などによつて、推想でもするといふの外なく、現時の戰鬪の眞の狀況といふものは、どんなものであるかゝ知り難いのである。

五　で、つまり黑人側の報道は、素人を滿足させるには足らぬのである。

まあ斯うです。しかし此には、また已を得ませぬ次第があります。其次第といふのは、

新聞雜誌の方

一　戰時の記者の多くは、軍事に素人なのである。

二　黑人を使はうとしても、其人に乏しい。

三　國民一般が、軍事に甚だ幼稚である。

四　で、よしんば、黑人筋の人が書くにしても、黑人流に書いては、讀んでくれぬ。

五　ところが、是非とも多く讀ますべき必要がある。賣るといふ方の側よりか、戰時の爲

我國軍事記者は從來の戰況報告に接する者は、一般に軍事上の知識を得んとせば、必ずや軍事上の一通の記事を讀まざるべからざるなり。

に。

六　で、成るべく解り易く、面白く書いて、精神上に感動を與ふることを、專一とするやうになる。

七　といふ譯であるから、素人側のには、本式めいた記事の稀であるのも、強ち無理とは言はれないのである。

本職側の方

一　軍隊では、ちょつとした戰鬪でも、其戰鬪がすむと、直ぐ其場で、戰鬪報告といふものを出して、又續いて、戰鬪詳報といふものを出さなければならぬ。

二　戰鬪報告は勿論、戰鬪詳報でも、成るべく急いで速く出すのが本旨であつて、又然うしなければならぬのである。

三　此事は、野外要務令といふものに定められてあつて、全く軍隊の必要の爲にするのである。で、其本來のたてまへは、外に見すべき爲のものではないのである。

四　餘計なことを書くのは、寧ろ禁じられてある。

是は一般に世間承知の事實なれば、軍事に關心なき人でも、多くは遺憾できぬまでもあるべし。

五　それに、戰鬪後の軍隊といふものは、思の外に忙しいのである。

六　だから、戰鬪詳報には、必要の外のことなどを書くことが出來ぬ。

七　又、報告や詳報の外に、別に早速素人わかりのするやうな記事などを作つて、それを世間に見せるなどいふことは、それは到底出來ることではなく、又軍隊の仕事でもない。それが爲には、それこそ從軍記者といふものが居るのである。

此外尙ほ戰時には、專門的に詳しく記述することを、許せない場合が頗る多い。

けれども、外國從軍武官の記述などを見ると、黑人は黑人だけに、禁忌は避けても、眼の著け處が違ふので、それは實に旨いものである。

以上申述べましたやうな次第があるので、我國人の手に成つた從來の戰鬪記事といふものは、兎角素人向か、黑人流かの、どちらかに偏るを免れなかつたのであります。

ところがです。然ういふ偏倚つたものばかりの中にです。それがどちらにも偏倚らんで、先づは兩方を調和はして、それを可い方に展ばしたやうなもので、骨正しく、肉肝で、誰が見ても面白く、且つ何時見ても面白いといふやうなものがあつたらばです。どうでせう。

それこそ實に珍しいものではありますまいか。稀有のものではありますまいか。珍しいものでせう。稀有のものでせう。僕は實に然ういふものを見出したのです。で、それを此に、諸君に御目にかけたいといふのです。

それは、昨明治三十九年の、八月から九月に亘つて、階行社記事第三百四十五號から、第三百四十七號までに續いて出てをる、

沙河堡攻擊に關する雜錄

といふ標題の下に、記述されたものであるのです。

諸君も御存じでせうが、階行社といふのは、陸軍將校、同相當官の集合で、階行社記事といふのは、其處から出る雜誌なのであります。

其雜誌は、世間に賣るのではなく、階行社々員、即ち陸軍將校、同相當官に頒けるものであります。ですから、全くの軍事專門の雜誌なのであります。

沙河堡攻擊の記事は、僕がまだ階行社に居て、階行社記事の編纂をやつてをりましたときに提出された原稿でありましたので、乃ち其を雜誌に載せますには、直接僕が取扱つたのであるのです。

沙河堡攻擊の記事は、右言ふ階行社記事に出たくらゐのものですから、勿論軍人の筆に成つたもので、其正確なことは申すまでもなく、其書方も、極て詳細で、それを見るときは、實に自分で、其場に臨んだやうな心得がするのです。

何も然ういふものを、自分が見出したからといつて、それで自慢に太鼓を叩くのではありませぬ。後に最初に掲ぐる、其記事の提出者、植野騎兵中佐（階行社に原稿を提出されました頃は、植野さんは、まだ少佐でをられましたが、今は中佐になられました）の書かれたものを御覽になると、僕の言ふところが、いかにも成程といふことが御判明りになります。で、僕は、其記事を諸君に御見せ申したいと思つたので、階行社に照會をしまして、承諾を得たのであります。

けれども、只原文のまゝを御紹介しますのみでは、折角諸君の爲にしようと思つた、僕の心持がとほらぬのであります。何故といふと、いかにも細に面白く書かれてはあるとはい

本書は通俗的に一般の俗間に賣ることを目的として、實際に軍事に關係ある人々の參考に供せんとするものである。

本書は通俗的に一般の俗間に賣ることを目的として、實際に軍事に關係ある人々の參考に供せんとするものである。

ふでふ、軍隊のことや、兵語といつて、陸軍で用ひらるれ語を御存じない諸君には、矢張解りかねられることのあるべき筈で、隨て、誤解されるやうなこともないとは限らぬからです。

で、僕は、更に詳しい註釋を附けて、御解になり易いやうにとしたのであります。

其普通の文章で、一字高く書いてあるのが原文で、原文よりは一字下に、話のやうに書いてあるのが、即ち僕の註釋です。

而して、尙ほ諸君の爲に謀つて、原文提出者の、植野騎兵中佐に御賴み申しまして、僕の註釋の足らぬところや、又考へつかなかつたことなどを、同中佐に、上欄に書き加へていたゞくことに致しました。

斯ういふ工合にして、此本は出來したのであります。で、此本を見られたならば、當時の戰況は、現に諸君の前に躍如たやうにあるべきは勿論、唯そればかりではなく、軍事に就ても、幾分當面の知識を得らるゝであらうと思ふのです。これは決して、手前味噌ではないと信ずるのであります。

圖は、諸君の御解りになり易いやうに、是亦植野中佐の指導を受けて、原圖を書き改めました。斯ういふ工合にして植野中佐は、其職務の大へんに忙しくあられるにも關らず、諸君の爲に、此本について、種々と力を添へてくれられたのであります。ですから、こゝで諸君と與に、植野中佐に、御禮を申したいとぞんじます。一齊に頭ひたい。

本編著述の一の執筆者は第三師團參謀藤田佐平少佐たる。

第二師團通信部長中島義一君に演習に關する資料を得ざるを得ざりしを以て、君は、輿論に謝せられたるを感じて當らず

某少佐は當時某大隊の大隊長たりし歩兵少佐藤田末尙君なりしこと明なり。

植野中佐殿拜謝

沙河堡攻擊に關する雜錄

本編は、明治三十八年三月一日より、同月八日に亘る間、某隊が、沙河堡附近に於ける敵陣地の攻擊に方り、直接其戰鬪に參與したる、某少佐の筆に成れるものなり。內容は、當時の戰況中、攻擊步兵の取りたる特種の手段、土囊の利用法、躍進の方法、及、半永久的築城工事をなせる敵陣地前數百米、即ち世の所謂決戰射擊距離以內に接近し、平坦開濶、全く據るべき地區、地物なき凍結の原野に、六晝夜暴露せる間に於ける、苦戰の

狀態、傳令の困難、凍傷豫防の注意、衛生勤務の狀態より、彈藥、糧食等補給の景況に至るまで、凡そ其見るに隙ひ、極て詳細、且つ事實的に記述せるものにして、當時該戰場外に在りたる者をして、親く其戰鬪の實況を目睹するの感あらしむるものなり。即ち當該部隊の戰鬪詳錄以外に於て、多大の趣味と、特種の利益とを與ふるものなるを認め、茲に記事に寄す。

植野騎兵中佐

これです。前に『後に、最初に出す』と申しました、提出者植野中佐の序といふのは。僕の口を極めて稱揚するのも、決して過大でないといふことが判明りませう。

(甲) 戰鬪の景況

(第一)第一線大隊

第一線大隊といふのは、一番前に出てをる大隊です。こゝでは、此聯隊の、第二大隊及第一大隊です。此の第一線のことを、又火線ともいひます。凡て此線といふ字は澤山に使ふ字で、其一帶とか、其處の筋といふことに當ります。こゝでは横の意味ですが、又

防禦工事の現今の戰爭に多く用ひらるゝ鐵條網、破壞兵器、狙撃兵器などは、明治文藝の一部に過ぎず、矢張り防禦工事の一種なるに過ぎず、時に露骨にして當時の實況を施したるものなり。

堅にも使ふことがあります。

一 戰鬪前彼我一般の情況及地形

昨年(卅七年)十月以來敵と相對し、彼我共に、堅固なる防禦工事を施しあり。防禦工事といふのは、敵を防ぐが爲に、土地を掘つたり、土を積んだりして、種々工事を致しますことで、其種類は數々ありますけれども、其を一々言ふときには、大へん長くなりますから止めます。つまり或る式の工事をして、其處を陣地としてをるのです。陣地といふことは、只其處を、兵隊が占領してをるといふのではなく、大抵は、工事を施してある意味なのです。で、然ういふところに向つてする戰鬪のことを、陣地戰といひます。之に反して、兩方で押出して來ての戰鬪は、それは遭遇戰といひます。しかし、ずん〳〵進んで往く間にも、土を掘つたり、掩蔽物を設いたりすることがあります。けれども其はちよいとのことで、防禦工事とはいひませぬ。唯掩蔽といふのです。諸君はたゞ、彈丸の間でもなんでも、ずん〳〵立つて進んでゆくのを、勇敢と思つて御いでかも知れませぬが、決して然うばかりのものではないのです。それは、進まなけれ

ばならぬときには、勿論進む。ずん〳〵進む。立派に進む。進み得ぬやうなことでは、勿論軍人ではありませぬ。日本男子ではありませぬ。けれどもです。當然なすべきことをしもせんでいす。無益に彈丸に中るやうなことをするやうなことでは、それは決して眞の忠勇とは謂へませぬ。考へても御らんなさい。八一人負傷をするとか、戰死をするとかしますると、直に小銃一挺だけが減るではありませぬか。即ちそれだけ敵よりも算數上で弱くなる譯です。で、歩兵にも工作教範といふものがあつて、平時から陣地の構造方や、掩體の造り方を教へられてあるのです。砲兵も自分でしますし、騎兵ですらもするのです。しかし、大な工事になりますれば、それは工兵でなければ出來ませぬ。

殊に、敵は、正面に於ては、半永久的の築城をなせり。

これは、敵は、我よりも、陣地を堅固に構へたのです。

軍隊で正面といふのは、敵に向つての、我軍なり隊なりの幅だけのところを謂ふのです。

勿論其幅での、敵までの間も謂ひますけれども、戰鬪正面が約何里に亘つたなどいふときには、敵と向ひあつてるところの、其横の長さが、約そ何里あるといふことなので

永久築城の一例を擧げれば旅順要塞浦鹽要塞の如きものです

す。此約といふ字、これは陸軍では、始終使ふ字であります。物數のおよそといふときには、大抵此約の字を使ふのです。

半永久的築城といふことは、詳しく言ふ日には大へんですが、先づ築城には、永久築城、半永久築城、臨時築城の三とほりありまして、其永久築城といふのは、永く後々までの爲に、或る最後の場合まで、十分に敵を防ぎ得るやうに、大事な土地にこしらへますものので、昔の城や、今の要塞がそれであります。で、こしらへ方も、一番念の入つたものであります。半永久築城といふのは、又假備築城とも申します。永久築城ほどではありませぬけれども、矢張堅固にこしらへますもので、戰場での大事の地にこしらへるのが常であります。臨時築城といふのは、何れも急造へにするもので、こしらへる方式も粗末であります。乃で此三築城には、各々澤山の種類があつて、物も形も違ふのですが、

② それを一々此に言ふ譯にはまゐりませぬ。諸君は築城といへば、皆立派な日本の城のやうなものと思ひなさるかも知れぬが、然うばかりではないので。臨時に此處といふ處に、砲臺や掩堡などをこしらへますのも、やはり築城の一部で、即ち臨時築城の中であ

ります。

彼我本陣地の距離は、遠きは千四五百米、近きは千二三百米、夜間に於ける潜伏斥候の如きは、互に五六百米に近接し、昼夜共双方の狙撃、小衝突絶ゆることなかりき。

本陣地といふのは、其處で敵を引受くべき本據の陣地で、其前には前哨といふが居ります。さうして前哨中隊からは、又小哨といふを出します。其前哨といふのは、やたらに戰闘をすべきものではありませぬけれども、敵が來たときには、成るべく長い時間十分に戰つて、それで、擊退し得れば其上ほないが、然うゆかないときには、本陣地に引揚げるのが常です。此前哨や小哨などのことを、總てくるめて、警戒部隊といひます。

距離、これに就ては一つ言はねばならぬことがあります。人は距離といふのも、間隔といふのも、只文字の違つたばかりで、同じくへだゝりのことゝのみ思つてをるかのやうに存じられますが、それが然うではありませぬ。兵語としては、全く別です。即ち兵語でいふときには、距離といふのは、跡後即ち縱のへだゝり、間隔といふのは、右左即ち横へのへだゝりなのであります。これを混同しては、大へんな違となります。

潜伏斥候といふのは、敵を偵察するといふよりか、潜れて居て、敵の動靜を視るのであります。

米といふのは、御せうちでもありませうが、我尺度(曲尺)の三尺三寸餘で、千米は約九丁、一里は、ざつと四千米であります。軍隊では、總て米で計算をしますから、これはちやんと記えておいていたゞきたい。

狙擊は、ねらい射ちです。

衝突といふのは、凡て只ぶつかりあつたといふほどの意味です。

然るに、攻擊前進前一二日間は、我攻擊準備の砲擊盛なるに反し、敵の射擊は一般に靜粛となり。攻擊前日の如きは、一發の狙擊の音をさへ聞かざりしを以て、或は退却を始めたるにあらざるやの感を起さしめたり。

攻擊の爲にする前進を、攻擊前進といひます。

攻擊準備の砲擊といふのは、ほんとうに攻擊に取かゝる前に、敵の勢力を挫く爲にする砲擊であります。細く言へば、其仕方は種々ありまするが、つまり我攻擊を、成るべく容

出攻擊準備には二十米榴砲珊瑚砲始め其他各種小火器使用

すこのみたので

易にする爲の下拵へであるのです。

靜粛は、しづかになつたことです。

退却――これに就ては、少し申述べて置きたいと存じます。退却といふことは、只敗けて逃げることを謂ふのではありませぬ。それは、退くことには相違ありませぬが、敗けないでも、故としなければならぬ場合が澤山あります。特に騎兵などは、多く然うなのです。ですから、我騎兵が退却したなどあつても、敗けたやうに思つては、大へんな違です。全體退却といふことは、目的を有つて、隊を整へてする、一つの後退法なのであります。尤も敗けてする退却もあるにはありますが、敗けたにしても、眞の退却といふのは、ばら〳〵になつて逃げるのではありませぬ。ばら〳〵になつて逃げるやうでは、それは退却ではない、潰亂であります。しかし、どうせ勝つて進むのではないのですから、退却といふのは、何れ大へんに困難をするのが、あたりまへのものなのです。往昔から退口がむづかしいといふのも、此事であります。で、志氣を張ることを第一としてある。戰場では、味方の退却は退却とは言はんで、背進と言ふやうにします。背進は背に進むといふ

こと、退却と何も違はしませぬ。それをさういふのは、何だか御幣でもかつぐやうで、をかしなやうにも思はれるでありませうが、それが決して然うではないです。戰場では、皆何れも神經が鋭敏になつてをりますから、一語といへども、忽にすべきものではありませぬ。で、昔時でも、武士の忌詞といふものがあつたのです。それを、昔時の舊弊人だからとか、今又僕の言ふことを、何のつまらぬとかいつて、せゝら笑つたりするやうな人は、それは全く、戰場の實情を知らぬからなのであります。

彼我中間の地形は、枯高粱及豆畑の、點々殘存すると、一二の獨立樹あるの外、一面開豁、眼に遮るものなきも、敵の第一線本陣地(南部沙河堡)は、稍〻低地に在りて、我より十分目擊すること能はず。

地形といふことを詳しく言ひますれば、むづかしくなりますが、一言にいひますれば、先づ地區と地物を含んだところの、地の現況であります。其地區といふのは、山だとか川だとか、其土地の自然の容で、地物といふのは、縱令天然のものでも、土地自然の容ではないもの、即ち木だとか、又は人の蒔いた作物だとか、或は土堤なり、家屋なり、總

て然ういふやうな人手をかけたもので、掩蔽といつて、つまり殘分人の身を掩ふことの出來るものなのであります。けれども、此に申しました地區といふことの說明は、これは地形學からのことでして、必ず斯うばかり使ふのではありませぬ。只何處から何處までといふ地の區域のことにも、やはり地區といふ文字を使つてあります。

枯高粱は、刈取つて積んである、高粱の稈だらうと思ひます。それとも或はまだ刈取らない、圃に立つてをるまゝのかも知れませぬが、兎も角廣い場所のうちですから、彼方に一かたまり、此方に一かたまり、見えたのでありませう。此高粱といふのは、高稷とでもいひますか、日本の黍といふのゝ大なやうなもので、高は一丈以上にもなつて、其子は滿洲土人の常食とするものであります。其稈は又、燃料にしたり、家根を葺いたり、垣根にしたり、馬や牛の飼にしたり、それは種々の用に充てられますので、彼地では、實に無くてはならぬ、大切のものなのであります。が、それが澤山に圃に生へてをりまするときには、戰鬪の際には非常の邪魔物で、我軍でも、屢々困らせられたことであります。

此枯高粱は刈取らないものを云ふのであつたのでつたもの

昨年秋露西亞軍と相對峙せしたる時土人の刈取ることのできなかつたもの

高粱は或は場合に取り除けば覽物で

獨立樹といふのは、目に著くやうな一本立の木です。

つまり右言ふ、高粱や、豆莢や、それから一二の獨立樹のある外、眼に入る物はなんにもない、廣々とした土地ではあるが、只敵の第一線の本陣地の在る處は、自然といくらか低くなつてあるので、此方からは能く見えなかつたといふのです。大陸の樣子は、これで實に能くわかります。

それから又、斯ういふ土地で睨合つてをるときには、兩方で防禦工事をするといふのはそれが一般に、然うすべきものなのであります。若しさうでなく、只陣地を占領したといふばかりのまゝなどでをつては、それは大へんに不利なのであります。

其一　第二大隊（基準大隊）

前までは、第一線大隊の全體に就て書いてあるので、これからは、更に內譯をして書かれたのです。で、先基準大隊を初にしてあります。

基準大隊といふのは、他の第一線大隊が、之に準ふべき譯のもので、基準大隊が何處きでか前に出て、其線に陣地を占むれば、他の大隊は其に準つて、其よりは出もせ

又或場合には遮蔽物を利用しますから非常に利益のものなります

寸引込みもせぬやうに、横に列つて進出るのであります。此基準隊といふのは、戰鬪展開のときには、必ず設けることになつてをります。展開のことは次に言ひますが、聯隊の戰鬪には、基準大隊を、大隊の戰鬪には、基準中隊を、定むることになつてをります。

素人向に云へば開進とは展開長なる軍隊行縱隊形幅廣きり横隊形に廣くこと縮めること

二　最初の展開及前進準備

さて此展開といふのは、散開といふのとは違ひます。散開といふのは『散れ』といふ號令で、規則の間隔をとつて、ばら〳〵ッと粗散に、一人並に並ぶのです。其粗散に横に並んだ一人々々のことを、散兵といひます。又其ずうッと横の一帶を、散兵線といひます。それとは異つて展開といふのは、敵と近くなつて、これからが合戰の幕といふ時に、敵の方に進んで、一地點まで行く、其隊の行り方です。又大部隊の開進といふことがあります。それはずッと遠い處から、敵と對する爲に、前以て定めてある土地に進軍して、其處へらに集まることを謂ふのでして、彼の鴨綠江の對岸にをる敵に向つて、第一軍が、朝鮮の平壤から、義州の邊に進んで、さうして義州附近の地に駐屯

なすべき爲に分隊ごとに縱隊と横隊とを區別し、なほ適當の距離を置くこと、開げる時は射擊に都合よきに全く横に廣くなげること云ふのです

をしましたこと、あゝいふやうのことをいふのです。

前進準備。これは、いよ〳〵此方の陣地から出て、攻擊に取かゝるまでの用意であります。

第二大隊（第五中隊缺）は、基準第一線右翼大隊となり、勝山藤本堡壘より進出することとなり、三月一日午後十一時、于家窪子の陣地を撤し、第一線散兵壕内に沿ひて側進し、各其展開地の後方に移轉す。

右の括弧の内に、第五中隊缺、といふことがあります。これは諸君も御ぞんじの筈の、聯隊の編制、あれでするとと、歩兵は、一個聯隊が十二個中隊で、中隊號は、大隊にかまはず推番號ですから、即ち第一中隊から第十二中隊まであります。それで聯隊は三個大隊でありますから、右の十二の三分の一が、各大隊につきますので、第二大隊は、第五中隊から第八中隊まであります。即ち其第五中隊が缺けてをるといふのです。此缺といふことは、是非これは書かなければなりませぬ。然うでないと、兵力が判明りませぬからです。それから又、何故これが缺けたのであらうかといひますと、こゝでは第五中隊

は、聯隊の豫備隊に取られたのであります。そこで此豫備隊といふことに就て、ちよつと一言述べたいのでありますが、それは後の豫備隊の條に譲りませう。

勝山藤本堡壘　これは勝山、藤本といふやうに讀むべき、支那人のつけてある名ではなく、我軍でつけた名だらうと思はれますから、假名も然う附けました。そこでこれは、勝山といふ山の、藤本堡壘とつけてある堡壘なのでありませうが、山は至て低い山です。山といふよりも、少し小高くなつてる、緩傾斜の丘といつてよいでせう。堡壘といふのは、此に一々説明する譯にはまゐりませぬが、つまり敵を防ぐが爲に、又敵彈の爲に味方を多く損せぬ爲に、ぐるりに工事を施して、其中に人數を入れて置くもので、昔時の言葉でいふとりでであります。

陣地を撤するといふのは、引拂ふこと。散兵壕といふのは、前に言つたやうな、散開したばら〳〵並びの兵士のはいるやうな、土を掘つてこしらへた陣地であります。其立つて射つやうに出來てゐるのは、立姿又は立射散兵壕、膝をついて、寄りかゝつて射つやうなのは、膝姿又は膝射散兵壕といひます。しかし方式はいろ〳〵あります。

勝山島川命名　又藤本堡壘と命名　本堡壘は聯隊大佐藤の時分　姓名に因んだ

それから、此には壕内に沿ひてとある。これでみると、後の方は較ゝ開けてある壕であつたらうと思はれます。此壕の中を往つたのは、成るだけ靜に敵に氣取られないやうに又射擊を受けても、人のいたまぬやうにしたのです。

側面縱隊　側面縱隊で進んだといふことではなく、側面縱隊でなければ進めません。そこで其側面縱隊といふことでせう。壕内を行くには、側面縱隊でなければ進めません。

側進　これは斜や側を向いて往つたといふことです。

側面縱隊　側面縱隊といふことです。諸君も多く見られてをる筈の、彼の四列や二列になつてをる細長い隊形、あのことです。道路の都合によつては、四列を三列に、二列を一列にもするのです。何故此縱隊を側面といふかといふと、根原横隊、即ち二人づゝ前後に重つて横に並ぶの隊形あれが本來なからであるのです。即ち横隊の側面した形の縱隊であるからそれで側面縱隊といふのです。此縱隊は行軍のときに用ふる隊形です。

展開地　展開地は、豫め、どの中隊は何處に展開するといふことを定めてある其地です。

第二大隊　そこで之を引きくるめて言ふと、第二大隊は、前にあるやうな任務を受けて、是までをつた千家窪子といふ處の陣地を引拂つて、一列か二列の側面隊形で、味方の第一線散兵

三ヶ月もかゝつて作つたのですから廣くもなく深くもなく幅もたかが深でせいぜつなさ
側進の解釋　此の側進は側面縱隊で進むのが普通の意味　執筆者は背進し側面縱隊で行進のもりでせう

の壕内を進んで、其展開地なる藤本堡壘の後まで移つた。そうして是から藤本堡壘の線にはいつて、それから進出しようといふ手筈であつたのです。

然るに右方に轉移して、大隊の右翼に連繫すべき某歩兵聯隊、尚ほ藤本堡壘内に在りて、豫て協商せし時刻に至るも、未だ轉移するに至らず、爲に大隊の運動頗る困難なりしも、其轉移を俟つの暇なく、一時兩隊散兵壕内に重疊するの已なきに至れり。

ところが、是まで藤本堡壘の處の第一線にをつた某聯隊が、第二大隊の往く前に右の方へ移つて、其あとへ第二大隊がはいつて、さうして右の某聯隊は、第二大隊の右翼に連繫すべき筈であつたのに、其聯隊はまだ移つてをらなかつたのです。此某聯隊といふのは、後備の聯隊です。

連繫といふのは、つながることで、共同の意味を有つてゐます。聯絡といふのとは少しく違ふ。聯絡といふのは、離れてあるところでも、又は同じ隊の間でも、脈をつなぐ、若くはつゞけるといふ方の意で、つまり連繫は手を握つて共に事をするといふ方、聯絡は只つなぎつゞくるといふ方です。此連繫といふことは、戰爭には實に大事なことであ

ります。例へば歩兵と砲兵とで、敵を攻撃する場合に、若し一方で、善く連繫して動作をする氣がなかつたときにはです、砲兵は、砲彈をむだに費してしまふことなりますし、歩兵は、肝腎の時に砲兵の助力を得ませんので、攻撃効を奏しかねるといふやうなことにもなるのです。又聯絡も然うです。若し味方との聯絡が絶えて、何の容子もわからぬやうになつてしまひますと、其隊はどうすることもならなくなつて、好い運動が出來なくなります。

さて本文の註譯に戻りますが、第二大隊はもう展開地の後まで來てをるところ。前からをつた後備の隊は、まだ其處にをつて、前日からちやんと約束してある時間になつても矢張ごた〳〵して引拂ひきれないのです。しかし第二大隊は、さういつまでも待つてをることが出來ませぬ。で、よんどころなく、まだ後備隊のをる其散兵壕の中にはいつたのです。ですから、一時は後備兵と第二大隊の兵とが、壕内に二重にかさなりあふやうになつたといふのです。此時の後備隊は、其だ混雜を生じたに相違ないです。どうしても後備となると、現役と豫備兵とから成る、所謂野戰隊のやうな譯にはまゐらぬと見え

ます。しかし敵から覺られもしなかつたところから見さすれば、流石に大聲をあげるやうなことはしなかつたでせう。

大隊は此狀況を排し、夜十二時に致り、第六、第八、第七中隊の順序を以て、藤本堡壘の線に達し、散兵壕内に於て、一列横隊に隊伍を整頓することを得たり。

前のやうな混雜の間をも推開いて、十二時までに、順々に散兵壕にはいつたのです。

一列横隊といふのは、言はずとも御わかりでせうが、對方に面つて、横に一人並になるのです。

整頓は、隊を整へるといふことですが、只整頓といへば、何でもないことのやうに聞えませうけれども、どうして軍隊の整頓といふことは、皆ちやんと其規則があつて、なかなかさうやさしいものではないのです。ところが、右に言ふやうな混雜の際に、狹くるしい散兵壕の中で、殊に長い〳〵一列横隊に整頓しました。それが畫でもあらうことか、夜であります。其上敵には覺られぬやうに、靜に〳〵したのです。第二大隊の熟練の兵であるといふことは、これでもつてもわかるのです。それから此整頓といふことは、最も

屢〳〵しなければならぬものです。

是より先大隊長は、各中隊長と共に先行し、豫て研究し置きたる（二月二十八日、大隊長は、各中隊長と與に、藤本堡壘に到り、大隊の展開正面及前進の方法、地形等を研究し、同時に右翼に連繫すべき某歩兵聯隊の左翼大隊長と、運動及展開、前進方向等に就て商議せり）第一據點構成及進出作業等に關し、現地に於て指示、區分をなし、中隊の到著と共に、左の順序方法に由り、作業を施行せり。

是より先は、前に戻つて言ふので、二月二十八日、即ち此戰鬪にかゝる前日に、第二大隊長は、部下の各中隊長を伴れて、藤本堡壘の處まで往つて、實際の容子を見て、明日は斯うしようあゝしようといふことに、ちやんと手筈を定めて、而して其事に就て、後備聯隊の左翼大隊、即ち明日は第二大隊の直ぐ右隣になる大隊の大隊長と、夫々打合もすましたといふのです。ですから、前に、協商の時刻に至るも云々といふ言葉も出たのです。

さて第二大隊は、もう展開地に來たものですから、中隊の段々はいつて來ると共に、大

隊長は、咋日手筈を定めたやうに、あゝ斯うと指揮をして、次の（イ）（ロ）のやうな、順序と、方法とでもつて、作業に取かゝらせたのです。

第一據點といふのは、先づ一旦其處を足溜とするので、ちよつとした陣地です。で、若し敵が盛に射つて來たときには、其處で應戰もするのです。ですから、若し其必要があるときには、又其前方に、第二據點をもこしらへるのです。

現地は、其地でゝす。

指示、區分。指示は彼處此處と指し示すこと。區分は何處から何處までと受持をきめたのです。

（イ）進出路開設　各中隊とも三箇所、即ち小隊毎に二列にて進出し得る如く、鐵條網の切斷（鐵線鋏を用ふ）及藤本保壘散兵壕超越路の開設。

（ロ）警戒　各中隊とも、各小隊より下士の率ふる五名の斥候を、第一據點の前方約百米に、潜行潜伏せしむ。此斥候は左右の聯絡を嚴にせしめたり。

（イ）の方

晝間に行つては忽ち敵に我が意圖を覺られます。それ故にその夜になつて行つたのです

小隊は、一個中隊に三つです。ですから、小隊毎に同じ時に出ようとするには、一中隊に三ケ所の進出路が要ります。で、先藤本保壘の防禦の爲に、自分の方でこしらへてあつた鐵條網を切つて、それから又、矢張自分の方の散兵壕を、敵の方に向て毀して、超越路、即ちのりこしてゆく道をこしらへたのです。

鐵條網は、諸君も御ぞんじでせう。鐵線鋏といふのは、鐵線を切る爲の鋏の名です。自分でこしらへてあるものを毀すといつても、二列の縱隊になつて出るだけの處ですから、幅は僅のものです。けれども夜ではあり、敵に知られぬやうに密とするのですから、相應に時間は要ります。それに敵の目前でするのですから、晝ではとても出來ることではありませぬ。

（ロ）の方

警戒といふのは、つまり用心をするのですが、警戒勤務といつて、種々な任務があります。こゝでは密と潜んで往つて、其處に潜んでをる斥候を、九組まで出したのです。聯絡は、特に嚴重にしたのであります。何故といふと、敵でも斥候を出さぬとは謂はれ

ませぬ。で、若し其敵の斥候が、味方の斥候と斥候の間をくゞつて、内にはいるやうなことでもありますといふと、味方の仕事は皆ばれてしまひます。で、若しさういふやうなことにでもなりますといふと、斯ういふ際には、特に非常に不利益だからであります。で、斥候と斥候の間には、絶えず聯絡をとつてゐたのであります。其どういふ仕方でやりましたかは、こゝには書いてありませぬから、推測では言へませぬ。

三

土嚢運搬及第一據點の構成

土嚢は嚢に土を入れたもので、前に記いて、彈丸を防ぐものです。これからいよ／＼第一據點構成の狀況を書いてあります。

第一據點は、藤本堡壘の前方約三百米の、我潛伏斥候の線とす。各中隊は、各〻約二百米の正面を領し、藤本堡壘より土嚢を運搬し、脆弱なる膝射散兵壕（土嚢二個排列）を構成せり。此土嚢運搬の爲め、各中隊は、小隊毎に小隊長之を指揮し、武器、裝具を藤本堡壘の線に整置し、徒手となり、各自藤本堡壘より、土嚢一個づゝを、第一據點に運搬、排列せり。此作業は、夜十二時三十分より開始し、同三時に終る。

其道は潛伏斥候長の相線野峠に自然とたてゝ其ままのぬかるみ線をしつかりとすぬきまで

土嚢は、藤本堡壘に構成しある、帽堡用のものを用ひたり。故に土を塡實する煩はなかりしも、堅く氷著し、脱取大に困難にして、意外の時間を要せし爲め、完全なる據點を構成する能はざりしは、遺憾なりき。

我潛伏斥候。これは前の下士の率ふる五名の斥候といふのとは違ひます。何故といふと前の潛行潛伏せしむといふ斥候は、第一據點よりも、更に前方に百米も出てあるからです。で、此に言　潛伏斥候は、これは前から後備隊で出してある斥候で、第二大隊と交代する譯なのでせう。其處を第二大隊は據點に撰んだことに思はれます。

脆弱なる散兵壕は、强固といふに對する語で、十分完全ではないのです。土嚢二個を排列したといふところから見ると、土嚢を立てゝ、前に二つ並べたこんに思はれます。更に强固にするには、手前を掘り前方に其土をかけて、成るたけ深く厚く、而して敵には判然とわからぬやうにするのですが、それまでには出來なかつたのです。そこで、前の方に土嚢を並べたばかりで、内の方を掘らなかつたといへば、壕は御せうちのほりといふ字ですから、壕といふのは訝しいやうに思はれるかも知れませぬが、强固にするのには、掘

此時期には二十三尺深く凍り付いて岩盤のやうな急造の散兵壕では、さういふ石も全く役に立たぬ。なるべく容易に土を掘り出すこと。

朝鮮の遠征の際、野戦築城上盛んに掩護壕を作つて兵員の安全を図つた。

るのでもありますするし、一間掘るつもりのヽで、又掘らなくとも、壕と同じ用をするのですから、それで壕といふのに差支がないのです。散兵壕には、内面に段があるのが普通で、一番上は、銃を載せて射つ處、其下の段は、臂坐といつて、臂をつく處で、尚其下に、腰をかける處などあるのもあります。けれども、此時のやうな急造の散兵壕では、さういふことも、無論出來なかつたでせう。

武器は、銃と銃剣。装具は背嚢やら、雑嚢やら、水筒やら、あヽいふ物です。整置は、ちやんと整へて置いたこと。徒手は空手です。

土嚢は一個づヽ運んだから、一人で二回づヽ、往つたり來たりしたのです。

胸墻といふのは、形によつて名づけられたので、藤本俊壘といふ一と郭の内の、一方に出來てをつたのでせう。土嚢は其處に使つてあつた物を使つたから、土を容れる世話はないが、しつかり氷り著いてしまつてをるから、剝して取るに、大へんに手間がかヽつたといふのです。

遺憾なりきといふことに就ては、據點ぐらゐに何もそんなに、強固にするにも及ぶまいではないかと思はるヽかも知れませぬが、それは然うではない。戦闘の模様によつては、此據點を、輕々しく見ることの出來ないやうに、ならぬともいへませぬし、且つは確實に、陸軍の生命ですから、それで、するだけの事をし得なかつたのを、遺憾に思はれた次第なので、至極好いことであるのです。

午前三時、各中隊は作業を止め、武装を整へ、第六、第八、第七中隊の順序に、第一線となし、第八中隊を基準とし、各中隊は、小隊毎に其進出路より、二列の側面縦隊を以て、極て靜粛に進出し、各其構築したる第一據點を占領し、全正面に散開し、午前三時三十分、全く前進の準備を了る。同時に各兵をして、携帯土嚢に、約半貫の土を入れしめ、前進の際携行の用に供せしめたり。以上の動作を終るまで、敵より一發の射撃も被らず、實に見るやうです。全正面といふのは、豫定した正面一ぱいです。こヽでは、大隊には豫備隊を置かんで、大隊長の率ひて往つた三個中隊を、殘らず散開さしたのです。

携帯土嚢といふのは、豫てから兵士が、其嚢を持たせられてあるのです。

そこで、さあ是から進まうといふまでの用意が、殘らず出來あがつてしまつたのです。

これまで一發の射擊も受けない。實に其動作の巧妙であつたことが知られます。

四　攻擊前進の動作

いよ〳〵これからが攻擊です。

午前四時、前進運動を開始し、各中隊は、前進準備の姿勢其まゝの隊形を以て、最初より出しある警戒兵を、廣正面に散開せしめて、搜兵とし、極て靜肅に連繫しつゝ前進す。約百米前進するや、敵の潛伏斥候より、十數發の射擊を受く。中隊は則ち一時停止伏臥し、搜兵をして、機を失せず該斥候を驅逐せしめ、同時に中隊も亦前進を續行し、敵の警戒陣地を距る約百五十米の地まで、殆ど損害を受くることなく、接近することを得たり。

前進準備の姿勢といふのは、兵卒の姿勢ではない、隊の狀態です。

最初より出しある警戒兵。前の九組出てゐる潛伏斥候です。

廣正面に散開せしめて搜兵とし、潛伏斥候であつたときよりも、すつ〳〵廣い間隔に散開さしたのです。搜兵といふのも斥候の一種で、先に立つて、敵に居ないかと注意ながら往〳〵のです。

驅逐は追拂ふこと。

整々肅々たる進軍の狀、想ふべしです。

此時右翼に連繫する某步兵聯隊、遂に敵の注意を惹き、忽ち警戒陣地（敵の沙河堡本陣地より、約六百米南方、大隊の正面にある敵の角面堡）及沙河堡本陣地よりの亂射を被り、爲に若干の負傷者を出せり。

遂に敵の注意を惹きとばかりあるけれども、路にでも迷つて、先行の隊でも見失つて、聲でも出したが、燐すでも摺つたかであらう。つまり後備隊の軍紀は十分に嚴肅とは謂ひ得なかつた爲であらうと思はれます。

これとは異ひますが、軍紀の嚴肅に馴れてゐる隊ですと、斯ういふときには、たとひ負傷をしたからといつても、其兵士は、決して聲などを出すことはない。それは自分の苦痛よりは、隊の不利益であるといふ念が、十分に染込んであるからです。こゝへらも、軍人精神の大事のところであります。

是に於て、各中隊は直に伏臥し、携帶土嚢に、附近の表土（約一寸の深は凍結せず、方匙

此心掛は最も大切なのです。然るに世間には能く知らない方が多いのです。

を以て掻集むるを得たり）を盛り、塡實して掩體となし、未だ一發の應射をなさず、情況を偵察し、匈匈斥候を出し、敵の陣地、兵力等を偵察す。偵察の結果、此敵の陣地は、全く本陣地にあらずして、孤立したる角面堡、即ち彼の警戒陣地なること、及此角面堡に、敵は多くも二百名に過ぎざること、又其前方に設けある副防禦は、極て薄弱なる拒馬、若くは鐵條網なること知得し、斷然此角面堡を奪取するに決せり。是れ躊躇せば天明となり攻擊一層困難となるの不利あればなり。

彼地では、冬は、地面が、深三尺以上も、非常に堅く凍結て、なか〳〵容易に掘ることなどは出來ませぬ。けれども、表土一寸くらゐは、宛然灰のやうですから、掻寄せることが出來るのです。で、附近の其表土を、力匙で掻集めて、前に半分土を入れてある携帶土嚢に、手早く入れて、一ぱいにしたのです。前に半分入れさせてあつたのも、斯ういふときに、速くさせる爲なのです。乃で其を前に置いて掩體にして、いくら射たれてもぢつとしてをる。これがなか〳〵豪いところで、此時若しもやたらに射出しでもしようものなら、それこそ兵力も、計畫も、皆敵に知られてしまつて、是までの折角の苦心も、水の泡

になつてしまうのです。又未熟な軍隊でありますと、斯ういふ場合などには、兎角誰といふことなく、射出したがるものなそうで、乃で若し一人が射出さうものなら、誰も彼も皆續いて射出すといふやうなことになるさうです。ところが精練の軍隊ですと、此第二大隊のやうに、如何に射たれようと、仆れようと、命令がなければ、射つやうなことがないのであります。

方匙といふのは、歩兵の携帶器具の中で、先が四角で少ししやくれてをる、ちようど十徳のやうな形の鍬です。

匈匈斥候。匈つて往くのです。此斥候のどんなに困難であるかといふことは、諸君にも御考がつかうと思ひます。敵には近い。而してもう覺られてをる。彈丸は降るやうに來る。立つて往つては、直に射られてしまうばかりでなく、近くなればなるほど、遂して見られてもわかるのです。そこを旨く匈つてまでも往つて、成るだけ速く、成るだけ詳しく、偵察を遂げなければならぬのです。非常に沈着いた、而してすることの敏捷い、膽のすはつた者でなければ、なか〳〵出來ることではありませぬ。

此等は戒壁を全く本陣地と同じく、障害物で居たのしかつたのです。本陣地は、たとへば、敵の本陣地だと思つてゐたのですね。

孤立は、ぽつんと一つあること。角面堡は堡の築り方での名です。

拒馬も鐵條網と同じく、障害物です。此等や、鹿砦や、狼穽などのことを、凡て副防禦といひます。

さて、是までは、此角面堡の處を、敵の本陣地だと思つてゐたのでせう。それは、是までは、意外絶間なく射ちあつてゐたのですから、さう深くはいつて偵察する暇にもいかなかつたのですし、いかに好い双眼鏡を有つてゐても、さう詳しくは判明るものではないからです。尤も地形にもよりますけれども、一體敵は、防禦工事に甚だ巧で、初め安東縣あたりにこそは、遠方からも判明るやうな、土耳古式の重層砲臺などいふものもこしらへてはありましたが、もう此頃になつては、我軍の手並の程も知つてをりますので、なか〳〵そんな迂濶なことなどは致しませぬ。飽まで此方にはわからぬやうに、わからぬやうにとするのですから、遠方からは、とてもさう細いことはわからなかつたのです。戰鬪は多く、夜進んで朝がけにする。それは損害を少くするが爲です。で、此にも、天明けると、攻撃が一層困難しくなるとあるのです。

騎兵の戰鬪に上馬戰は騎兵操典に即ち騎兵の馬上戰といふのことです

午前六時、各中隊は、同時に角面堡に向つて、卒然猛烈なる射撃を開始し、瞬時にして突撃前進に移り、多少の損害は被りしも、午前六時二十分、全く角面堡を奪取す。其奪取したる時の、各中隊の位置、關係、略圖（第一圖）の如し。

卒然は、にはかにです。

突撃前進。彈丸は射たず、銃に劔を著けて、吶喊して突込むのです。此歩兵の銃劔での戰爭や、騎兵の軍刀での戰爭、總て短兵接戰のことを、白兵戰といひます。それとちがつて、銃を射合ふことは、火戰といひます。又騎兵が馬から下りて、射撃で戰鬪をすること、それは徒歩戰といひます。それから騎兵の馬上戰、即ち白兵を揮つて乘込むことそれは突撃とはいひませぬ。襲撃といふのです。で、突撃といふのは、歩兵のこと、襲撃又は斬撃といふのは、騎兵のことゝ思はれてよろしい。

圖は前に申しました通り、別にこしらへましたから、此にある第一圖といふのは略しました。

五　敵の警戒陣地を奪取したる時の景況及我執りたる策案。

前項末段の狀況を、更に明細にいふのです。こゝへらのことなどは、全く戰鬪詳報にもないので、昔の軍書でも見るやうです。

敵は、我不意の攻擊を受けて狼狽し、或は帽子、或は彈藥盒、彈藥、銃器、或は食器、携帶糧食等を遺棄し、紛々として其本陣地に向ひ潰走せり。其兵力約二百、死傷詳ならざるも、天明に及び、敵の退路上に、四五名の戰死者あるを見たり。

我不意の攻擊。敵の警戒の十分でなかつたことが知られます。

此時の敵は、退却ではない、全く潰走したに相違ありませぬ。何故といふと、既に堡內に跳込まれてから逃げたとすれば、混亂は免れぬ筈だからです。

兵力約二百。前に偵察のところにあつた通りです。我偵察の如何に精確なるかが知られませう。

退路は、單に敵が逃げた路と見るよりか、退却のときには、其處を通るべき處と見る方がよいです。

此角面堡より、敵の本陣地までは、約六百米にして、敵方に降下する緩斜面をなせり。敵の

本陣地と此角面堡との殆ど中間に、又一連の膝射散兵壕あり、退却したる敵の一部は、此散兵壕に停止し、亂射せしが、此敵は、夜暗本陣地に退却せり。

此にも退却といふ文字二ヶ所にあります。前のは、只退いたといふ意味に過ぎませぬが、しかし兎も角其壕に就いて、再び射擊をしたといふところから見ますると、逃げながらも、幾分かは其指揮官が引纏め得たこと、思はれます。それとも或は、敵の本陣地の方から、別に收容隊でも出して、角面堡から逃げて來る彼の味方の爲に、掩護射擊をさしたのだかも知れませぬ。しかし然うではありますまい。さて此に始て言つた收容隊といふのは、味方の引揚を容易にさするが爲に、一地に止まつて、敵を喰止めさせに出すものです。しかし收容といふ文字は、種々な處に使はれます。それから掩護射擊といふのは、總て味方をかばふが爲にする射擊のことです。

停止といふのは、軍隊が其處にとゞまつたこと、とゞまることです。只休む爲のは、休止といひます。

角面堡を奪取したる瞬時、敵は其本陣地より我全線に亘り、殊に角面堡附近に集注猛射し

機關砲なる名は近時機關銃之攻稱せしまさをはした

其射彈甚だ確實、忽にして百餘名の死傷者を生じたり。是れ敵は、此附近を平射し得る如く、巧に陣地を構成し、且つ機關砲の主線を、此角面堡に對し、我此を奪取せば猛射せんと、豫て計畫しありしに由るものゝ如し。敵前僅に六百米、然も敵第一線の陣地は低地に在りて、我稍ふ瞰制の位置にはあるも、殆ど其隻影をも見ること能はず、射撃するに目標なく、據るに奪取したる角面堡の外地物なく、唯全く敵の猛火を受けつゝ、開豁地に伏臥しありしのみ。即ち幾多の死傷者は、此時機に於て發生したるものにして、一時は頗る悲慘の狀況を呈したり。

我全線に亘りといふのは、攻撃に向つた我隊の面一體といふのです。

射彈甚だ確實は、狙ひのよく定まつてをること。

平射といふのは、平面に掃撫でるといふほどの意味と見てよいです。

機關砲の主線。これは横への線ではなく、機關砲の彈丸の行く眞直の線で、其射撃の主な線といふことです。

目標は、目指す物といふほどに解釋してよろしい。此字は、種々な場合に、種々なものに使はれてあります。

射撃するに目標なく。敵兵の姿が少しも見えないのです。據るに地物なく。角面堡だけはあつても、其角面堡といつても、僅に二百の守備兵を設くくらゐな小なものですからそれにはいつたところが、攻撃部隊の幾分もはいれませぬ。其他は本文にある通りの處ですから、攻者の傷死の多いのは、已を得なかつたのです。

猛火は、猛烈な銃火です。

此線は、敵の豫て計畫したる、射撃の狙點たるべきを覺知すると同時に、此角面堡の前方約百米の線は、僅に防界線の形狀をなしあることを認知し得たるを以て、指揮官は、敵の狙點たる此地に停まりて、空しく損害を受くるよりは、前進間多少の損害を被るも、寧ろ前進するに如かずと決心す。時に降雪俄に到り、天色溟濛、我に前進の好機を與ふ。機逸すべからず。各指揮官即ち部下を鼓舞して、或は躍進、或は匍匐、或は數名、或は各個に、勇往邁進、遂に目的地點に達す。

どうも餘り敵の彈丸の命中りがよいので、指揮官は、はゝあ此は、敵が初から此處を、狙

點と定めておいたのだな、と覺つたのです。乃で前方を見ますと、一寸した一帶の地物があります。此地物は、本文に、認知し得たりとあるところから見ますと、遠くから見えてゐたものではなく、隊が此處まで進んで來たので、それで始て分明つたものと思はれますから、どうせ十分に掩蔽の出來るやうなものではなかつたのでせう。まあ圖の畝のやうか、又は溝がゝつてゞも見えたのでせう。乃で隊長は、これは却て其處まで進んだ方がよいと、斯う決心をしたのです。

防界線といふのは、つまり其處で一しきりになつてをるのです。

決心。此決心といふことは、常に誰でも言ふ語ですが、陸軍で言ふときには、普通言ふのとは少し違つて、も少し異樣の意味が含まれてあります。凡そ指揮官たる者は、北場合に應じて、直に適當の決心を取り得るやうに、其決心の取方に、かねて練習を積まれてある。つまり陸軍で言ふ決心といふのは、一の力とでも謂ひませうか。其習練の力に訴へて、此指揮官も、反て進むことに決心をしたのです。部下はばた〳〵やられる。彈丸は雨霰と降る。戰聲は熾んで、耳も聞えぬばかり、砂塵は濛々と揚つて、先の樣子が知れ

此種の前進法が即ち歩兵の新一戰術に算へらるゝ最も有利の前進法です

ませぬ。さういふ間に立つて、直に有利の決心を取る。これはなか〳〵容易のことではない。餘程しつかりした良將校でなければ、むづかしいことです。

躍進といふのは、一種の進み方で、散開したまゝの隊形でするのです。中隊でするのも、小隊でするのも、又に幾人かづゝ、或は一人々々にするのも皆同じことですが、つまり三十間なり五十間なり、又はもつと短くなり、或る距離を駈けて往つて、其處に停止つて伏姿なり又は膝姿なりをして、又駈けて往つては然うし、又駈けて往つては然うしするので、損害を少くする法なのであります。乃で若し小隊でゝもするときには、隊を二つにも分けて、片一方が駈出していつて、停止つて射擊をしてある間に、殘りの片一方が駈出して、其側を駈過して、前にいつて停止つて射つと、又前のが駈けて來て、通り過ぎて前にいつて停つて射つといふやうに、跳ごつこのやうな工合にもすることがあります。此は駈けて往く間にも、此方の射擊を絶やさぬやうにするのですが、しかし全く射たずに往くこともあります。殊に各個即ち一人々々の躍進などには、外の隊でゝも射つてくれゝば格のこと、先づ射つことはありませぬ。其片一方の駈けてゆ

く間に停止つてゐてする射撃、それが即ち掩護射撃といふのであります。

それは措いて、此の時の進みかたの區々であつたことは、本文にある通りです。諸君は或は、大隊なら大隊で進んで往くには、ちやんと皆揃つて列を正して進んでゆくこと、彼の練兵場でするときのやうなものとでも、想像されてあつたかも知れませぬが、實戰には、さうはいきませぬ。かういふ烈しい戰場にあつて、外觀の美を衒ふやうなことでは、それは却てだめであります。それは因より、ばら〳〵にして、指揮を取り得ぬやうなことには、させませぬけれども、さう觀兵式のやうな譯にはゆかない。つまり實際に適つた、損害を少くする方法がよいので、其仕方は各指揮官の隨意に任されてあります。

此前進に於て、死傷者三四十名を出せり。

けれども只射たれて、此よりもつと損害を多くするよりは、大へんによいのです。

第八中隊長河野大尉の重傷を受けたるも、實に此時にあり。大尉は、左眼より左耳下に敵彈を受け、北脫球したる左眼を抑へて聲色變せず、靜に小隊長に向ひて曰く、敵情は如何中隊の損害は幾何、予の指揮宜きを失したる爲め、多大の損害を受けしならん。予は今唯

大尉の言一々肺腑より出つ之を聞て感ぜざる者はなしあらさるなり

一彈を蒙り、君等を捨てゝ第一線を退く、遺憾何ぞ耐へん。予は實に謝すべき言辭を知らす。乞ふ自愛せよ。と、言々肺腑より出で、聞く者をして感激措かざらしめたり。

此時敵の射撃のどんなに烈しかつたかといふことは、僅五十間ばかりの處を、本文のやうに種々の前進法を取つてしたばかりでなく、雪が降つて來て見通しもつかなかつたといふのでも分明ります。

脫球は、眼球が脫出したことです。

河野大尉の言はれたことは、僕等は實に涙を以て聞くのです。中隊長は、平時から實に中隊の父なのです。中隊長の方でも、又部下の方でも、其情の濃なること、實に傍人からは想像し得られないものがあるのです。ですから、此河野大尉の辭の如きは、是れ決して通常一片の形式的のものなどではありませぬ。實に〳〵全く其眞情から出て、自分の重創をも忘れてのことなんです。それですからこそ、聞く者をしても感激措かざしめたのであるのです。

時に降雪益〻甚しく、一面銀世界に變じ、寒氣强烈骨に徹す。加ふるに、敵は我突撃を

恐れしに因るか、全線更に猛烈なる射撃を續け、飛彈眞に霰の如く、其射撃亦頗る確實なりしが、唯敵は我前進に對し、其照準點を變更せざりし如く、單に胸墻の頂斜面に銃を依托し、平射を行ひしものならん、初め角面堡附近に伏臥しありしときは、殆ど頭部を通過したる敵彈、今は縱に高く、大概帽の上線を掠め去るに至れるを以て、稍々死傷者を減ずることを得たり。

照準は、狙いをつけることです。

胸墻は、堡壘の前の方にあるものです、まあ土堤ですが、敵は其に倚つて射つのです。頂斜面といふのは、其土堤の上の平な處で、敵の方に向けて幾らか低くしてあるものです。それだから斜面といひます。銃を依托するといふのは、其頂斜面に載せることです。さうすると、手も疲れませぬし、動搖きませぬから、狙がつけよいです。これで見ると、敵は雪の爲に、我隊の進んだことを知らずにをつたであらうと思はれます。成る程前進の好機であつたのです。

該地點に達せしも、尙ほ敵の隻影をも認むること能はず、敵は掩蓋下の銃眼より射撃する

ものゝ如し。之に反し、我は携帶十囊の大部は、先に既に、角面堡攻撃の際使用し盡せり僅に剩す土囊に少量の表土を容れ、之を以て一部の掩體となしたる外、何等拠るものなく殆ど平濶なる氷雪の上に伏臥し、堅氷石の如き土地は、工事を施すに術なく、寒氣は刻一刻酷烈を極め、困苦の感、一時は殆ど其極に達しき。

いかに大雪にはなつても、其間には小歇もある、殊に近いことではあるし、敵が身を出して射つてをるなら、一人も見えないといふ筈がないに、それが見えないのです。で、これは掩蓋下の、銃眼から射つてよこすのだらうと思つたのです。掩蓋といふのは、前に言つた胸墻の内面に、砲彈殊に榴霰彈を避ける爲め、屋根を掛けてある其なんです。銃眼は射撃をする爲の孔です。屋根の掛つてをる下に居て、孔から射つのでは見える譯がありませぬ。

工事を施すに術なく。實に氷結つた土の堅いことは、大な鶴嘴でも容易にはたちませぬ況や此は歩兵の携帶器具で、且つは起つてをる譯にはいきませぬから、臥てゐてする仕事です。とても掘ることなどの出來よう筈がないことは、僕も實地を見て知つ こをりま

す。實に此時の如何ともすべからざる狀は、察せられるのであります。困苦の感一時殆ど其極に達しきといふのも、いかにも然うであつたらうと同情に堪へませぬ。

然れども當時の情況に於て、身を起して（射擊せんには、之を爲し得るまで身を起さゞるべからず）彼と火力は競ふは不利なり。殊に左右の連繫をも顧ずして、無謀の突擊を試むる如きは、恰も火中に投ずるに等し。是に於てか已むなく精神を勵まし、士氣を鼓舞し、強忍以て現狀を維持し、日沒を待て工事を施し、較〻完全なる射擊陣地を構成して後、更に敵情及其陣地の偵察を確實にし、以て攻擊の計畫をなすに決せり。

火力は、火兵の力で、即ち小銃を射ちあふことです。

火中に投ずるが如しは、誰も謂ふ火の中に飛込むやうなものだといふことです。

此時は、地面にべつたりとくゝつついてゐたのです。戰爭は、却てどん〳〵小銃を射ちあつてゐる方がよいので、此時のやうに、敵には存分に射たれながら、寒氣と戰ひ、飢と戰ひ、身動きもし得ないでぢッとしてをる。こんなやうなときが實に一番につらいいやなものなのです。斯ういふときには、指揮官は、大に士氣を鼓舞しなければならぬ必要

があります。

現狀維持は、此まゝで持耐へてゞす。

六　隣接部隊との聯絡

大隊の右翼に當るは、某歩兵聯隊にして、二日午前三時四十分頃前進を始めしが、當夜月なく且つ霧れず、黑闇々として咫尺も辨じ難く、運動及聯絡上頗る不便なりしに加へて某聯隊運動の狀況、更に聯絡に困難を與へしものあり、午前七時、即ち大隊の敵の警戒陣地を奪取したるに後れて、漸く確實となるを得たり。

後備隊では、既に交代のときに混雜を起したくらゐですから、其後の動作も、成るほどはめられたものではなかつたでせう。

左翼は我第一大隊にして、第一據點に於て既に確實なる聯絡を保つ。兩大隊は、豫て其前進目標と、聯絡線を商議しあり。之に據り連動したるを以て、天明前一時聯絡の確實を失したることあるも、直に雙方より互に聯絡斥候を出し、氣脈を通じたるを以て、忽ち回復せり。

前進目標。聯絡線。攻撃前進のときには、第一線部隊では、前進目標を定める。即ち此でも其何ものをめあてにして進むかといふことゝ、何處で如何して聯絡することにしようといふことを相談をしたのです。

後備隊よりも、左翼大隊とは、尙更親密に相談をしてあつたやうに見ゆるのは、同聯隊で、攻撃點も同じであつたからであるのでせう。

聯絡斥候は、聯絡を取らする爲の斥候です。

次に第二大隊中での聯絡です。

大隊内に於ける各中隊は、其間隔十米以内、一連の散兵線をなし、互に確實なる聯絡を保持しつゝ前進し、殆ど間然する所なかりき。是れ攻撃の前日に於て、各中隊の展開、占領すべき正面、大隊の協同目標、基準中隊攻撃前進の方法、要領に就て、大隊長及各中隊長深く研究審議し、互に能く協同したる結果なりと信ず。

其間隔十米以内は、中隊と中隊の間隔です。

協同目標。大隊は聯隊の命令で、何處を攻撃せいといはれる。乃で又大隊長は、其命せ

敵の火点停止中にして我射撃を開始する時は、若し痛ければ、賞賛に値するほどに、いきぬいて理解すらできぬ

られた攻撃目標に對して、各中隊に、何處から何處までは何の中隊といふ工合に分配てる。之を目標の分配といひます。斯ういふ風にして、大隊内の各中隊が、みんなで動作する一帶の攻撃點、それが即ち大隊の協同目標であります。

七　對陣中彼我の景況及工事

第四項に述べし如く、決戰陣地を占領したるも、目標とすべき敵の隻影だも見ることを得ざれば、射撃をなすの心神を慰するものなく、二日午前十時より、唯氷上に等しき地上に伏臥して、雪の埋むに任せ、殆ど蠢動の餘地だになき敵彈と、塞氣の苦艱中に日没を待ちありしに、敵火は稍ゝ緩徐に傾き來れる午後の二時、速に沙河堡を攻略すべき命令に接す

決戰陣地。此決戰陣地といふ上には、所謂といふ二字のあつたのを、それをつひ落したのではなからうかと思ふのです。此決戰陣地といふことに就ては、英國での南阿戰爭後、大へんに議論のあつたことです。けれども其は、此處で言ふの要がない。つまり此處では、射撃の力の限を爭ふ陣地と思はれてよいです。

此處での目標は、射撃の目標で、攻撃目標といふやうな廣い大なものではありませぬ。

此時に於けるは工兵も亦の任務大なるも且つ困難なるものあり

本文にある通り人なのです。

心神を喪するものなく、前にもいつた通り、唯射たれてぢつとしてをるほどいやなことはないです。同じ亂丸の中に在つても、射擊をすれば、大に氣分がちがつて來るものです。

隨て志氣も引立つものですが、本文にあるやうで、其も出來ないといふのです。

攻略は、攻取ることです。

仍て先づ附屬せられたる工兵將校を派して、將校斥候となし、敵陣地の偵察を行はんとせしに、此斥候進むこと未だ二十米ならず、忽ち又敵の猛火を受け、工兵將校以下四名の負傷者を生じ、終に目的を達せず。

素より攻擊前進であるのですから、此隊でも爲し得れば攻擊する積りであつたこと無論ですが、情況が許さなかつたので、それで更に偵察をも加へて、時機を俟て進出しようといふ覺悟でしたのです。ところへ速に攻略せよといふ命令が下つたのです。さういふ命令が來ては、もう猶豫は出來ませぬ。で、幸に此時には、此前の本文にある通り、敵の射擊もいくらか緩徐になりかゝつて來ましたから、先づ此歩兵大隊に屬けられてあつた

此中隊が前火なる勇猛にして前進せしに狀況當時なる國子八家子國に對し上なしよりも其勇壯なる動作に感歎したり

工兵將校を、偵察に使つたのです。

將校斥候は、將校の率ふる斥候で、其將校のことは、斥候長といひます。下士官の率ふる下士斥候も、やはり其下士官は、斥候長といひます。

此時聯隊豫備たりし第五中隊、大隊長の指揮下に入り、數多の死傷と大なる困難を冒し、大概各個躍進をなしつゝ、恰も四本木の絲に達せり。

最初に第五中隊缺くとあつた、其第五中隊が、戻つて來たのであります。しかし戻つて來たといつても、只戻つて來たのではありませぬ。聯隊長は、攻擊命令も下つたことでありますし、第二大隊の情況に鑑みて、其手許の預備隊から、第五中隊を抜いて增援せしめたのです。それだから、復歸とはいはんで、大隊長の指揮下に入りと書いてあります。指揮下に入るといふことは、其人の命令を聽くことになつたのです。それから此處では用のないことでありますけれども、指揮者のことに就て一寸言つて置きます。若しも某隊と某隊と混じたやうな場合とか、又は同一指揮の下に、いつしよに事をするやうなことになりましたときには、別段誰の指揮下に入らしむといふやうな命令がないに

世間では陸軍部隊の番號を稱ふるに

しても、高級の人が其指揮を執るのが通常で、若し同階級の人があつたときには、故參といつて、早く其階級になつた人が、指揮を執るのであります。これが陸軍の規則であります。

各個躍進は、前に言つた、一人づゝにする躍進です。

四本木といふのは、木が四本生へてゐたからでも命けた名なんでせう。聯隊の陣地から今第二大隊の居る處までの、間の土地と思はれます。

乃ち直に其先著一小隊を、大隊の左翼に延伸增加をなさしめ、他の二小隊は、先づ四本木の線に在りて、豫備隊たらしめ、午後三時、南部沙河堡の敵陣地を目標として、全線猛烈なる射擊を開始す。

先づ先に來た一個小隊を使つたのです。此で一寸御話をしておくことがあります。此書き方のやうに、先著一小隊とありますれば、それは一番先に著いた一個小隊といふことが、十分に明瞭でありますけれども、只一小隊とか、二中隊とかのみ書きますといふと隊の番號だか、數だかゝ、紛らはしくなるのです。で、陸軍では、番號のときには必ず

往々「第」の字を省ず例へば第三聯隊といふべきを第三聯隊と言ふ如き者然あれども第三聯隊は第三聯隊と云ふことを云ふかと云ふことは間違ひなく然るに列間遂に生じ易く平時の聯隊は横隊なるは聯隊の使はまはせぬ

第の字をつけて、第何中隊といふやうに書き、數のときには、數の下に個の字をつけて何個中隊といふやうに書くのです。

延伸增加といふのは、戰線に兵を增加させる方法の一つで、其增加隊でもつて、戰線を延伸す、即ち正面を廣くするのであります。此は左翼とありますから、今までの左翼中隊よりも、更に左に其小隊を散開さしたのであります。又伍間增加といふのがあります。其は、死傷の爲に人の減つてしまつた處の、其間々に入れるのです。

此本文で見ると、四本木の線は、距離の關係からか、又は地形の關係から、いくらか豫備隊の損害を減じ得る處だらうと思はれます。

猛烈なる射擊。これは射擊の仕方ではなく、次の劇甚などいふと同じことで、つまり烈しいといふことなのです。どの、くらゐの烈しさといふ、程度に定りはありませぬ。風には、氣象の力からいふと、強風、暴風、颶風など、夫々、風速のきまりもありますけれども、此は單に形容です。けれども、猛烈なる射擊といひ得べきものは、蓋し速發射擊と、急射擊でありませうが、連發射擊といふものは、長くするものではありませぬから、此猛烈なる

射撃といふのは、各個の急射撃の外はあるまいと思ひます。又一齊射撃といつて、一々指揮官の號令で射つのも、仕方によつて絶間ないやうにやりますれば、これも隨分猛烈なものではありますけれども、これは我軍では、めつたにはせぬのであります。

敵亦最も劇甚なる射撃を以て應じ、毫も動搖の色なし。此の如きこと約三十分にして、我は一時射撃を中止す。此射撃間、我死傷約三十名を出せり。敵の射撃は尙ほ止まず、午後四時頃に至り、稍〻沈靜に歸せり。

毫も動搖の色なし。此色といふことが大事のことで、此色を見るのが、即ち機を見るのでありますけれども、此は口でも言へませぬければ、筆でも書けませぬし、示すべきものもなく、喩ふべきものもないのであります。老練か又は天才でなければ、とても此機といふものは察しられませぬ。故立見將軍などは、此機を見ることに、異常に鋭かつたといふことです。僕が曾て立見將軍に御逢ひ申して、突擊の時機を御聞き申したことがあります。其時將軍は、口では何とも言はれぬけれども、何となく敵色が動いて來るといふことを言はれました。本文の攻擊でも、敵色が動きさへしたならば、突擊にも及んだ

攻擊を戰術上及び戰略上に應用する問題は、仔細に明かなるが如く、なかなかに難しかるべし。戰略と戰術との連絡は、心一つにて明瞭なるもの、此點は、なほ研究の餘地ではあるまいか。

のであらうと思はれます。

當日は、其まゝ終に日沒に至る、日沒と同時に、敵は又全線の猛射を開始し、逆襲に轉じ來るの情勢あり。

逆襲といふのは、今まで防禦の位置に居た者が、反對に攻擊にやつて來るのであります。そこで此攻ると守るといふことに、各々二樣あることを御話しておきたいとぞんじます。

これは素人側では、よく間違ふことのやうに思はれるからです。さて、軍全體からいつて、進んで攻るといふ方に方針を取ること。これは戰略上から出ることでありまして、同じ攻るながらも攻擊とはいひませぬ。攻勢といふのです。廿七八年役でも、卅七八年役でも、我陸軍は此攻勢を取つたのであります。しかし攻勢は取つてもです。非常に廣い場面のことでもありまするし、時と場合と地所によつては、さう何處も彼處も、何時でも攻るといふばかりにはまゐりませぬ。さういふときには、攻勢方略の一部として、或は攻擊計畫の一助として、又或は一時の權略として、或部分は、防禦の姿勢に居らなければならぬことにもなるのです。乃でさういふ場合に於ける防禦は、防禦は防禦でも、

攻勢防禦といふのです。しかし此は大い戰略上からの名でありますから、小な部隊の戰鬪などには、一々攻勢防禦などいふ、大袈裟なことは言ひませぬ。そこで攻擊といふことですが、攻勢を取つてをる軍にあつては、言ふまでもなく攻擊が主です。しかしもう攻擊といふことになりますと、攻勢から割出された、實際の行動になりますから、もう戰略ではなく、戰術の範圍になるやうです。尤も戰術にも、師兵術、部隊戰術などの區別はありますけれども、兎も角攻擊といふのは戰術の上から、攻勢といふのは戰略の上からの名のやうです。此二つを混同してはいけませぬ。それから攻勢と反對に、戰略の上から守る一方にかまへること、此は守勢といひます。其守勢によつて、戰鬪も守るを專一とするもの、之を專守防禦といひます。けれども其一部々々では、時々攻擊も行ひます。これを攻る方の側から言ふと、逆襲といふのです。守る方の側からいつても、逆襲といひ得ぬことはありますまいけれども、僕はまだ逆襲せよといふ命令といふものは、一回も見たことがありませぬ。露國軍の命令などを見ますと、何れも逆襲とはなく、攻擊せよとあるやうです。此逆襲は、奪られた處を奪還す爲め、又は寄せて來た敵を擊退

ふ爲にすること多いのですが、若し逆襲が勝つて、どん〳〵追擊でもするやうなことになりまするとこんどは守勢から攻勢に轉ずるやうなことにも、ならぬではないのです。ですから守るといつても、唯防ぐばかりのものではなく、攻ひるといつても、唯攻擊を加ふるばかりのものではありませぬ。といふことを、御承知置きありたいと思ふのです。

敵の逆襲は我最も歡迎する所と、一同十分の準備をなしありしも、終に來らず、午後九時頃、全く沈靜に歸せり。

進んでゆくよりは、敵の來るのを俟つてをる方世話がないから、得たりかしこしとまちかまへてをつたのですが、待ちぼうけで、射擊もしづかになつてしまつたのです。

是に於て、極て靜肅に防禦工事に著手す。

もう敵も來さうもなく、射擊もしづかになつたものですから、此折にと、工事を始めたのです。

北方法、各中隊は、小隊毎に約半數づゝ、角面堡奪取の際使用したる携帶十鍬の位置に到らしめ、表土を塡實して運搬し來らしむると共に、尙ほ奪取したる角面堡に用ひありし土

時々敵が全線の猛射を始めたのは恐らく我が方の疑心暗鬼を生じたのであらうと思はれる。

嚢等を利用せしめ、一方に於ては、排列したる土嚢後の掘土をなさしむるにあり。

これまでが、方法の説明です。斯ういふ、隊でした方法などは、とても餘所の記事に、見得らるべきものでないのです。

此の如くして、土嚢は午後十時頃、各人一個を配置し得たりと雖も、掘土作業は土地凍結堅きこと石の如く、到底遂行することを得ず、然れども、夜間の寒威實に酷烈を極め、默止するときは、忽ち凍傷に罹るの恐あるを以て、掘開の効はなきも、採既の目的より、終夜兵卒を督勵して、運動を繼續せしめたり。

實に彼地の寒氣は、想像以外であります。

此掘開作業の音響を聞きし爲か、夜十二時、敵は又全線の猛射を始めたること、日沒時に於けるが如し。其射撃中止するを俟ちて、又各小隊約半數づゝを使用し、藤本堡壘に到り、十嚢を運搬せしむ。斯の如くして拂曉に及ぶ頃、一列の土嚢を排置することを得たり。拂曉と共に、敵は又前の如く猛射を始め、天全く明なるに至る。

拂曉は明方です。

此の一夜の作業間、我受けたる損害は僅に數名に過ぎず。又、夜闇を利用して、敵陣を偵察せんとしたるも、咫尺を辨せず、且つ敵の射撃に妨げられ、終に目的を達すること能はざりき。

迷に攻略といふ命令は受けても、強い敵に向ふと、さう易々とはゆかぬのです。これが決して、此方の勇氣の足りないのではありません。無理な戰闘をして全滅するのも、善惡の場合があります。それを知らないで、只彼の講談物などのやうに、華々しいことのみを夢想するなどは、土嚢戰闘といふものを知らぬからのことです。然も苦みは、反て斯ういふ忍耐の時にあるのです。

此夜一同最も歎賞したるは、午後九時過、後方より搏飯の到著したること是なり。最初は其橙大の搏飯一個を、三名若くは二名にて分食せり。搏飯は既に氷結を催せしも、却て其氷結を歓迎せられたり。是れ之を口にすれば、融解して水となり、多少の渇を醫することを得たればなり。此一事を以ても、如何に渇し、如何に饑ゑたるかを知るべし。

たつた一つの搏飯を、三人にも分けて食べて、然も其が凍りかゝつてあるのを、口の中で

入れると、融解ていくらか水氣があるといふので、皆非常に歎んだのです。戰場の苦は、實に餘人に知られませぬ。國に居て、暖にしてゐた者は、よく〳〵察しなければならぬのです。

三日雪晴るゝ。寒氣嚴烈と雖も、前日に比すれば較〻寛なり。敵の射擊亦熾烈ならず。隨て死傷者極て少く、不完全ながらも前夜の工事は、大に我力を增加し、昨日の地獄世界は、比較的今日の樂天地となり、兵卒は伏したるまゝ、或は掘開作業を繼續するあり、或は堪へかねたる眠を貪るあり、或は雪を掻集めて、渴を凌ぐの用に供するあり、稍〻氣力を回復するを得たり。

實に其狀見るが如しではありませぬか。けれどもです。尙ほよく考へて御覽なさい。此樂天地といふのは、どんな樂天地でありませう。掩體は出來たといつても、まだ〳〵低いので、何をするにも、伏てゐてしなければならぬのですし。それに食るものは少く、火の氣などは勿論ない。風吹けば吹かれるまゝ、雪降れば降られるまゝでゐるのです。比較的とはありますけれども、それでも樂天地と思ふのです。諸君は之を、どう御覽に

此事實際奇異ニ堪ヘザル所ナリ。其時戰場ニ在リシ者ニハ知ラレタルモ、信ジ難キ所ナルベシ。

なりますか。熾烈は、甚だ熾なること、比較的は、くらべてはの意です。

然るに、此に一の困難を生じたるは、大小便のことなり。少しにても身を起せば、忽ち猛射を被り、死傷を生ずと謂ふ狀態なれば、大小便をなすの術なく、多くは耐忍して夜を待ちしも、之を禁ずる能はざる者は、已を得ず臥しながら放尿せり。放尿すれば、其部分多少解氷す。乃ち之を幸として、機を失せず掘開し、散兵壕を强固にせり。小便は此の如くして便利を得たるも、大便に至りては、之を如何ともすること能はず。終に一策を案じ儲詰殺を則となし、用終れば之を敵方に投擲し、或は紙を敷きて則となし、用終れば徐に之を包み、敵方に投擲するを例とせり。

どうです。これほど詳細い實際の記事は、御覽になつたことがありますまい。しかし此を讀むとです、いかにも其困難の狀は察しながらもです、どうしても笑はずにはゐられませぬ。殊に小便の便利などいふに至つては、古今獨歩の名諧です。

午後二時頃より、敵は極て靜肅となり、是まで一傳令を見るも、猛射したりしもの、其射擊さへなさゞるに至れるを以て、或は退却したるにあらずやとの疑を生せり。仍て直に

出生後二名の斥候は賀の亀鑑斥候さすべきものです

五名の決死斥候を編成し、各個躍進を以て前進せしめたり。

決死斥候といふのは、斥候の種類の名ではありませぬ。決死者を募つて、斥候に出したのです。編成といふのは、こしらへたことですが、陸軍では、編制、編成、編組などいふ語があつて、皆其使用所が異ひます。

此斥候の進出を始むるや、敵は又突然猛射を始め、忽にして二名は戦死し、一名は負傷し他の二名亦裝具に数彈を受けしが、此二名は幾に脱して、前方三百米の散兵壕（敵の陣地と我陣地の中央にあるもの）に達し、死を擬して其地に在り。午後九時頃静穏となるに及び、更に潜行前進して、敵の陣地前五十米に在る、鐵條網の線に達し、尚ほ各部を偵察し午後十一時歸還して、左の報告をなせり。

死を擬しては、死んだまねをしてゐす。斯んな苦みをしてゐも、其まゝでは歸りませぬ。斥候の任務を果す爲です。決死斥候の名に負かずと謂ふべしです。尤も斥候は、皆此くらゐの覚悟がなくてはなりませぬ。

（イ）敵の鐵條網は、二重乃至三重、然も一連不斷にして、深く侵入するを得ず。

此斥候亦能く困難なる任務を達したるものとなればならねば

一連不斷は、進出路もなく、とざれめもないのです。

（ロ）敵は其散兵壕全線に亘り、談話の聲喧しく、退却したる狀況なし。

（ハ）敵の散兵壕は二重なるが如し。

此（イ）（ロ）（ハ）が、報告の本文です。

又當日、夜一時に出したる斥候の報告左の如し。

（イ）奉天街道より潜行して、敵の散兵壕に接近したるに、散兵壕の前方約七十米に複哨ありしを以て、尚ほ潜に窺ひありしに、暫時にして交代兵來り、交代したる者は、本散兵壕に向つて去れり。其より、我は尚ほ東方に潜行したるに、散兵壕前に設けある鐵條網に沿ひて、約五十米間隔に、單哨あるを認めたり。

複哨といふのは、歩哨が二重に立つてをること、單哨といふのは、一人づゝ立つてをることです。複哨は單哨よりも、警戒の厳重なのです。尚ほ此處で此哨兵のことに就て、一寸申述べておきませう。前哨中隊から小哨を出すことは、前に既に申しましたが、更に獨立下士哨といふものがあつて、これも普通は、前哨中隊から出すものです。

此下士哨は、小哨よりは稍〻小なばかりで、職務は、小哨と略〻同ものです。又唯下士哨といふものがあります。それは、必要に應じて、小哨から出すものですそれから又歩哨は、小哨から出すのもあり、又下士哨から出すのもあります。それから小哨の警戒の爲には、銃前哨といふものを置きます。これは小哨で、又銃といつて、組め一銃してある處に置くのです。又査哨といふものがあります。これは前哨司令官が、之を置く用があると思ひますと、置けと命ずるのであります。査哨といふのは、歩哨から送つて來る降參人や、軍使や、疑はしい人間などを受取つて、前哨線を通らせてもよい者は通らせるし、其外は小哨に連れて往つて、引渡すものです。前に前哨中隊のことは申しましたが、前哨司令官のことを申しませんでしたから、此にちよつと附加へて置きませう。總て前哨には、前哨司令官といふものがあつて、前哨本隊を率ひてをります。前哨中隊は、其前哨本隊から出すのであります。前哨といふものは、先づ斯ういふやうな譯のものでありますが、しかし本文のやうな、敵ノ鼻を突合してをるやうな、戰鬪中の部隊では、散兵線が即ち警戒線で、唯斥候を出すばかりのことが多いのです。

此命令の變化には深き意味があつたのでせう

それから各哨所をまはつてあるく、巡察といふ勤務があります。これは多く將校ですが、たまには、下士官にも命じます。

(ロ)壕内には　車輛の音騷しく、又箱を打つが如き音處々に聞え、且つ人聲喧しかりしと想ふに、糧食の到著したるならん。

此(ロ)までの本文が第二の報告です。大隊長は此報告を受けて、こんどは聯隊長に報告します。而して又隣隊にも知らしてやります。其上長に向つてするのを、報告といひ、自分の所屬でない隊へ知らしてやるのを、通報といひます。

午後四時に至り、我聯隊は、前面の敵を抑留する爲め、現在の位置に停止すべき命に接したるを以て、大隊は夜間を待ち、工事をなすに決す。

これまでは、速に攻略すべしといふ命令によつて、動作しつゝあつたのですが、今回は只敵を抑へつけておけといふ命令を受けたのです。諸君は、命令がちよい〳〵變ることのやうに思はるゝかも知れませぬが。戰況といふものは、實に千變萬化なもので、刻々に差ふものでありますから、其變化に乘じて、勝を制せんが爲に變へられますので、決して輕

卒な譯などではありませぬ。

工事をなすに決すは、更に工事を强固にするので、此は任務がかはつて來たからであります。

當日朝食として、搗飯各人各一個づゝを得たるを以て、之を數回に分食し、蕎食は重燒麵包を使用し、多少飢を醫することを得たるも、飲料は殆どなく、後方より送來るものに依り、纔に各人五勺づゝを得、全く藥の如く使用し、又は多少の雪を得て、聊か渴を凌ぎ得たり。寒氣は前日に比し稍〻寛なりしも、暫く默止するときは、手足忽ち劇痛を感じ、凍傷の恐あるを以て、各小、分隊長は、時々部下に令して、摩擦運動をなさしめ、或は足踏運動を行はしめたり。此足踏運動は、伏したるまゝ頭を低うし、足を以て切に地面を叩くの方法を用ひたり。此方法は、夜間屢〻施行して、足部凍傷豫防の唯一手段となしたり。

實に細い記事ではありませぬか。

午後六時三十分頃より、敵の散兵壕、一連に烟を上ぐ、是れ確に炊爨の烟なり。此烟は翌來朝夕二回、殆ど定刻に上るを見たり。我は此烟を以て、彼の存否を知る唯一の徵候となせり。

我等の墓場は此處かりとの決心は實に千金の價あり

彼の存否。敵をひざ〳〵退却さしては、いつだつても好いことはありませぬが、殊に此時は、敵を抑留せよといふ命令ですから、逃がしてはならぬのです。ですから、其烟の上るのは、それだけ此方の心配を減じたのです。

前日來の情況に據り、敵は既に逆襲の氣力なきものと信じ、若又逆襲し來るも、我等の墓地は此處なりと覺悟し、裝具を卸し、日沒と共に、各小隊約三分の一づゝ藤本堡壘に往き、土囊運搬に從事し、又汲水の爲め、各分隊より二三名づゝを出さしめ、水筒を集め、小隊毎に一下士之を引率して、于家窪子に到り、水を求め來らしむ。

先とは、することが大へん變つて來ました。戰鬪記事を讀むには、こゝいらにも注意をしなければなりませぬ。此相違といふのは、是れ全く命令の變更に基くもので、又敵情にもよるのです。

午後八時頃、糧食、飲料、木炭及土囊三百五十個來著す。糧食、飲料、木炭の到著は、恰も旱天の雨の如く、各兵喜色滿面に溢れ、一日の勞苦、遂に何れに去りしかを知らす。殊

此の如き輿品を戰線に送る爲には後方にあつても亦戰線の多の困難と勇者とひたるものとを知られたい。

に木炭は、最も歡迎せられたり。

是れ全く實情であります、此喜の程度は、とても平和の人には解りませぬ。

木炭は、小隊に約一俵に當れり。之を分隊に等分し、分隊の中央邊に、一の爐の如き形を作り、炭俵を焚付とし、天幕を其上に張り、烟焔の上らざることに注意して火となし、氷りたる飯、菜を交互に温めしむ(飯は多く粥とせり)此の如くして始て温食をなしたるとき一同歡喜禁せず、皆曰く、此愉快は死すとも忘れ難しと。實に當時の眞情を呈露したるものなり。

此處を讀みますと、實地を知つてをります僕などは、いつも胸が一ぱいになつてしまふのです。

當夜偶然、聯隊本部の方向に、一小池あるを發見せり。泥水も今や氷結したるを以て、飲料に供するを得。此氷を割りて、各〻飯盒に入れ來り、炭火に由りて、其煮沸するを樂めり。既に煮沸すれば、徐に上層の清澄したる部分より、飲料に供せり。此に一驚を喫したるは、僅に一合許に融解したる水量にして、最後に飯盒底に殘る赤き泥土は、約五 密 米の厚を

有せしこと是なり。以て此池水の如何なる水なるかを知るべし。

偶然はふいとです。

飯盒は、兵士の御飯を入れるもので、金屬で出來てをります。で、火にかけても大丈夫ですから、御膳を炊くことも出來るのです。

樂めりといふ一句が、實に妙文字で、此時の眞情を寫出すには、此に代へる文字はあるまいと思ひます。僕は此處を讀むごとに、實に涙の出るのを禁じ得ませぬ。

一密米は、曲尺の三厘三毛餘ですから、一分六厘も泥が殘つたのであります。どうです平和の時に、其水を飲まれようと思ひますか。

午後九時五十分、敵は又全線に亘り猛火を始めたりしも、例に由て例の如しと、衆皆平然たりしが、果して三十分間にして沈靜に歸しき、此夜も終夜土嚢を排列し、又一方には採曖的掘開作業をなし、以て凍傷を豫防せり。

夜は毎夜眠れないのであります。

夜間隨意に隨處に便せば、終に戰場の不潔を來すを慮り、厠を設くべきの議起れり。然も

重砲弾も孔の利の便用が男子に士の
なて用は遺さ
ら遺れ憾

之を掘開することは絶望なるを以て、大に苦心したるに、散兵壕の後方十米乃至十五米の處に、敵の重砲弾に由りて穿たれたる、漏斗狀の穴點在せるを發見し、之を以て便所となすことに決せり。

絶望は、どうしても望の絶えたこと。

散兵壕。最初は只土嚢を置いたのみであつたのが、もう散兵壕と謂ひ得るやうになつたのです。

漏斗狀は、漏斗のやうな狀です。實にさうです。重砲弾の落ちて破裂した跡を見ますと、深の二三尺も、徑の六七尺もあるのがあります。

天明までに散兵壕は、殆ど立、膝中間位の強度に達せしむるを得たり。是に於て始て各兵も、僅に蠢動の餘地を得るに至り、時々足部を打匡するあり、藁靴を携行せる者は、之を軍靴に代へ、或襪を交換する等、若干の便宜を得たり。然れども傳令に對する集注射擊は、時を撰ばず、實に困難を極めたり。隨て日々二三名の死傷者は絶えざりき。

立、膝中間位といふのは、立射散兵壕よりは強度

九州健兒の士氣盛なるより其所以なり
南部の素養

なことです。強度は強固の度で、高さも高く、隨て厚さも厚いのです。

打匡の打は、助字で意味ありませぬ。匡はとゝのへること、たゞすことです。即ち手當、手入のことです。

襪は靴下です。

爾後毎日殆ど斯の如くして、三月六日に至る。要するに此對陣中は、畫息し夜勞すといふ狀態なりき。

息は、やすむ、やむです。

日を逐ひて給養も良好となり、唯最初の一日のみ、多少士氣上に顧慮したる點なきにあらざりしも、爾後士氣日々に益〻旺盛にして、殊に第二軍、第三軍の捷報連に到るに及び、氣力彌〻張り、腕を扼して以て時機の來るを待ちたり。

給養は、飲食物です。後に給養の處に詳しくあります。

四日以後は、夜に入れば、携帯天幕を散兵壕胸墻高に張り、以て風雪を凌ぎ、天明前に之を撤去したり。

胸墻高は、胸墻の高だけで、敵に見えないやうにです。然も盡は其を取去つたのです。

又毎夜爐の圍邊、即ち炭火に由りて和げられたる部分は、之を掘開して、胸墻を强固にするを法とせり。

炭を焚くと、其處は氷が融けて、土がやはらかになるのです。小便で和になつた土をさへ利用したのですから、これは無論のことでせう。

死傷者も日々減少し、四日以後は二三名に過ぎざるに至れり。然るに爰に一の慘憺たる事件起れり。是れ我右翼に連繫せる、後備隊某中隊の事に係る。該中隊は、偵察を命ぜられたりとて、四日午前九時頃、一の掩護射擊もなく、白盡唯一個中隊を以て前進せり。未だ百米ならず、一瞬の間、既に四五十名の死傷者を生せり。我大隊は、初め全く之を知らず、突然猛烈なる銃聲起りたるを以て、始て之を知り、我右翼中隊は、直に猛射を以て掩護を與ふ。此機に乘じて該中隊は、纔に原位置に退却するを得たり。

此の本文で見ますと、後備隊は甚だ無謀であつたばかりでなく、隣隊にも何等の通報もしなかつたやうです。それでは宜しくないので、これは將校の惡かつたのに相違ありませぬ。定めし明治十年頃の古い戰法が先入主となつてをる、古い將校でゝもあつたでせう。

新聞や雜誌に往往此の砲發の字を用ひるのを見受けるです

我軍の失敗をも隱すことなく、前には偵察の出來なかつたことを書き、今又此事を此の如く明白に書いてある。是れが又此記事の貴い所以の一です。

此對陣間、砲彈の害を被らざりしは幸福なりき。毎日敵は猛烈なる砲擊を試みたりしも、其着彈多くは、我大隊の散兵線より十四五米後方に始まり、其大部は、藤本堡壘附近に落ちたり。故に此陣地に到着後は、砲彈の爲め負傷したる者、僅に數名に過ぎず。

こゝで一寸心づいたことがありますから、つまらぬことながら申しませう。新聞などを見ますと、小銃又は拳銃などを射つたことも、發砲と書いてあるのが間〻あります。發砲といふ語は、素より兵語ではありませぬが、しかし字義の上から見ると、どうしても火砲を發射したことになるのです。それでは全然意味が違つて來ます。ですから、諸君も何か書かれるときには、此等のことにも注意して、笑はれぬやうにしなければなりませぬ。勿論文章の要にもよりますけれども、先づ發射とでも書けば差支ありませぬ。

此大隊は如くて後退の方面に他の一大活動をなしたのです

八　三月六日夜後退の景況

午後六時、大隊は、第一線を撤去し、某攻撃に參與せん爲め、本夜十二時までに、于家窪子に集合すべき命に接し、第一大隊及後備聯隊と協議し、我正面交代の計畫を定め、午後八時頃より、極て靜粛に二三名づゝ、逐次交代を了り、午後十一時三十分、敵に發覺せらるゝことなく、藤本堡壘に後退することを得たり。是より先、本夜の糧食は、于家窪子に止め置くべく命せしを以て、于家窪子に到り食事をなし、尚ほ一部到着しある翌朝分の食は、各人之を携行し（未だ到着せざる分は携行するを得ず、故に一食分を大概二人にて食すること丶せり）大なる困難を排し、夜一時前進の準備を終り、急行第二の集合地に向ひ前進せり。

第一の集合地は、前に命令を受けたと出てある于家窪子で、第二の集合地は某處です。

此大隊は、今是までの方面を離れて、某處に往くのです。これで、沙河堡攻撃に就ての、此大隊の記事は終りです。

其二　第一大隊

これからは、第一大隊の記事です。そこで此大隊の記事は、前の第二大隊の部に細に書いてあるところは、これを省き、第二大隊の部に盡さなかつたことは、こゝに補つてあるといふやうに、なか〳〵旨く出來てありますから、諸君も其積りて御覽にならんことを望みます。

九　最初の展開及前進準備

二月二十八日、大隊長は攻撃前進に方り、大隊の進出すべき豫定地點に、各中隊長を集め大隊の展開正面を指示すると共に、各中隊の分擔地區を定め、前進の方法、地形等を研究し、且つ聯隊の基準大隊たる右翼第二大隊、及左翼某歩兵聯隊第二大隊長に商議し、以て攻撃前進の命を待つ。

此處で謂ふ地區は、前に地形學の上から説明した自然形の地區ではなく、其後段に言つた如く、只區域の意味であります。即ち斯ういふ使用法も隨分とあるのです。

三月一日、愈〻攻撃前進に移るべき命令に接するや、大隊（第三中隊缺）は、日没を俟ちて、我潛伏斥候の線に沿ひ、第一據點の擕成に著手す。其方法左の如し。

第一小隊なり一小隊と人的誤解なれば勿れ

（イ）工事區隊　各中隊より、將校の指揮する一小隊を出す。

此小隊には、一個小隊の個の字がありませぬけれども、こゝでは十分にわかります。こんなときには、個の字を使はんでも宜しい。

（ロ）進出路の開設　中隊毎に六箇所、即ち小隊に二箇所、鐵條網を切斷し（鐵線鋏を用ふ）て進出に便にし、又散兵壕に於ける登降を容易にする爲め、土嚢を以て階段を設く。

（ハ）據點の搆成　土地氷結して掘開すべからず。故に土嚢を用ひて據點を搆成するに決し、豫め分配したるもの、及堡壘の銃眼に使用したる土嚢を以て、各其中隊の占據すべき地區に、一連の土嚢線を作り、以て據點となすことゝせり。

どうです、此方法を見ると、第二大隊のとは餘程違つてをりませう。これは兩方の大隊長が、其思つた通りにさせたからです。斯ういふやうな大隊長の職分内のことなどは、大へんに宜しくないことでもない限には、聯隊長は餘計な干渉などをせぬのです。

土嚢の多くは、銃眼として用ひられたるものなるを以て、土を塡實するの困難なしと雖も、

此散兵壕は藤本堡に連接し同壕の線上にあるのです

地面と氷著しあるが故に、脱取に意外の困難を感じ、又時々敵の搜射に遇ひ（我行動を知りて射撃するにあらざるを以て、大なる危險なく、且つ時間は短かりしも）稍ゝ作業を妨げられしを以て、午後十時頃に至り、始て完成することを得たり。

搜射は、所謂さぐりうちです。

據點は茲に完成したり。是に於て各中隊に命ずるに、各其堡壘線を進出するが爲め、先づ豫定の散兵壕（泰天街道の東側に一個中隊、西側に一個中隊、他の一個中隊、即ち第四中隊は、大隊の左翼後に豫備隊）を、占領し、然る後午後十一時を期し、該散兵壕を進出して、既成の據點を占領すべきを以てです。

一旦前にある散兵壕まで出て、それから據點に往くのです。

各中隊は豫め計畫せる通路に由り、其擔任散兵壕に到り、各斥候を出して、第二大隊より出せる、潛伏斥候と交代せしめ、以て警戒に任ず。

此にある各斥候といふのは、各種の斥候といふ譯ではなく、各中隊からの意味です。

當時某歩兵聯隊は、未だ我左翼に來らず、仍て第四中隊は、一個小隊を殘して、左翼正面

の警戒に任じ、二個小隊を以て豫定の位置に來る（警戒小隊は、三月二日の午前三時に至り中隊に復歸す）

左を開放しにしておく譯にはまゐりませぬから、豫備隊の中から一個小隊を出して、警戒をさしたのです。

午前四時、第一線たる第一、第二中隊は、同時に散兵壕内より極て靜肅に進出し、第一據點に散開す。豫備隊たる第四中隊亦、左翼に展開を終る。是に於て前進の準備成る。

どうです。此邊の記事を見ると、第二大隊の條とは、精粗大に違ふでせう。けれども第二大隊のところで、精細しい記事を讀まれた上に、説明までも見られたのですから、これでも、頗る要領を得られるだらうと思ふのです。どうです、さうでせう。

十　攻擊前進の動作

聯隊の基準たる、右翼第二大隊に、連繫前進すべき我大隊は、南部沙河堡に正對し、距離最も近きを以て、右翼大隊が、我と齊等面に前進するを俟ち、甫て前進を始む。時に天漸く明け、正面の射擊頗る盛なり、是より先各中隊は、前進に當り携行し得べき程度に、土

攻擊前進

を土嚢に入れ、前進に方りては、偏手に銃を把り、偏手に土嚢を提げ、以て應急の用に供せしむべくせり。

此處には殊更に南部沙河堡とあるから、南部の字に疑をかけられさせうが、別にかはりはないのでせう。沙河堡の村は、沙河を挾んで、南北に亘つてをりますので、今攻擊しやうといふ處は、河の南の方ですから、それで斯ういつたこと、思はれます。

齊等面は、たいらにです。第一大隊は出てゐつて、第二大隊は少しくさがつてゐつたのですから、第二大隊が出て來て、第一大隊と同じ面に來るのを俟つてといふのです。

偏手は、かたてです

應急は、時の用を濟ふことです。

此方案は、戰鬪の初期に於ては、實施困難ならざりしも、近く敵に接して運動激烈なるに至り、動作の輕捷を妨げ、所望の如くなる能はざりき。

實地に行ふことですが、これも陸軍では一種の使ひ方のある語であります。

輕捷は、かろくはやいことです。

風雪の攻撃に幸せしことは和漢歐米とも其例多きことです

所望は、豫め斯うしたいと思つたほどです。

つまり偏手で銃を持つて、偏手で土嚢を提げての運動は、居たり立たり、射つたり。進んだりする。忙しい場合には、いけなかつたのです。土嚢が却て邪魔になつたのです。

各中隊は、其位置の關係に由り、或は小隊躍進を以て、或は分隊躍進を以て前進し、圖畝より高粱稈、豆茎に至るまで、苟も利用し得べき地物は、悉く之を利用し、前進を繼續せしも、敵の射撃益〻烈しく、死傷續出して、前進愈〻困難を極む。

利用し得べき地物。どんなものでも、少しなりとも敵彈を禦ぎ得るか、又は敵の眼を遮り得る地物は、皆其を用立たせて、其に據つては進み、據つては進みしたのです。

時に恰も好し、一天俄に暗澹として、飛雪紛々、百米を隔つれば、已に通視を困難ならしめしに由り、敵の射撃も漸く緩徐となり、前進の爲め至大の便益を得たり。

暗澹は、くらくなつたことです。通視は、見通しです。

然れども、南部沙河堡の敵に向ひ、豈間肉薄攻撃を行ふは、殆ど不能事に屬するを以て、大隊は、夜間を俟つ爲め、適當の陣地を占領するを要せり。

肉薄は、身をくつつけてせまるといふことです。

此陣地偵察の目的を以て、各中隊は、各其正面に斥候を派遣し、前方三百米内外の地點に、敵の警戒陣地ありて、微弱なる敵兵出没するを確め、乃ち之を占領せんが爲め、右翼中隊より、逐次躍進を始むると共に、豫備隊なる第四中隊をして、亦第一線に追及せしむ

微弱は、兵力からいふので、つまり小數の敵兵です。

追及せしむ。豫備隊も後について來らせたのです。

是より先、聯隊豫備たりし第三中隊、大隊に復歸せしを以て、直に大隊右翼に增加して、第二大隊との間隙を塞ぎ、其一小隊を、右翼後に援隊たらしむ。

此處には、第三中隊復歸するとありますが、これはやはり、單に任務が解けて歸つて來たのではなく、第二大隊の第五中隊も同様、聯隊豫備隊の中として增加されたものとです

兩大隊の間は、大分空いてをる隙があつたと見えます。で、新鋭隊を其間に入れたのです。

援隊は、中隊の豫備隊ですが、豫備隊といふ名は、大隊以上でなければ使ひませぬ。中

重經驅の實は此大隊の右翼中隊及第二大隊にあまり受けなかつたのです

隊では、援隊といふのです。

此時降雪已に止みて、眼界明となり、正面南部沙河堡及左側面小孤家子よりする、敵の小銃火眞に熾盛を極め、加之、重砲・野砲彈亦我正面の一小地區に集注し、爲に左翼第二、第四中隊の如きは、殆ど全員二分の一の死傷者を生じて、纔に警戒線を奪取するを得たり。其當時に於ける各中隊の關係位置は、別紙略圖(第二圖)の如し。

此圖も、前の第一圖と同樣の譯で、なほしました。

十一　敵の警戒陣地を奪取したるときの景況及我執りたる策案

前項の如く頗る困難を極め、纔に敵の警戒陣地を占領し得たるときは、各兵困憊疲勞甚しかりしが、我奪取したる此陣地は、素と敵の砲兵陣地にして、其各肩墻を連接するに、薄弱なる堆土を以てしたるに過ぎざれば、伏臥を以て纔に身體を蔽ひ得るのみ。然も敵の射擊は愈〻猛烈を加へ來りて、忽にして死傷者を生せり。

肩墻といふは、砲兵及砲を掩護する爲の一の掩體の名で、砲床といつて砲を据うる處と其前の胸墻と、それから、續けて掩壕といつて、砲手の爲に設ける掩所と、通例右の

目的なき射擊は敢てなさゞるべし射擊可能なる所の基礎なり

三つから成るものです。しかし又、横を防ぐが爲にと、横にも此掩壕のやうなものを設けることなどあります。其時は、其を横墻といひます。ところ本文の敵の工事は、此掩壕が甚だ粗末で、只僅に堆土といつて、掘つた土を少許盛あげてあつたばかりなのです。各肩墻を連接するといふのは、砲の在る處と砲の在る處の間は、何れ空いてをりますから、其間を掩體を以て續けるのであります。

之に反して敵は、相距る僅に四五百米なるに拘ず、全く隻影をも認むるを得ず。蓋し敵は掩蓋下に在る、銃眼に依り射擊するを以てなり。狀況此の如くなるを以て、火力を以て相爭ふは、策の得たるものにあらず。右翼第二大隊、左翼某聯隊亦、濫に火力を爭はず。乃ち大隊も、勉て堆土に掩蔽して、應射することなく、徐に夜の至るを俟ち、爾後の方案を決せんとせり。

此前までの處は、前進の仕方から、地形から、敵の容子も、大分第二大隊の方とはちがつてをりましたが、此に至つては、第二大隊と同じ狀態となつたのです。

十二　隣接部隊の動作及聯絡

精說にして然も熟練なる九州師團の行動は常にこの如くすべし

暗夜の運動なりしも、豫め晝間に於て、兩翼部隊と協商し置きたる爲め、聯絡確實にして、行動は頗る靜肅なりき。然れども左翼隊とは、一時間隔增大せし爲め、連繫稍〻困難の狀況に陷りたりしが、天明と共に、目視を以て容易に相通ずることを得たり。

大隊內に於ける各中隊は、其間隔僅に十米內外に過ぎず、故に聯絡の確實なるは勿論にして、前進に於ける共同動作の如きも、問然する所なかりし。

此には、說明を要しますまい。

十三　對陣中彼我の景況及工事

敵の警戒陣地を奪取せし後は、其小堆土に隱蔽して、濫に應射せず、午後二時頃に至り、右翼大隊猛烈なる射擊を開始せしを以て、大隊も之と相應じて、射擊を開始せしも、敵亦應戰最も力め、到底前進の成算なきを以て、約二十分にして射擊を中止し、爾後堆土に隱蔽し、全く射擊せず、以て夜の至るを俟てり。

成算は、なし得らるゝ見込です。

降雪止みたるも、陰雲尙ほ去らず、夜に至りては、殆ど呎尺を辨せず。我多大の損害を目視せる敵は、夫れ或は夜襲の企圖なからんや、俄然猛烈なる射擊は、小孤家子及沙河堡の全線より開始せらる。晝間に於て既に射擊の効なきを知りたり。我は銃劍に訴ふる外他に策なきを惟ひ、僅に之に應射し、他は掩蔽し得る限に於て集結し、以て敵の來るを俟ちたり。

然れども敵は遂に來らず、射擊は約一時間にして止みたり。

敵がやつて來たなら銃劍よときめて、少ばかりあしらいに射つたばかり、兵力はなるだけ一と處に集めて置いたのです。これは銃劍突擊のときは、大間隔の散兵のまゝでは不利益だからです。けれども、掩體が何分小いので、さう集めて置く譯にはまゐりませぬから集めて置けるだけに集めたのです。

此時積雲漸く開け、積雪皚々、吾人に多大の利益を與へたり。他なし、所謂雪光に依りて前方百四五十米を透見し得たると、各個躍進の爲に混交せる、分隊若くは小隊を整頓し得たること是なり。

各個躍進で、地物を利用しながら進んだのですから、右に左に入違になるくらゐは仕方がない、甲の分隊の者と乙の分隊の者、甲の小隊の者と乙の小隊の者とか、彼此と互に

混交つてあつたのです。けれども、敵は敵の射撃の爲め、夜は暗い爲に、それをなほすのがむづかしかつたのです。ところが、ちようど雪光で見えて來たので、これ幸となほすことが出來たのです。斯ういひましたなら諸君は、そんなに入混つてあつた時に、さあ戰鬪といふことになつたなら、其兵士は、誰の號令に從ふのであらうと、心配せらるゝかも知れませぬが、其心配は要りませぬ。何故といふと、其小隊なり分隊なりに居る間は、其隊長が自分の指揮官であるからです。前に言つた、伍間增加のときがさうです。こゝのは自然に混交つたのでありますけれども、伍間增加のときは、どうしても混交らせなければならぬのです。そこでさう混交つてしまつたときは、其混交つた人間でもつて、どこからどこまでが何小隊、どこからどこまでが何分隊と、其編成をしなほすのです。中隊でも同じことです。

命あり、聯隊は現在のまゝ夜を徹せんとすると。仍て各中隊は、直に應急の工事に著手す。即ち中隊毎に、一部を以て、堆土を變形して、射撃設備をなすと共に、他の一部を以て、表土を掻集めて、土囊を塡實せしめ、以て堆土の薄弱なる部分を補はしめたり。此夜敵の射撃頻

二十七八年役には中日の戰に百分の十以上の凍傷患者を出したることあり今や數日氷雪の上に伏臥して其患者は要少なるべし

にして、作業困難、終宵一睡を與へざるも、此作業自然の採蹊法となり、爲に凍傷患者をも出すに至らざりしが如し。

堆土を變形して云々。此堆土は敵がしておいたので、此方に向いてありますから、此方で其に據るには都合がよくない。で、其を、此方で射撃をするに工合のよいやうに、なほしたのです。

三日快晴、殘雪眼を射る。未だ收容し得ざる死傷者は、白玉堆と變じ、時に苦悶の聲を發する者あり。僅に手を擧げて、救を求むるの狀等見るに忍びず。而して小孤家子の敵は、此等に對して射撃止まず。爲に當日も、尙ほ其一部は、終に收容すること能はず、戰場とはいへ、實に酸鼻に耐へざりき。

白玉堆、仆れてをる上に雪が積つて、高くなつてをることです。

酸鼻は、傷み悲しむことです。

戰場悲慘の狀は、實に斯の如きものであります。しかも是れが、皆我々に代つての無殘のありさまだと思つたならば、國民たる者は、實にありだけの熱誠を捧げなければならぬ

雪の利用も是に至りて盡せり

ぬのです。然うです。確に我々に代つてゞす。何故といふと、我國は、國民皆兵の制後だからです。ところが世には、不埒千萬な奴輩があつて、此人達の斯ういふやうな無殘な忠死も、全く犬死に終らせようとすることがある。即ち敵の爲の間諜といつて、まはし者となるのが其であります。實に其等の者があつたとしたなら、八裂にして、胎叩にして、其肉を喰つても足りないではありませぬか。

二日の夕よりして、用ひし所の食は、只重燒麵包のみ、大に飲料水の必要あるも、水筒内已に一滴も餘さず、然も素より補充の法なし。幸にして二日夜半に於ける降雪は、唯當時に於ける照明の用をなしたるのみならず、玆に渴を醫するの天水と變じ、轉〻天祐の厚を感せしめたり。

照明は、てらすことで、前の雪光です。

晝間は、敵の狙撃止まず、掩體尙ほ不十分にして、行動は勿論、起立すらなすことを得ず。爲に空しく、前夜收容し得たる戰友の死屍と伍し、呻吟する傷者を慰め、以て夜の至るを俟つのみ。

呻吟。こゝでは、俗に謂ふうなることです。如何に忠勇なる我兵士でも、見苦しく泣いたりなどこそは致しませぬが、手傷の痛みで、つひ聲を出すことあるのは、それは免れぬところであります。今まで起臥を共にして、一所に教育も受けて來た、兄弟も當ならぬ間の戰友が、斯ういふみじめな狀態になつてをる。それをどうして心を動かさずに視られませう。悲痛愴惻の情、胸に迫つて來るのはあたりまへです。隨て戰分士氣に影響することも、ないとは謂はれないのであります。けれども亦一方には、斯ういふ悲慘の狀を視るにつけて、是非此仇をとつてやらなければならぬといふ心も出ます。いや、これは失言です。戰爭のときに仇を討つなどゝいふ、さういふやうなことは、それは心の至らない未熟者のことで、我兵士などには、決してそんなことはありませぬが、只其戰友の苦痛も慘死も、徒爾にならぬやうに、是非勝つてやらねばならぬといふ、奮發心も出るのです。其我兵士の、決して理由のない恨などを抱かぬといふ證據は、則ち何よりも、敵の負傷者などに對して、侮辱を加へたり、又は慘酷なことをしたりなどすることがないので知れます。昔時から、強いばかりが武士ではなく、情あるのが眞の武士だ

兩大隊とも期せずして同一方法を案出せしは亦一奇

と申しますのも、此邊のことを謂ふのです。

午後四時に至り、我聯隊は、前面の敵を抑留する目的を以て、現在の位置に停止すべき命に接したるを以て、大隊は夜闇を俟ちて、增補工事をなすに決し、豊間は警戒に妨なき限に於て、睡眠せしむ。

第二大隊と同じことです。此現在の位置に停止して、敵を抑留せよといふ命令は、初め聯隊に下つて、それから聯隊から、更に兩大隊に下つたのです。

此に最も窮したる一事あり。即ち兩便の處置是なり。僅に身體を露出すれば、狙撃を免れずして、堆土は纔に一米乃至四五十に過ぎず、爲に之と隔離するを許さず。

四五十は、四十乃至五十珊米です。一珊米は、一米の百分の一で、即ち我曲尺の三分三厘餘です。斯ういふ風に掩體が低いから、少し離隔れると敵から見えるのです。故に爲し得る限り、夜闇を俟つに力ひるも、已を得ざる者は、遂に不潔も外觀も顧慮する所にあらず、或は紙上に用を便じて、之を前面の壕内に投棄するあり、或ひは土を掻集めて之を蔽ひ、方匙の助に由りて投棄するあり、異態百出、實に噴飯に値しき。幸にして

豫備、行李員等の落動搭運しみ遺憾さ

四日以降は、多數の土囊を得たるを以て、或は一地區に限りて掩體を作り、或は前面の壕内に道路を通ずる等、猶ほ危險は免れざりしも、兎に角不體裁なく用を便ずるを得るに至れり。

噴飯は、をかしくて噴出すことです。

三日夜に至りては、敵の射撃も前夜の如くならず。仍て各中隊より若干の人員を後方に派遣し、于家窪子堡壘に於て、土囊の蒐集及運搬をなさしめ、以て增補工事に著手せしむると共に、豫備隊たる一個小隊を以て、死體及死傷者の收容に着手せしむ。而して朝來殆ど渦したる中隊は、各分隊より、兵卒三名づゝを出し、凡ての水筒を携行せしめて、以て于家窪子堡壘に到り、飲用水を運搬せしむ。此一水筒の水は、依て以て一晝夜に亘る、萬般の用に供せざるべからざるものなり。以て當時如何に給水に困難なりしかを知るべし。四日以後に於ては、豫備隊、行李員等に由り、飲用水を戰線に送らるゝことゝなりたる爲め、大に便利を得たるも、水筒外殆ど容器なき第一線に於ては、其到着到時に於て、渦を醫するを得るのみ、翌終日は、猶ほ一水筒を以て滿足せざるべからず、此の如くして遂に七日に

至る。

豫備隊。行李員。豫備隊は第三大隊です。行李は各隊にあるもので、歩兵では大隊、騎兵、砲兵、工兵では中隊に附屬ます。又騎兵、砲兵、工兵では、隊一般のではなく、大隊本部の行李といふものがあり。歩兵には、聯隊本部の行李といふものがあります。砲兵には又、聯隊段列行李といふものがあります。此段列といふものは、砲兵に限るもので、中隊段列、聯隊段列とあります。砲彈の補充をするものです。聯隊段列行李は、此聯隊段列の大行李であります。又旅團司令部以上の司令部、衛生隊などにも行李があります。其で此行李ですが、一口に只行李とはいひますけれども、大行李といふのと、小行李といふのとの、二ッに區別られるやうになってあるので、其大行李といふのは、主に宿營のときに使ふもので、糧食其他であります。小行李といふ方は、さういふものではなく、戰場での必要なるもの、即ち彈藥、器具などであります。しかし砲兵は、前の段列がありますから、彈藥は小行李中にありませぬ。まあざつと言へばこんなものです。で、戰鬪の際には、小行李は隊に近い處まで往き、大行李はもつとずつと背後にをります。

三日夜、全線大に靜粛、爲に增補工事も頗る進捗し、四日拂曉までには、各兵の占據せる地點は、立姿散兵壕と殆ど相撰ばざるに至れり。然れども未だ一連の散兵壕たるに至らず、分隊若くは半小隊或は一小隊毎に集結せる其中間は、堆土猶ほ低く、且つ薄くして、掩蔽甚だ不十分なり。爲に傳令屢〻負傷の厄に逢ふを免れず。仍て散兵壕に於ける、命令、通報の傳達は、凡て左の方法を用ひたり。

豈問の命令、報告等は、凡て筆記とし、之を空罐に入れ、

罐詰殼です。命令も、報告、通報も、筆記してすると口演でするとの二つの方法があるのですが、こゝでは極く單簡なことでも、筆記することにしたのです。斯うすれば間違もないです。

若干の重量を附して、

書付を入れた罐詰の食殼に、土塊なり何なりの重をつけてです。

「大隊より何中隊へ」或は「何中隊より大隊へ」等唱呼すると共に、之を隣兵より隣兵に傳送し、中間斷絶せる部隊は、之に投與する如くし、以て成るべく兵卒を移動せしめざ

時機に適合したる便利の傳達法を講ずるに力めたり。

るに力めたり。

此方法は、傳達確實にして且つ迅速、當時の狀況に對しては、最も適當したるものゝ如くなりし。

實に、それッと言つて投げてやる狀、目前に見えるやうです。

三日の夜に於て、死傷者の收容は殆ど終了し、悲慘の狀況、復殆ど心目に映ずることなきに至り、敵の狙擊も其景況を變じて、大に靜肅となり、天候は愈〻快晴にして、晝間は既に微溫を覺え、夜間の警戒と工事と寒冷との爲に、爲し能はざる睡眠の不足を償ひて餘あるに至れり、加ふるに四日夕までは、重燒麵包に依り、幾に饑餓を凌ぎつゝありたる第一線が、各人一個の搗飯を得、加之、夜間蹤を探るが爲には、中隊に三俵乃至四俵の木炭を分配し得るに至りたるを以て、彌力頓に恢復して、士氣愈〻旺盛、以て時機の來るを待てり。

一般の狀況此の如く、而して之のみならず、三日の夜に於ては、某砲三門大隊に配屬せられたるを以て、之を奉天街道東側に配置し、四日夜に於ては、又某種の砲二門配屬せら

此巧妙なる運動が奉天配屬に於ける最も妙味のある所です

れたるを以て、之を第四中隊の左翼に配置す。是に於て、今や如何なる强力の逆襲も恐るゝに足らず。乘意大に敵の出擊を希望するに至れり。

出擊は、出て來る方の側からいふ辭で、つまり逆襲です。昔の本にも城よりも打つて出で、などいふことありますが、あれと同じで、防者が打つて出ることなんです。

六日夜、第二、第三大隊は、某攻擊增援の爲め、各其陣地を撤去して、後退すべき命あり是に於て大隊は、右翼第二大隊の正面をも負擔することゝなれり。仍て先づ中隊の分擔區域を增大し、各中隊は、疎散の散兵を以て、全線を占領し、以て敵に我第一線の撤退を覺らしめざる如くし、夜間は中隊毎に、要點に集結して、敵の出擊に備へ、中隊間の間隔は、小數の警戒部隊を出して、警備を嚴にし、聯絡を確實にせり。

疎散の散兵。一體散兵の間隔は、一歩乃至二歩としてあります。一歩といふのは七十五糎米で、我曲尺二尺四寸九分九厘にあたります。しかし此は、必しも其だけにしなければならぬといふ次第ではないので、此處にも特に疎散といふ文字を使つてあります通り、もつとずつと、間隔の廣い散兵にもするのです。尤も此時は其筈なので、今まで二個

大隊で持つてゐた正面を、一個大隊だけで持つことになつたのですから、つまり正面は倍になつた譯で、それだけの場面にすうッと配るには、間隔は是非廣くしなければならのです。それにまだ是までは、聯隊豫備に二個中隊もあつたのですから、若し戰鬪が難儀にもなりますれば、直に增加の望もあつたのですが、或る方面の增援にいつたのは、二個大隊を擧げていますから、聯隊長がそれを率ひていつた譯で、もう豫備隊といふものもないのです。で、隨分と、心細くないこともないやうな譯ですが、しかし其が爲には、兵器の上からいひまするとと、先づ此正面を維持するに差支へないだけのものを、與へられてあるのです。けれども、若しも甚だ優勢の敵が、死物狂にでもなつてやつて來て、もう機關砲も迫擊砲も使ふに處なく、白兵接戰といふ場合にでも迫りますといふと、こんどは器械ではなく、人のみの働になりますから、只一個大隊では、隨分危險いやうな次第にも思はれなくはない。乃ち然ういふやうな次第ですから、此時聯隊の移動を敵に知らさぬやうにしたといふのも、只無益に損害を受けたくないといふばかりではなく、兵力を敵に知らさぬといふ、一大秘密の籠つてあつたことは、諸君にも御分曉りになりませう。しかしです。斯ういふ難場ともいふべき處を受持つといふのは、則ち此大隊の名擧な譯でありますから、第一大隊では、士氣は彌〻振つたことに思はれます。

左翼方面とは鐵路附近漢堡方面のことで

十四　三月八日進出の景況

此は、我隊の進出です。是までは、唯敵を抑留する方であつたのが、其が打つて出ることになつたので、いよ〻敵の本陣地に向ふのです。

左翼方面に於ける攻擊効を奏して、正面大、小孤家子、沙河堡の敵兵亦動搖の風あり。右翼隊は、翌八日の拂曉を期して、正面の敵を突破するに決す。

大孤家子は、小孤家子から沙河を隔て、北方に在ります。突破は、文字の如く突破ることです。中央突破などいつて、敵線の中程を突破つて、其兩方に危險を感じさす戰法もあります。

會々右翼旅團は、八日午前三時を期し、先づ偵察射擊を施行するの通報に接したるを以て、之と隣接する我大隊は、勢ひ之と連繫せざるを得ず。乃ち左翼聯隊と商議し、以て時の至るを俟つ。

偵察をなすには斥候を派遣して敵情を探ることもあり射撃をなすには射撃をなすこともあり又攻撃をなすこともあり其手段種々

是までは、右翼聯隊とばかりあつて、旅團といふ字は、こゝで始て出て來ましたが、別のものではない、例の後備隊です。これまでのところでは、旅團をいふ必要がなかつたのでせう。

せうが、こんどは、旅團からの通報があつたのでせう。

此間に於て、各中隊をして、各其正面に斥候を派遣して、敵情の偵察に力めしめ。

敵情の情は、こゝろです。古い兵書にも、形と情といふことがあります。形は形れると

讓んで、眼に見えることですが、情は目に見えぬ樣子です。しかし、必しもさうばかりも

使ひませぬ。只おもむきとか、やうすとかいふことにも、情の字は使ふのです。けれど

も、通常兵家で用ふる、敵情といふときの情の意義は、右いつたやうな譯なのです。

特に左翼第四中隊は、敵と最も近接し、且つ敵壘に通ずる道路あるを以て、右翼旅團の偵

察時を俟ち。

前に言ふべきことを落しました。これは右翼旅團の偵察ですが、偵察射撃とあります。

此はどういふことをするのかといふと、射撃でもつて偵察をするので、是非敵に、これ

は本式にやつて來たなと思はせるやうに、盛に射つて、應射をさして、それで敵の兵力及

敵は後衛の一部を殘して退却したのでせう

情勢を測るのです。

爲し得る限り近迫して、敵情を偵察し、狀況之を許さば、直に南部沙河堡を占領すべきことを命ず。時來り、右翼旅團は猛烈なる射撃を開始す。此時正面沙河堡の敵兵、之に應射したりと雖も、全線に亘らず、各處に散在して、且つ銃數極て少きが如し。是に於て第四中隊は、北里中尉の率ふる半小隊を、通路より、南部沙河堡の敵壘に向ひ潛入せしむ。斥候は、枚を銜で潛行し、遂に沙河堡々壘の第一線に進入したるも、既に敵の隻影を認めず。

枚といふものは、横に口に銜へて、紐で頭の後部に結へて、聲を出さぬやうにするもので、昔時支那の軍隊で用ひたものです。こゝでは、ほんとうに枚を銜んだ譯ではありますまいが、つまり決して聲を出さぬことにしたのでせう。

第四中隊乃ち直に之に續行して、遂に南部沙河堡を占領したるを以て、大隊は直に運動を起して、南部沙河堡に到り、大隊を集結して以て後命を俟つ。

是までの此大隊の運動は、大隊長が、自分の一量見でやつたことに思はれます。

前に、之と隣接する我大隊は、勢ひ連繫せざるを得ずとあつたでせう。卽ち右翼旅團から

敵は側背の危險を恐れ、隨分狼狽して夜遁したのです

の通報がありましたので、命令はなくとも、やつたこと、思ふのです。斯ういふ、命令はなくとも、指揮官の一量見ですること、之を陸軍では、獨斷專行といひます。此獨斷專行といふことは、軍隊にあつては、極て大事のことで、場合によつては、是非しなければならぬもの、又決して濫にすべきものではないのであります。こゝで其に就ての御話もしたいとは思ふのですが、餘長くなるから止めませう。それは兎に角、獨斷專行をしますからには、責は總て其人一人に歸しますから、殊に此時の此大隊のやうに、廣い正面を持つてゐて、人の少いにも關らず、進出の決心をするといふには、此大隊長、餘程苦心をされたことに思はれます。

敵は其右翼方面の形勢非なるを見て、遽に退却に決せるもの、如く、堡壘内に多數の器具、電話器、角燈、防寒具及敷物の類散亂して、狼狽の跡を留めたり。

(第二)聯、大、中隊長間の交通、聯絡の景況

(第一)第一線大隊といふ大標題の次に、(第二)として此ことを擧げられてあります。此は實に大切なことだからです。

一　聯大隊長間の交通聯絡

三月二日より同く八日に亘る、沙河堡攻擊に於て、交通聯絡は、如何に實施されしやといふに、平坦開豁なる沙河堡の南方地區は、戰塲の交通聯絡に方り、一の利用すべき地物なく、凍結せる土地は、交通路の構築得て望むべからず。然も我攻擊地區は、全く不毛の赤土にして、其間一物體の微動するあるも、敵は優に之を指摘することを得、射擊目標に渴望せる敵は、直に火力を集注するを常とし、殊に距離は、四百米乃至六百米の間にあるを以て、彈著至て正確なり。

射擊目標云々。一寸でも見えたら射つてやらうと思つて、敵が待構へてをつたのです。

此時に當りて兩大隊長は、共に當該大隊散兵線の中央附近に位置し、聯隊長は、兩大隊長間の中央約三百米附近に位置し、共に縱に膝姿高にも充たざる敵の遺せし工事を利用し、敵彈に掩蔽しあるに過ぎず。而して此間に於ける交通聯絡は、凡て全く徒步傳令に由りて行はれたり。

兩大隊長は、第二、第一大隊長。當該大隊は、其大隊です。

傳令は歩兵騎兵問はず兵卒の動務さしむるは一番面倒な仕事で殊に戦線に於ける傳令隊はけだし最も危険なのです

膝姿高は、膝射散兵壕の高です。

徒歩傳令。あるいて使をする傳令使です。此傳令の爲には、聯隊本部にも、大隊本部にも、隊からそれだけの兵員を取つてあります。又歩兵隊長にも、騎兵の傳令を附けられることあります。

然り而して、傳令一たび掩蔽外に出るや、敵は直に機關砲を以て之を狙撃するのみならず、其行進方向を追尾して猛射す。

追尾は、おつかけるのです。

是を以て傳令ば、三百米の躍進間、數十歩にして停止し、百歩にして憩ひ、以て敵の猛火を避け、千辛萬苦、其任務の達成を計ると雖も、往路にして斃るゝあり、歸路にして傷くあり、無事にして復歸する者尠し。故に偶〻其任務を達成し、健全にして歸來する者あれば、上下擧て之を喜び、攻撃時日の經過と共に、漸次其數を減少しつゝある本部傳令の、寂寞を破るの歎聲となれり。

此末の處の文などは、實に旨いですな。

悲壯なる此將卒の眞情誰か感泣せざる者て

寂寞は、さびしいことで、段々人が減つて來てをりますから、傳令遠の居ります處は、益々ひつそりとなつて來る。そこへ無事に歸つて來る者がありますれば、嘗喜んで、萬歳でも唱へたといふことで、こゝへらの情味を解することは、とても實地に臨んだ人でなければ出來ませぬ。

而して連日の攻撃間、傳令の集中的行動により、

傳令が、諸方から一ヶ所を指して往くのです。

敵は我本部の位置を推定したるならん、昼夜間斷なき狙撃と砲火は、本部附近に集注さるるに至りき。

此本部は、聯隊本部と、大隊本部と見てよいです。

此間にありて、決然傳令に下令する隊長は、愛卒を失ふの苦を期する者、聲に應じて蹶起する傳令は、固より死を必する者、曩に斃れたる同僚傳令の死屍傷軀を顧みつゝ、其任務に疾驅する七昼夜の長に亘る、其れ何ぞ悲壯なるや。以上の如く、傳令の損傷甚しかりしを以て、盆間に於ける傳令は、常に二名を使用し、且つ聯、大長の中間に、地形と距離とに應

じ、二乃至三箇所の避彈所を築設し、縱に聯絡を確實ならしめたり。是に於てか、設堡陣地の攻擊に際しては、各隊畫間の交通路は、必須缺くべからざるものにして、其有無は、我軍の利害に關すること大なるべきを感じたり。

設堡陣といふのは、堡壘を幾個もずゝッと設けてある堅固の陣地です。

二　大中隊長間の交通聯絡

各中隊長と、大隊長間の交通聯絡は、專ら傳令及聯絡兵を以てせられ、口達又は筆記して送達せり。

聯絡兵といふものは、別に常に出すものです。

此傳令は輕裝をなし、疾驅して約二十米毎に躍進す。

輕裝といふのは、身輕に出立つことには相違ないが、しかも一の着裝法で、ちやんと規則があります。尤も多少の增減は、指揮官によつてさゝることがあります。

場合によりては、十米前後にて、既に停止せざるべからざることもありたり。是れ身を起し、前進を始むるや、忽ち集中狙擊を被るを以てなり。若し一氣に此以上の距離を前進せん

とすれば、大概死傷を免れず、以上の方法に依るも、尙ほ時々傳令の死傷なき能はざりき。敵は實に、見えたらばと構へてをつたのです。

三　各中隊長相互間の交通聯絡

第一線各中隊長は、全く散兵線上に在りしを以て、兵士等と一所に居つたのです。

其相互の交通聯絡は、專ら遞傳法を採用せり。

遞傳といふのは、それからそれへと、段々に傳はらすことです。

而して其單簡なる件は、口より口に傳へ、稍〻複雜なることは、筆記して遞傳せり。然るに大隊の散兵線は、間絶あり、其間絶は、十米以內なるも、交通甚だ危險なり。仍て繩詰の空罐內に信書を入れ、之を投擲して遞送するの方法を採用したること、對陣中の狀況中に迎べしが如し。

以上の外通常毎日一回、各大隊副官は、日沒を期し、聯隊長の許に參集し、其一日間に生じたる情況の詳細を報告し、同時に聯隊長の企圖、命令等を受くるを例とせり。

戰時に於ける副官の任務なかなか輕くはありませぬ

企圖は陸軍の常用語で、字の如く、くはだて、はかる、です。

此副官は、敵の慣例として行ふ日没後の猛射に妨げられ、

敵は日没後には、毎日々々必ず射つのですから。

夜十時乃至十一時ならでは、歸還すること能はざりしこと往々ありたり。

急を要するときは別ですけれども、大隊副官などが、さうやたらに負傷するといふは

決してよいことではないのですから、それで時機を見て歸つたのです。

此處で此日々の命令のことや、又會報といふことなどに就ても、言ひたいのですが、餘り

くだ〳〵しくなりますから、止しませう。

要するに、交通、聯絡殊に之が傳令勤務は、此戰鬪間の、大困難の一に數へられたり。

傳令の一番多く損じましたのは、第一大隊で、二十六人なさうです。さうしてみると、

傳令使といふものは、大へん澤山に取つて置くものゝやうにも思はるゝか知れませぬが、

なか〳〵そんなに取つておける筈のものではないです。で、缺員になれば、又段々何の

中隊からか補充したのです。

成程さう多くやられては耐りませぬ。亦以て敵の射擊の烈しかつたことも察されます。

然も此傳令勤務といふことは、軍隊の上にとつては、實に大切なことで、どんなにして

も達さなければならぬのです。若しこれが出來なかつた日には、まるで戰鬪が出來ない

といつてもよいくらゐなものです。ですから、遣る人も、往く者も、本文にある通り、何

れも戰死は覺悟の上でしたのです。全く知りつゝ、見つゝ、死に往つたのであるのです。こ

れを見ても、內地に安樂に居た人は、出征者に對して、深く同情を表さなければならぬの

です。今では、其戰死者の遺族や、負傷をして身も利かなくなつてをる人、及其家族など

に對して、飽くまで永く同情を寄することゝ、即ち其道でせう。

(第三)豫備隊

豫備隊といふのは、指揮官の手許に殘しておく隊で、必要の場合に使ふものです。しかし

其使ふべき場合といふのは、一々此に掲げる譯にはゆきませぬ。兎も角豫備隊といふもの

は、無くてならぬ大事なものといふだけを言つて置きます。此豫備隊といふのは、大隊以上

でなければありませぬ。中隊では前に言つたやうに、援隊といひます。

砲撃の実況は、実地を見聞せざる者には眼前髣髴たるやうである。今我々はすぐに

豫備隊は、大い部隊ほど多く置くのが通例です。大隊などでは、豫備隊を置かんで、直に皆の中隊を、散開さしてしまふことあります。前の第二大隊がそれです。しかしさういふときには、成るだけ中隊に援隊を殘すやうにします。前の第二大隊に增加した、第五中隊の例がそれです。

一　前進までの景況

豫備隊は、第三中隊、第五中隊及第三大隊（第十一、第十二中隊缺）にして、第一線大隊に續行し、藤本堡壘に到り、一部は直に、第一線大隊第一掩點工事の增築を開始し、大部は藤本堡壘に在りて、時機を俟ちつゝ拂曉に至る。

拂曉より、敵は猛烈なる砲撃を開始し、刻一刻猛烈を加へ、殊に其大部を藤本堡壘に集注したるを以て、重砲彈、野砲榴彈、榴霰彈、交〻爆烈し、或は土嚢を飛ばし、或は掩蓋を破壞し、硝烟砂塵全壘を包み、殘酷なる死傷者を出し、頗る慘憺たる光景を呈しき。

重砲は、口徑の大いもので、類は種々ありますけれども、多く曲射砲といつて、物を越して射つことの出來る、彈道の强いのが用ひられました。彼の二十八珊の榴彈砲など

強て六百米に限りたる譯ではない

が其です。加農といふのは、砲身の長い直射砲です。彈道といふのは、彈丸が銃砲の口から出て、ひかふに著くまでの道で、それが初は低く、中頃高く、それから又低くなつて落ちる。其弦形の强いのが曲射砲です。野砲は加農の直射砲で、彈道の弦形の至つて少く、殆ど眞直にゆくのです。彼の我國の兵士が、つねに曳いて行く、長い大い方の砲、あれが野砲です。其小さい方の、僅に三尺許のゝ、あれは山砲といひます。

それから榴彈といふのは、物に中つてから破烈する彈丸です。ですから著發彈ともいひます。榴霰彈といふのは、空中で破烈して、其彈丸の片と、彈子といつて、豫てから彈丸の中にはいつてをる丸子を、てつぺんから降らすのです。曳火彈といふのが是です。

當時第一線大隊は、既に敵の警戒兵を驅逐し、決戰準備射擊距離に接近し、戰鬪頗る劇烈なりき。

二　前進の景況

決戰準備射擊距離は、すつと前にあつた、決戰距離と同じで、先づ六白米です。

午前八時、豫備隊は前進の命に接し、

聯隊長自ら豫備隊を率いて進む爲に、前進の命令を下したのです。

各其進出すべき位置に移り、藤本堡壘散兵壕に沿ひて、中隊を一列横隊に整頓し、小隊毎に、各其進出路（鐵條網を切開き、進路を準備しある處）より、四五名乃至七八名づゝ、各個躍進を以て進出し、先づ第一據點（我潛伏斥候の線に、豫て據點を準備しある線）を占領し、以て全部（第十中隊は、軍旗を護衛して、藤本堡壘に在り）の進出終るを待てり。

軍旗は、三個大隊ある聯隊で行軍をするときには、中央の第二大隊にありますが、戰鬪となると、豫備隊で護衛します。しかし其豫備隊も、皆戰鬪線に入ることになりますれば、軍旗も共に戰鬪線に入ります。

午前十時、全部の進出を終り、午前十一時、更に中隊毎に、逐次各個或は分隊の躍進をなし、第一據點より約百米前方に、少しく凹地線ある地點まで前進して伏臥し、僅に身を隠蔽して時機を俟てり。此時寒氣大に加はり、滿天黑雲を以て鎖され、降雪綿紛、午後零時三十分頃より益〻甚しく、剩へ南風吹荒みて、目視困難となり、敵火も亦減衰の傾きあり。午後一時、軍旗護衛第十中隊を招致す。同中隊は、軍旗を護衛し、分隊若くは半小隊の

躍進を以て前進し、第九中隊の左翼に連接して、攻擊の進捗を待てり。

凹地線。前に第二大隊の條に、防界線と見えましたの、あれでせう。

三　第一線へ增加の景況

午後一時、第三、第五中隊は、第一線へ增加の命令に接す。當時降雪尙ほ止まず、四面濃濃、天我に前進の機を與へたるやの感あり。兩中隊は機を失せず、各個若くは分隊毎に、逐次躍進を以て、戰線に向ひ猛進せり。

此前進は、步一步困難を加へ、殊に第一線より約百米の處に達するや、敵の銃砲火猛烈を極め、死傷續出、加之、第一線前進の際に生じたる死傷者未だ收容せられず、途中點々寒氣嚴烈なる白雪中に横はり、頗る悲慘の狀況を呈したり。

戰線の後方約百米の地に達せるは、午後二時なり。此時一天俄に晴れて、白雪皚々、日光に映射し、我前進は全く敵に遮蔽するの手段なく、各小隊は、已を得ず各個躍進法を用ひたるも、點々以て數ふべし。之に對し敵は猛射を加へ、一人前進すれば之に雨射し、伏すれば止むといふ如く、頗る確實巧妙なる射擊を行ひ、我前進に酷烈なる障害を與へたり。

勇壯なる此前進の景況は今尚ほ目の前にあるやうです

遮蔽は、さへぎりおほはるゝです。

酷烈は、はなはだしいこと。

カーキー色であらうが、灰色の防寒外套であらうが、雪の上では、遠方からも能く見えます。そこへ本文のやうに射たれては、たまる譯のものではありませぬ。ばたり〳〵仆れるやうす、見えるやうです。けれども、進まぬ譯にはゆきませぬ。

各小隊は勇往邁進、此危險を冒して、遂に第一線兩大隊間に增加の目的を達したり。

此處には、只兩大隊間とありますが、これは其主なる所を取つて略して書いたので、こまかいことは、前の兩大隊の條にある通りです。

此に特書すべき一事あり。即ち軍旗の森嚴と、壯烈是なり。

軍旗は、三月二日午前五時、第一線部隊の、藤本堡壘を進出して、沙河堡攻撃に著手するや、瑛備隊と共に同堡壘内に位置し、第十中隊之を護衛す。當時敵の小銃彈は、常に頭上を飛行するのみならず、彼が重、野砲は、頻に其火力を同堡壘及其附近に集中し、或は堡壘を破壞し、或は掩蓋を飛ばし、或は殘酷なる死傷者を生じ、其燥烟砂塵は、紛々たる降雪と

混じ、加ふるに强風鬼氣を吹きて、四面暗澹、慘烈の狀筆紙の盡す所にあらず。此狀況の裡に在りて、我神聖なる軍旗は、儼として旭光四邊を射るが如く、森嚴の氣犯すべからず。衆之を仰ぎて氣大に揚る。時に敵の十五糎米重砲の二彈、軍旗を隔つる咫尺の間に落下し、爆聲天地を震撼して、爆烟、砂塵、丸子、破片、全く軍旗を包み、一時は軍旗の姿滅し、覺えず嘆嗟の聲を發せしめたるに似ず、燥烟漸く散ずるに從ひ、赫々たる旭章益〻光輝を放ちて、威嚴愈〻高く、旗手以下亦一人の微傷をだも被りし者なかりし。衆皆感激士氣大に振ふ。

鬼氣は、ものすごい容子で、魔物でもをるかのやうに思はれることです。

森嚴は、ぞつとする程おごそかなことです。

暗澹は、くらゐこと。赫々は、かゞやくことです。

旗手といふのは、軍旗を持つ少尉で、以下とあるのは、軍旗衛兵です。軍旗衛兵は、一等卒五人です。

此處に軍旗のことを、如此工合に書いてあると、諸君は或は、わざとらしい書き方のやう

にも、又は筆者が、文を弄したものでゝもあるかのやうにも思はるゝか知らぬが。それは決してそんな譯のものではない。軍旗の貴いことは、諸君も知らるゝ通で、殊に軍人となつて軍隊教育を受くると、別して軍旗の大威力も感ずるやうになつて、軍人精神の歸向をも知るのである。隨て軍旗に對する敬虔の念も深く、軍旗の威靈をも仰ぐこと深くなる。で、軍旗の士氣に關することは非常なものです。實に軍旗の無形上の力といふものは、無限であります。尤もそれも其筈です。軍旗は　陛下の御影とも拜すべきものであるから。諸君も此章を見らるゝこと、決してなほざりなるべからずです。

第一線攻擊の進歩に伴ひ、軍旗は豫備隊と共に、藤本堡壘を進出し、約三百米前進せり。今朝來狀況變化なく、前進間亦頗る危險なりしのみならず、停止位置たるや、一の據るべき地物なく、土地は凍結して、工事を許さず、人は全く平地に伏臥して、積雪の爲め半身を埋没せられあるも、尙ほ亂射を逞しくする敵彈の爲め、附近に屬ゝ死傷者を生じたるに、軍旗は終に一彈をも受けざりしなり。

夜半に至り護衛中隊長に導かれ、土囊にて築きたる散兵壕に移され、爾後同所に在りて、

（國旗の尊厳を念ほ一層厚くしたものです）

敵彈に對し稍ゝ安全に掩護せられたり。

以上の狀況にありて、以上の如き壯烈なる戰鬪をなしたる我軍旗に對し、敵は其毒手を以て、終に一點の汚辱をも加ふること能はざりしは、素より軍旗の神聖森嚴に因ると雖も、亦以て天祐と謂はざるを得ず。嗚呼光輝ある軍旗なる哉。

（此軍旗は沙河滯陣中穴居中敵彈砲弾其塹壕内に落下したるも不思議に無事でした）

辱は、くもり、しみなどですから、汚辱は、つまり汚れた跡です。

四　對陣中の景況及工事

第三、第五中隊は、既に第一線に增加し、第九、第十中隊は、依然第二停止位置に在り。

其位地たるや、僅に凹地狀をなすも、固より一の地物なく、土地氷結して作業を許さず、全く敵彈に對し掩護の術なく、各兵は積雪の上に伏臥のまゝ、身邊の表土を掻集め、身體を掩蔽する數時間、黃昏に至り、各自の携行せる一土囊に土沙を塡實し、之を掩體として、纔に伏射散兵壕の高を得たり。然れども其高及厚は、共に敵彈に對し掩護たるに足らず、全く伏臥のまゝ、其位置に在るの已を得ざる狀況なりき。

敵は頑强に其位置を固守し、單獨兵と雖も身を起すときは、忽ち猛射するのみならず、

夜間に於ても、我夜襲を顧慮し、危懼の念を以て、時々亂射をなし、又敵砲彈は、常に猛烈なる威力を以て、附近に落下せしも、幸にして、僅に八名の負傷者を生じたるのみにして、夜に入り工事に勉めたり。

單獨兵といふのは、隊列から離れてあるといふ意味ではなく、隊列に在る在らぬに關らず、唯一人の兵でもです。

三日、朝來敵の重砲彈は、間斷なく身邊に落下せしも、幸に前夜來の工事稍ゝ進捗し、味方散兵壕に近き强度に達しゐりしを以て、其破片、彈子の侵徹を防ぎ、大に損害を減ずるを得たり。

侵徹は、軍隊語で、彈丸のとほることです。

然るに午後六時頃、一重砲彈、散兵壕内に落發し、二名の戰死者と、四名の負傷者を生じたりしも、疎散の配備の爲め、比較的損害を減ずるを得たり。

三日夜に至り、後方豫備隊たる、第十一、第十二中隊より搬致せる土囊を、上等兵以下二十名をして、第一線に運送せしめ、之と同時に其一部を以て、掩體を堅固ならしむるに力め、

夜を徹せり。

戰鬪中の聯隊では、自分で土囊を造ること出來ませぬ。けれども其必要なことは、前々からある通りなのです。で、後方の豫備隊で造つて、前線に送越したのです。

敵と相對峙する久しきに從ひ、便所設置の必要を認め、三日夜之が構築をなさしめ、且つ彈藥、糧食等の分配、搬送兵及傳令の交通を顧慮し、各要所に掩體を築設して、據點となし、以て便利を與へたり。

爾後對陣中も、時々敵の亂射を受けしのみならず、大隊の位置は、沙河堡に通ずる道路附近なるを以て、殆ど間斷なく、敵の掃射を被り、三名の戰死者と、四十名の負傷者を出せり。

掃射は、字の如く、一掃きに掃くやうに射つのです。

二日來寒氣嚴烈、特に二日の如きは、飛雪紛々、身を雪裡に埋むるの狀況なりしに於て、殆ど凍傷者を出さゞりしは、畢竟各級幹部の、凍傷豫防に關する注意の周到なりしと、各兵卒亦自ら奮勵して、睡眠を戒め、或は四肢の運動に注意したるに由ると雖も、抑ゝ亦天祐と謂はざるを得ず。

幹部又は司令部又は本部は師團又は旅團司令部又は長官は師團長又は軍團長等を指す。

幹部といふのは、此も陸軍の常用語で、やはり意味は、みき、もと、といふにあります、最下級幹部は下士で、戰時では分隊長。小隊の幹部は小隊長。大隊、聯隊では本部。師團では師團司令部などです。

四肢は、四つの手足。

實に甚の疲勞よりも、何よりも、用もないのに眠れないほど、苦しいことはありません。同じ眠いでも、何かしてゐた方がまだよいので。ですから前にある通り、出來得ぬ工事までも、探豁の爲めかた〳〵、させられたのですが、甚は彈丸の霰の中に、身動も出來んで、雪に降埋められても、ぢつとしてゐて、先づ夜になつたからよいと思ふと、こんどは眠ることも出來ぬのです。これでは如何なる勇者でも、疲れずにはをられません。それを忍耐してゆかふといふ、其辛苦は、實に言ふて喩へやうのあるものではありません。

これで前線の記事は、おしまひになりました。そんならもう、何も、書くことがないかといふと、どうしてなか〳〵、そんな譯のものではありません。人間は飯を食ふし、銃は彈丸を食ふ。それがなければ、戰鬪は出來ぬのです。然も此等のことに就ては、他の記事には、餘り書いてありません。それでは、器械の動くのばかりを見て、蒸汽のことも、油のことも、とんと思はぬと同じことです。此記事には、そんな偏重なことはありません。と言つたら、諸君は又、前線の華々しいことゝは違つて、面白くあるまいなど思はれるかも知れませぬが、それがどうして、然うではない。大へん面白く書かれてある。それのみならず、此記事のやうに、さういふことを、十分明細く書いてあるのは、外には是までないのです。から、諸君は反て、非常に珍しく、且つ面白く感じられるだらうと思ふのです。段々と次を御覽なさい。

一般の彈藥補充は野戰補充外の中に書いてあります。

(乙)彈藥補充の景況

一　彈藥補充の系統及使用せる部隊

系統といふと、ずつと上からの系統を、殘らずいふことゝ思はれるかも知れませぬが、此でいふのは、そんなのではないです。つまり此聯隊で、戰場で使用した、其關係だけの系統です。

彈藥は、于家崖子陣地の、彈藥庫に貯藏してあるものより補充し、尙ほ緩急の場合に應ずる爲

め、小行李一回分の彈藥は、各其大隊の後方なる、于家窪子及藤本堡壘内に運搬集積し、其空駄馬は、三家子に在る縱列より補充し、長興甸に位置せしめ、三月四日以後、敵の砲擊稍〻緩漫なるに至りてより、駄載のまゝ、于家窪子南側に招致し置きたり。

緩急、緩は、ゆるやかで、急とは反對ですが、緩急と熟したときには、急のことです。

此時彈藥は、于家窪子の陣地に彈藥庫をこしらへて、貯へてあつたのです。そこで攻擊前進といふことになつたので、今まで使つて減つてをる彈藥を、右の彈藥庫から補充して、各人に十分に持たして、尙ほ小行李に一回積むだけの分を積出して、それは于家窪子堡壘と、藤本堡壘とに送らせたのです。これは小行李を俟たんでも直に補充の出來るやうにしたのです。そこで其一回積み得るだけの彈藥を、右の二堡壘に運んだあとは、小行李の彈藥駄馬は、空になりましたから、こんどは三家子といふ處に居る、歩兵彈藥縱列にやつて、其空を補充さして、さうして暫く長興甸といふ處に止めておいて、危險が稍〻少くなつてから、また近く呼寄せたのです。

小行李に補充をすると、こんどは縱列の彈丸が其だけ減ります。それをどうするかといふと、縱列は又縱列で、後方から補充する道があります。

輜重輸卒に一列の兵として同戰功を得るは出し難き時機にあるのです

それから前にもどつて、前線では、彈藥がぐん〳〵減る。それを、于家窪子と藤本二堡壘に置いたのから補充するには、どうしたかといふと、次の如しです。

第一線への彈藥の補充は、專ら豫備隊を使用し、一二回は、小行李輸卒をして、之を補助せしめたり。

若し豫備隊から、火線に增加する兵があれば、それに持たしてやるのが通例ですが、此時には、前に見えたやうに、後になつて只一回增加したばかりですから、然ういふ便宜がない。で、わざ〳〵豫備隊の兵士を使つたのです。尤も斯ういふ場合には、まだ戰線に出ない兵士を、使ふのがあたりまへです。小行李の輸卒を使つたのは、それは本文にある通り、ほんの補助に過ぎぬでせう。

長興甸より于家窪子及藤本堡壘までの運搬は、專ら小行李輸卒を使用したり。

こゝに小行李輸卒とあつてみると、前の駄載のまゝとあるのと、矛盾するやうにも見えますが、然うではありませぬ。こゝのは、敵の砲擊の、まだ盛なときであつたのです。

二　小行李彈藥運搬の景況

三家子彈藥縱列よりの運搬は、空駄馬を生ずる毎に、監視人を附し、逐次之を行ひたり。此運搬は、容易なりき。

三家子から、長興甸まで〻す。

此運搬も、只一回くらいでは仕方がありませぬ。ずん〳〵前の方では減りますから。一體彈藥は、いくら用意をしても、多いほどよいのですから、空駄馬の出る毎に、必ず縱列から、受取らせたのであります。

長興甸より、于家窪子及藤本堡壘間は、約三千米あり。敵の砲擊盛にして、到底駄載のまゝ招致すること能はざりしを以て、小行李輸卒をして、交通路に由り、逐次送致せしめたり。此運搬は、危險甚しく、頗る困難なりしも、交通路ありしを以て、幸に一人の負傷者なく、各大隊とも、二回往復し、約四時間乃至五時間を費して、小行李一回分の運搬を結了したり。

二回往つたり來りして、三十町足らずの處に、四五時間もかゝつて、やつと小行李一回分

を運んだのです。成るほど砲擊の、盛であつたことも想はれます。

交通路は、後方交通の爲め、故らに開いてある道で、損害を受けないやうに、受けないやうにとはしてあるのですが、こゝのは、まだそれほど完全とまでには、ゆかなかつたのでせう。

三　于家窪子及藤本堡壘より、第一線へ彈藥補充の景況

于家窪子及藤本堡壘より、散兵線間は、約六百乃至七百米にして、全く開豁し、加ふるに敵の銃砲彈の掃射甚しく、壕間は單獨兵の交通と雖も、不可能の狀況にありしが、三月二日は、殊に甚しきを加へたりき。當日第一線大隊は、未明より戰鬪を繼續しありしを以て、日沒まで、携帶彈藥の維持を保し難かりしより、已を得ず第一回補充は、白壕の危險困難を冒して、補充せざるべからざりしも、爾後の補充は、夜暗を利用して之を行ひたり。左に白壕補充及夜間補充に區分し、其實施したる方法を記述せん。

これから書かれてあることなどは、とてもありふれた記事などに、あり得べきことでないのです。諸君が之を見られたなら、餘程の學問にならうと信じます。

其一　白丈補充

第一線一個大隊の爲め、約一個小隊を使用せり。其補充方法は、或は躍進法を用ひ、或は遞送法を用ひたり。

躍進法は、各分隊毎に區分し、其一個分隊を以て、一個中隊の補充に充てたり。此各分隊は、輕裝をなし、于家窪子及藤本堡壘にある、最近の彈藥庫に到り、各人七百二十發(二括包)を首に掛け、括包を前に抱き、頸から掛下げて、前で抱くやうにしたのです。

先づ各其補充すべき、中隊の後方(于家窪子及藤本堡壘内)に到り、約十米を隔てゝ進出し、逐次其補充すべき中隊の、全正面に到る如く間隔を取り、各個に躍進して、散兵線に到着し、之を一散兵に交付せり。

先づ其往くべき分隊の兵士を、彈藥を頸から吊つて抱へたなりで、堡壘内に並ばして、其分隊の往くべき中隊の後に對して、立たしたのです。而してよく其處で、斯う〳〵と指示して、教へたのです。斯うすれば、眞直に、間違なしに往くことにもなり、道も近い譯

戰鬪に於ける仕事は皆此通り大抵命令です

です。

それから、堡壘から出るには、進出路は狹いから、分隊だけの人數が、横に並んだまでは出られないので、十米おきに、段々一人づゝ出して、出るに隨つて廣間隔に開いて、ちようど其が、中隊全體の幅だけになるやうに、彈丸が一體に行渡るやうにしたのです。それから皆とゝゝッと駈けて往つては伏し、駈けて往つては伏しゝて、とう散兵に交付したのです。

此躍進間、敵は絶えず銃砲火を送り、戰線に近づくに從ひ、刻一刻、小銃及機關砲の射擊劇烈となりき。其前進が如何に危險なりしやは、大間隔に散開して、各個に躍進したるに關せず、尙ほ一個小隊にて、十數名の死傷者を生じたるを以て察するに足るべし。

補充中死傷したる者の彈藥は、夜間之を收容し、之を分配せり。

これは、此時の死傷者の彈藥で、補充の爲に持つて往つた其ですが、一體兵士の各自に携帶てをる彈藥といふものは、前進中でも、又は停止してをるときでも、負傷をしてもう射てないやうになると、取出して戰友に渡すのが法です。で、若し自分で取出して

渡すことの出來ないやうな負傷者や、又は戰死者のゝは、戰友が其を取つてくれるのであります。然ういふ風にして、彈藥は、一發でもむだにせぬやうに、一發でも戰線に多くするやうにするのです。

遞送法も亦、躍進法と同じく、分隊毎に區分し、各分隊は、其補充すべき中隊に向ひ、前後に約三十米の距離を隔てゝ遞置し、逐次遞送したり。

人が三十米毎の距離にをつて、後から來る彈藥を、前へ〳〵と繼ぎ送つたのです。

其危險及受けたる損害の景況は、殆ど躍進法と大差なかりき。

此彈藥補充に要したる時間は、午後二時頃より、午後五時頃に亘れり。即ち約六七百米の間を、約三時間要したるなり。以て其如何に困難せしかを知るべし。

其二　夜間補充

夜間の補充は、晝間に比し、頗る容易なりき。是れ晝間に比し、敵彈の顧慮少きを以てなり。

夜間も亦、晝間と殆ど同一の方法に依り補充したるも、唯各個躍進の必要なきを以て、

各分隊は、一列側面行進を續行したるを異なれりとす。

こんどは散開しないで、一列に長くなつて、ずん〳〵往つたのです。夜は本文にある通り、敵彈の危險が少いからです。

又夜間は、一回乃至二回、小行李輸卒をして、直接第一線まで運搬せしめたり。又一部は、補助擔架卒の歸途、空擔架に載せて、運搬せしめたり。

此補助擔架卒云々は、晝間の死傷者を夜間收容したので、其擔架の空いたときにも、彈丸を載せさしてやつたといふことです。補助擔架卒といふのは、各中隊の兵士の中から豫て其教育を受けてある者を出すので、假繃帶所といふのが開かるゝやうになると、大隊の醫官の指揮を受けるものです。それまでは、やはり他の兵士同樣、戰線に出てをります。

四　戰線に於ける彈藥分配法

戰線に於ける彈藥の分配法は、各散兵の遞送に依れり。即ち彈藥補充兵より、括包のまゝ之を受領し、伏したるまゝ之を解き、先づ一紙包づゝ、之を左右の散兵に分配、遞送せし

めたり。此方法は、容易に且つ確實に施行せられたり。

實に細いところまで書かれてあります。斯ういふことなどは、到底實地にやつた人でなければ、書き得ることでありませぬ。いかに觀察に鋭い新聞記者や、雜誌記者でも、とてもかういふことまでに、眼を屆かし得るものではないのです。どうです、諸君も、こんな記事は、きつと始て見られでありませう。僕の此記事を稱るのも、決して故なしにあらずでせう。そこで尙ほちよつと言つておきますが、此彈藥補充といふことは、各指揮官の、重大なる責任の一です。

（丙）武器、彈藥、被服の景況

一　武器に就て

寒氣は、當時零下十五度乃至二十一度なりしが、

此寒暖計は、攝氏です。

其武器に及ぼしたる影響は、使用上に甚しき支障を來したるを見ず。又破損の因となれることもなきが如し。唯當時射手の手指稍ゝ自由を失したる爲め、使用上多少の困難を感

隨分寒氣が酷いで

じたるに過ぎず。

零度以下二十一度までの寒氣であつたけれども、小銃には別にさしひゞきもなかつたが、只射手即ち兵士の指が凍えて、十分自由が利かなかつたので、いくらか取扱ひに不便であつたといふのです。

戰鬪間武器に注油の不足より、機關部の運動に、多少澁滯を來したるは確實なり。殊に支給油質の不良なる爲め、十分の効力を有せざりし感あり。

戰鬪中に、小銃に油をさすのが、其油の少い爲め、いくらか、器械が澁るやうになつたといふのです。機關部といふのは、銃の一部の名稱で、彈丸を籠めたり射つたりする、器械のある處です。

さうして殊に、此時支給されてあつた油は、餘り良くなかつたので、それで利きもわるかつたやうに思はれるといふので、此記事を書かれた、某少佐の意見です。

斯ういふことなどは、とても局外者などの、知り得べきこと、言ひ得べきことではありませぬ。

將來戰鬪を豫期したるときは、各人に消良なる油を、成るべく多く支給すること、必要ならんと信ず。

此も此記事を書かれた某少佐の意見です。此少佐の意見を見るに、初には事實を事實として、確實なりと書かれて、次に効力を有せざりし感ありといひ、次に必要ならんと信ずと書かれてある。詢に穩な書き方で、其體を得たものであらうと思ひます。

豫期は、宇の如く、豫め期すで、こんどはきつと戰鬪があるであらうと、思はれたときはです。

武器の使用に堪へざるものは、逐次死傷者の武器と交換し、戰鬪上惡も支障を來さゞりき。武器の使用劇甚なる爲め生じたる破損は、殆ど皆無なりしといふも可なり。隨て豫備器具は、全く使用せざりしなり。

使用した爲に破損したものは、若干かあつたことに聞きますけれども、此處に斯う、劇しく射つた爲に破損したのは、殆ど皆無といつて可いとあつてみると、其等は、劇しく射つた爲ではなく、前進の際に、轉んでぶつけたとか何んとか、別の事での破損が多かつたのであ

りませう。斯うしてみると、我三十年式歩兵銃も、十分立派な、丈夫なものであるのです。

豫備器具。ちよつとした修理は出來るやうに、携行されてあるのです。

綿布を以て、銃器の要部を被覆したるは、多少防寒に就き、使用上便利なりしならん。然れども此被覆なくも、寒氣の爲め使用に甚しき困難を見ず。是れ各兵は、支給防寒毛絲製手袋を穿ちありしに由るなり。此防寒手袋穿用の爲に、武器の使用上、惡も不便を感せざりき。

銃に木綿切を卷付けて持つたのです。それに就て、此記事の主人少佐は、成るほど防寒の爲には、些とは役にも立つたかも知れぬが、たいしたこともないやうであるし、それをせんでも、支給された毛糸の手袋をさへ用ひてあれば、指先が十分利かなくなつたくらゐのことはあるが、別に銃を扱ふに耐へんといふやうなことはない。さうして防寒手袋をはめても、見かけの無器用に似ず、銃の操作には、不便がないといふのです。且つ少佐は、次のことを擧げて、綿布で卷くことの宜しくないことを、示されてあります。

此等の實驗は千金の價あるのです

銃を綿布にて被覆するは、一の弊害あるを發見せり。即ち其被覆部に、敵の小銃彈を受けたるとき、之が發見に苦むこと是なり。現に第二大隊に於て、四月十日、被覆綿布を除去したる際、其被覆部に於ける銃床に、敵小銃彈を受け、貫通又は破損したるもの、十九挺を發見したり（此十九挺の使用兵卒は、皆全く完全銃と思惟しありたるは確實なり）

後で綿布を解いて見ると、創を受けたのが、十九挺もあつたのです。ところが其銃を持つてゐた兵士達は、いつ彈丸を受けたのか、ちつとも知らずにゐて、全く無傷のものとのみ思つてゐたのです。さういふ銃を持つて戰鬪をしては、其だ不利益です。銃に狂が出てをらぬともいはれませず、突擊のときなどは、そこから毀傷まぬとも限らぬからです。

二　費消彈藥に就て

沙河堡攻擊戰鬪に於ては、前項戰鬪の部に述べたる如く、敵は殆ど半永久的の工事に據り殆ど目標を現さゞりしを以て、七日間の長時日に亘り對陣したるも、比較的彈藥の費消は大ならざりき。

豫備隊では、一發も射たないし、第一、第二大隊も、前にある通り、餘り彈丸は使はなかつたのです。それでも十萬から射つたといふことです。此方でも盛に射たなければならぬ戰鬪ですと、此何倍に上るかも知れませぬ。どうです彈丸の要ることは、隨分肝の潰れるものでせう。

敵の費消した彈藥は恐らく此十倍以上でせう

三　被服に就て、

防寒被服は、一般に其効力多大なりし。殊に便利なりしは、毛糸製手袋、同靴足袋、同半覆面頭巾なりとす。毛糸製手袋あるときは、絨製防寒手袋（外套に附屬のもの）は用ふを要せず。加之、該絨製手袋は、戰鬪間殆ど使用せざりし。是れ絨製手袋を穿つときは、全く動作の自由を失ふを以てなり。

外套に附屬してをる絨製手袋といふのは、廿七八年役の折からあつたもので、厚くて大くはあるけれども、拇指一本別になつてあるばかりで、外の四本の指は一所ですから、射擊をするにも、引鐵を引くことがむづかしいのです。

又毛糸製半覆面頭巾を用ふるときは、耳覆及防寒用外套頭巾を用ふるを要せず、加之外套頭巾を冠るときは、頭痛を起すを以て、戰鬪間全く使用せざりし。

僕等も外套頭巾は用ひませんでした。しかし、臥るとき足を包むにはよかつたです。冠履轉倒も、戰爭のときには別ものです。呵々。

携帶天幕の便利なるは、此に言ふを要せざるも、殊に便利を得しは、降雪の際、之を頭上より被りて夜を徹し、又敵を距る僅に六百米に接近しありしときも、漸く散兵壕の强度を增すに從ひ、夜間之を張りて寒を凌ぎ、大に暖を得たること是なり。

防寒外套は、稍ゝ運動の輕捷を妨げたるも、防寒上大なる効力ありて、最も利益ありき。運動の輕捷を妨ぐるといふのは、防寒外套は、厚く大くて、袖も大へんに長いからです。諸君も即秋でも着て御らんなさい、いど〳〵して、身體が思ふやうに働けませぬ。

靴は、大概編上靴を穿用し、未だ支給せられざる者は、短靴を穿ち、鳥拉靴及藁靴を携行せり。

編上靴は、紐で編上げて穿くので、短靴は、先に兵士の穿いてをつた、あの半靴です。

鳥拉靴といふのは、滿洲人の穿くもので、ウラ艸といふ草を入れてあるものなさうで。

藁靴は、我國の寒地で穿くものです。

未だ支給せられざる者といふのは、編上靴は、後から支給つたのですから、當時はまだ行渡らなかつたのです。

寒を防ぐ爲には、鳥拉靴がよい、藁靴がよいと、さういふ各種の靴までも、支給されたのです。戰時の當局者の苦心は、なか〳〵容易ではないのです。

短靴を穿用したる者は、編上靴穿用者に比し、著しく寒氣を覺え、加之、夜間機を見て靴を脫し、足を摩擦し、又は襪を交換する等の場合に、麻脚袢を著用しあるを以て、之が脫穿に煩累多く、殊に寒氣の爲め、手指の運動不自由なるに於て、一層困難を感じたり。

短靴は、大へんに足が冷たいばかりでなく、短靴を穿くときには、諸君も御ぞんじの、靴の踵の前から革で釣る、あゝいふ脚袢を穿くのですから、襪を交換るにも、又足を摩擦つて、暖にするにも、脫いたり穿いたりするのに、煩累はしかつたといふのですが、今は皆上靴になりました。

對陣中停止間は、鳥拉靴及藁靴を用ひたり。

此二つの靴は、運動には不便で、殊に駈歩などはむづかしいから、停止間に用ひたので

す。

藁靴は、最も保温力強く、殆ど足部の寒を知らざるが如し。烏拉靴之に次で保温力あり。此烏拉靴は、各人の足に適合するものを用ひ、且つ底部の滑走を豫防する方法を講ずるときは（少しく底を厚くし、普通支那靴の底の如くせば、同時に濕潤をも防ぐべし）行動、停止間とも便用して、最も便利なる靴なるべし。當時支給せられたる烏拉靴は、大概過小なりき。

藁靴が、一番暖で、烏拉靴は其次であつたが、烏拉靴が能く足に合ふものであつて、且つ滑らないやうな工合にこしらへることが出來れば、大へんに好いといふので、又底をもう少し厚くしたなら、濕潤氣のはいることも、少からうといふのです。これは濕潤氣が、どうしても通つたからのことでせう。又當時のものは、小過ぎたとありますが、これは支那地で、俄に調へたのでありますから、さう注文通りにはゆかなかつたのでせう。

第二大隊に於ては、防寒用支那靴の若干を試用したるに、其結果甚だ良好なりき、此靴の

此等被服裝具の上に役大の實驗に及ぼす事は、其の價は烏拉靴より廉なり。

防寒用支那靴も、價も廉くつて、好いといふのです。

手袋は、一双なりしを以て、大に不便を感じたり。是れ降雪又は氷土掘開等の爲め濕潤し、作業行動間は、特に之を感ずることなきも、停止すれば、忽ち濕潤したるが爲にして、寒を喚ぶこと甚しく、却て之を穿たざるに優れるに若かざるに至る。故に將來二双を支給せらるれば、手の防寒は、他に手段を講ぜざるも可ならんと信ず。

一双は、一對で、一揃です。

此意見は、此時の狀況に就てのことですが、斯ういふ意見もありますし、又其外にも、此戰爭によつて、十分經驗を積まれたことですから、當局者には、必ず十分夫々の準備があります。で、若も今後、又寒い土地で、戰爭をするやうなことがありましたなら、こんどはきつと、此時よりも、もつとずつとよい手當であらうと思はれるのです。

それは兎に角、一部隊を指揮する人とでもなりますと、唯戰鬪をするばかりではなく、斯ういふことにまでも、總てに注意をして、部下の爲め、又我陸軍の爲に、考へなければ

ばならぬのです。其外又種々な事務がある。報告も出さなければならぬし、種々な表も作らなければならぬ。其外食物のことやら何やかや、隊長一人ですることではありませぬけれども、軍隊でも幹部となると、さうのんきなものではありません。

こんどは、衛生勤務です。これも非常に面白く、目に見るやうに畫かれてあります。

(丁) 衛生勤務の景況

(一) 假繃帶の業務

假繃帶所といふものは、戰鬪間隊附軍醫の開くもので、一番戰線に近い處に位置します。それから其次には、繃帶所が開かれます。これは衛生隊でするもので、其次に又、野戰病院があります。此野戰病院といふものも、常に立てあるものではなく、必要のときに開かるものです。

一　開設準備　三月一日、各大隊長は、劇戰を豫期し、各軍醫に命ずるに、勝山藤本堡壘右翼の線より以西の地に於て、傷者の收容及後送に便なる地形を偵察し、豫め諸準備を整へ、戰鬪開始と共に、假繃帶所を開設し、衛生作業の敏活に行はれんことを以てす。

各軍醫は其意圖を體して、即日于家窪子を發し、各大隊戰鬪展開の豫定線中央後に當れる拖塚を、假繃帶所に撰定し、其に隣れる便宜の休宿地を、重、輕傷室に撰定し、歸還して其位置並に概況を報告し、以て攻擊前進の命を俟てり。

各醫官は、大隊長の意ふ所の如く、其事を行はうが爲に、準備をしたのです。

休宿地は、大方今まで、味方の堡壘線の守備兵が、交る〳〵休んでゐた處でもありませう。

二　假繃帶所開設　三月一日午後十一時、各軍醫は、所屬大隊に跟隨し、

跟隨は、ついて往くことです。

第一大隊にては、豫定の位置、即ち于家窪子北方我陣地內（對陣間第二大隊の患者收容所）に開設の準備をなし、三月二日午前六時、第一傷者の到著を以て、業務を開始し。

第一傷者といふのは、一番初に來た傷者です。

第二大隊は、藤本堡壘內に、同じく開設の準備をなし、三月二日午前三時三十分、第六、第七、第八中隊が、我潛伏斥候の線に展開すると同時に、業務を開始し、第三大隊は、同じく日午前九時、後方豫備隊の線に在りて開設し、各補助擔架卒を派して、傷者の發生に備ふ。

三　假繃帶所及附近の光景　三月二月午前五時、彼我の銃聲稍〻強盛となり、漸次猛烈を加へ、砲火も亦續て開始せられ、曉天の閑寂は忽ち破れて、砲煙彈雨の修羅場と化し、飛雪紛々、慘憺たる光景、刻一刻に增進せり。

修羅は、佛敎から出た語で、阿修羅の略です。阿修羅には、種々の意義があるやうですが、こゝでは殘虐の意と見て、さしつかへないのです。

傷者の多數は、皆平坦なる無蔭蔽の開濶地を躍進するに際して、生じたるなれば、單獨步行に堪ふる者と雖も、後退するこゝ能はず。

單獨云々。人手を藉らず、自分で步いて退き得る者でもといふのです。輕傷者は、なるべく一人で、戰線を退くことになつてをります。

又各人に、繃帶包を渡されてあります。傷を受けても、自分で繃帶の出來る人は、先づ其包を解いて、主として創口の汚れぬやうに、其場で手當をするのです。繃帶包には、手當に必要なものが入つてある。其を服の左の裾の裏に入れるのですが、此外尙ほ兵士には、常に幾種の藥を支給されてあります。

衞生勤務は困難且つ危險でもあるが、生死に關して殊勳を以て賞せられたる多くの人のいのちの道理でせう

適〻後退を企つるあるも、途中に於て第二彈を被り、其目的を達する者甚だ少く、雨注する鉄彈と、熾烈なる重、野砲彈とは、絕ず假繃帶所及其附近に落下し、殊に重砲彈の落著は、寧ろ第一線よりも甚しく、掩蓋を拂ひ、橫墻を裂き、第一大隊にありては、重砲彈掩蓋を貫通して、壕內に破烈し、一兵卒に重傷を負はしめ、附近通行の兵卒數名を死傷せしめたり。第二大隊にありては、軍醫の從卒〻假繃帶所の掩蔽下に於て、橫墻に落下し來れる十五珊重砲彈の破裂により、一身四十八個の彈子を受け、射入射出口は、恰も蜂巢狀を呈し、擔帶せる水筒且つ四個の彈痕を留め、壯烈なる即死を遂げ、一擔架卒は、重傷室の東端掩蔽下に在りて、重砲彈破烈の爲め、左上膊を挫斷せられたり、第三大隊に於ても、巨彈屢〻掩蓋を拂ひ、一擔架卒は、掩蓋を貫げる重砲彈破片に觸れ、上肢及頭蓋骨を挫滅せられ、慘烈の最後を遂ぐるに至れり。

こゝに審いてある擔架卒は、二人とも補助擔架卒な譯です。

さて如何です。衞生勤務だからといつて、決して危くないものではありますまい。次に尙ほ種々な場合も現れて來ますが、此一項を見ても、いかに此勤務も、勇敢を要するか

がわかりませう。

先づ一身に四十八個の彈子が中つた人、それが皆貫通たものとしますれば、實に九十六個の穴があいた譯です。一軀に九十六個の穴、蜂巣の狀といふのも、決して過大ではありますまい。慘狀實に目もあてられなかつたらうと想ひます。それから左上膊の挫斷。左上膊は左の二の腕ですが、すつぱりと斬られたのならまだしも、挫きもがれたのです。それから、戸彈は大な彈丸で、やはり重砲彈ですが、一擔架卒は、上肢及頭蓋骨を挫滅せられとあるところから見ますと、兩手と頭の鉢は、めちや〳〵に潰されてしまつたのです。これが平時であつたら、どんなでせう。しかしそこが戰場です。誰あつて、生を期する者などはありませぬ。君國の爲に盡さんことを願ふ外、復他事を念はぬのであります。即ち却て此等の人は、其死狀い慘なるだけ、それだけ愈〻名譽の戰死なのであります。

四　假繃帶所に於ける傷者救護の狀況　三月二日、午前三時より、衛生部員及假繃帶所附屬の兵卒は、各其分擔によりて、傷者處置の設備を了し、燃料、飲料水、沸水、粥、牛

乳等に至るまで、傷者の救護に必要なる物件は、之を集收設備せりと雖も、朝來猛烈に發射する重、野砲、小銃彈は、絶ず假繃帶所に落著し、從卒及擔架卒に悲愴慘憺たる死傷を出せしより、衛生部の一小團は、硝煙充塞の壕内に屠息して、只死命の厲鬼なる、重砲彈の落下を俟つもの〻如く、

屠息は、息をころすことです。じかし息をころして居つたといつても、此は形容に過ぎない。決して臆病なのではありませぬ。衛生部では、どうすることもならぬからです。

厲鬼の厲は、惡しき氣で、疫病の鬼といふことです。此處では、死神といふ意です。

暫時肅然、光景暗澹たりしが、軍醫は部下を激勵し、先づ看護長をして、擔架卒を戰線に派せしめ。

これも補助擔架卒です。

一面衛生隊に交渉して、收容の方針を定め、看護手には、單獨潛行して戰線に到り、傷者を誘導せしめ、

誘導といふのは、まあ案内といつたやうな譯で、看護手一人では、傷者を運ぶ譯にはま

ありませぬから、肩につかまらして來るとか、假繃帶所の在り處を敎へるとか、應急の手當をするとか、まあ然ういふやうな事をして、收容に力めしめたのであります。

軍醫は、傷者の創部を點檢繃帶し、或は救急法を行ひて、回生の任を盡し、重、輕、傷者を區別し。

救急法は、ちよつと間に合せといふ意義ではないです。其時其場合に於ての、適當の處置なのです。其法、即ち仕方は、此に言ひ盡す譯にまゐりませぬ。

回生は、古くから醫者の方で使つてをる語で、死さうになつた者も、生回らせるといふ譯なのですが、此處ではつまり、醫者の道を盡したことです。

看護長は、其區分に從ひ、直に重、輕症室に移し、從卒は、準備せる沸水、粥汁、牛乳を供給し、焚火採暖せしめ、

火を焚いて、暖まらせたのです。此爲に、前に燃料を多く集めたのです。

後方勤務の擔架卒は、後送を開始し、

此擔架卒は衞生隊の擔架卒でせう。後送は、繃帶所か、野戰病院へ送つたのです。

衞生作業は、爲し得る限りの力を以て、進捗せしむ。殊に夜間は、收容最も容易なるを以て、傷者の輻輳甚しく、三月六日、假繃帶所を閉鎖するに至るまで、殆ど一睡の餘閒もなかりき。

輻輳は、車の矢のやうに、八方から集まることです。

(二) 傷者收容の景況

二日の狀況既に此の如し。目標の大なる擔架の進行、素より望むべからずと雖も、零下十五度の氷雪上に呻吟し、且つ曝露の悲境にある傷者を救ふの策は、之を講ぜざるべからず。乃ち補助擔架卒に命ずるに、傷者發生の地點及狀況を偵察すべきを以てし、單獨潛行して、散兵線に到らしめ、歩行に堪ふる者は、附近の地物に蔭蔽せしめ置き、時機を見て之を收容せんことを企圖せり。午前七時、第二大隊補助擔架卒は、負傷者十數名を誘導して假繃帶所に來集し、告ぐるに傷者の多數を以てし、他の擔架卒も亦、各四五名の傷者を伴ひて、假繃帶所に來著し、連々絶ゆることなし。故に第一、第二大隊の假繃帶所は、此時こそ俄に繁忙を極め、全力を擧げて傷者を處置するも盡くるの期なきに、然も傷者は、

皆自己の苦痛を忘れて、戰線傷者の氷雪上に呻吟する者、尙ほ多きを告げ、速に擔架を派して、戰友を救助せられんことを懇願して止まず。

死生を共にする戰友の情といふものは、それは實に厚いものです。さうして、長く軍隊教育を受けた者ほど、此情が厚いのであります。尤も一ツは、精神の鍛練にもよりませうけれども、戰場に立つて、氣がいら〳〵して、己は己、人は人といふやうなことは、兵士には殆どないことです。精神修養の不確實な者は、實に甚なければならぬことです。

戰友の情誼といふものは、實に然ういふものでありますから、其だからこそ中隊長をも眞に親とも思はれるので、中隊長の方でも亦、眞に子のやうにも思ふのです。乃ち水火に赴くといへども尙ほ可なりにも、至るのです。

然れども、未だ衛生隊擔架の來著なく、僅少の擔架を有するのみなる大隊軍醫の苦心計畫は、恰も軌鐵なき道路に、汽車を進めんとするが如し。補助擔架編成の軌軸、素より之を進ぶの器にあらず。故に作業力の全能を發揮して、萬死不利の狀況を冒し、擔架卒を督勵して、收容に勉めしもしも、重傷の收容には、少からざる滯澁を來せり。

こゝに補助擔架卒のことを、たゞ擔架卒と書いてあるのは、文章上の略し方です。此前にも、こんな處が一ケ所あります。

軌鐵は、鐵道のレールですが、これは喩です。

殊に天明後は、敵の砲火と、猛烈なる銃火を集注せられ、敵は一目標に向つてさへ、齊射を以て之を殪さんとするなり、

齊射、砲兵には齊射といつて、一種の射法がありますけれども、これは、然うではなく、只其に向つて、いつしよに射つといふ意味なんでせう。

何ぞ目標の大なる擔架の通行を許さんや。看〳〵一名の看護手は負傷し、五名の補助擔架卒は死傷せり。殊に一擔伍の如きは、一名の傷者を赴援して、其の二名を失へり。

擔伍。一組の擔架です。擔架は二人で昇きますから、一人を救はうとして、其二人ともやられたことです。

午前九時三十分に至り、降雪甚しく、大に彼我の展望を遮り、衛生隊擔架小隊亦來著せしを以て、此好機に乘じ、全力を擧げて戰線の傷者を收容せしかば、傷者の鮮血は假繃帶

所を紅に變じゝめたり。

展望は、見渡すことで、此も兵語です。

鮮血は云々。手當をすれば血も出る。大變に傷者の多かつたことを謂つたのです。

第三大隊は、午前八時三十分、聯隊の豫備隊たる、第九、第十中隊が、第一線の後方約五百米の位置に進出したる時より、傷者を發生せしを以て、第二大隊假繃帶所と連繫して、假繃帶所を開設し、補助擔架卒を指揮して、傷者の運搬を始めたり。

以上述ぶるが如く、戰線傷者の收容に勉めて日沒に至り、二百二十名を救ひしと雖も、傷者の三分の一を收容したるに過ぎず、早朝より日沒に至るまで、百斤の重荷を擔ひ、人間をです。

七百米の危險界を潛行疾走すること、數十回に達したる擔架卒の心身は、今や疲勞の極度に達せりと雖も、尙ほ之を激勵鼓舞して、夜間作業を勵行し、三月三日天明に至るまで、第一、第二、第三大隊を合して、四百五名の傷者を收容せり。

此擔架卒の勞苦、實に何とも言ふべき辭を知りませぬ。

十數時間戰場に其まゝ拋棄せらるる傷者の苦痛亦察すべしである。

危險界は、目標と彈道との關係で違ひますが、つまり、射擊効力の及ぶ處であります。

三月三日は、敵の射擊二日の如く甚しからざるも、我目標を現すときは、彼は忽ち集中狙擊を行ひ、擔架卒行の困難なる、殆と昨日に異ならず。此日谷村看護手は、戰線に在りて十數に撤り、多くの傷者を救護中、側面より來れる彈丸の爲に、腹部を貫通せられて戰死せり。呼看嗚護手一名の死は、中隊全員に對する救護力を失へるなり、然るに、今や二名の死傷者を見る、二個中隊は、其救護を誰にか託せん。

以上述ぶるが如く、晝間傷者の收容甚だ困難なりしのみならず、彼生作業の進行を防碍せられ、且つ晝間後退せる者にして、死乃至重態に陷れる者、二日三日の兩日間に、發輝少尉以下數十名に達せり。故に晝間は、專ら後送を計り、戰線傷者の收容は、夜間を利用せり。

然れども搬力弱きを以て、多數の忠者を一時に收容すること能はず。故に忠者は自己の重態を顧ず、敵に若くは倒匐して、安全なる地物を求め、我は假繃帶所に向て力行し、殊に一肢を折傷せる者にして、掉手後退を計らんとせる者ある等、其堅忍にして不屈なる、寧ろ感嘆の外あらざりき。

こゝには、患者とありますけれども、別に違はない、やはり傷者です。

掉手後退を計る。足が折れてしまつたから、手であるかうとしたのです。實に、聞くさへ痛々しい訳ではありませぬか。

三月四日以來、前面の敵は一般に靜粛となり、占領陣地の防禦工事も著しく進捗し、立姿膝姿散兵壕の中間強度に達せしを以て、傷者の發生亦た減じ、前方勤務亦た緩となり、爾後方勤務の繁忙を告ぐるに至れり。

こゝに謂ふ後方勤務は、一般に所謂後方勤務とは違ふので、勿論一般後方勤務の一部には相違ないが、此處では只、前方といふに對する後方なのです。此前にも、斯ういふのが一つありました。一般に謂ふ後方勤務は、經理、衛生、輜重等、總て戦列外のものです。各中隊に於ては、傷者一時に多發したる場合には、爲し得る限り、戦友をして之を救助せしめ、

これは、戦闘に差支へない限り、將校が命じてさしたのです。濫に出來ぬことは、前に申してあります。

蒲洲の平野に於て樹木を以外に所在の川の兩岸に露地に限ります

適當の地物を示して之に倚らしめ、時機を見て收容隊を出し、後方四本木及墓地の線に後送し、敵火を避けしめたるにより、擔架卒は、常に前進方向を、四本木の線に取り、傷者收容に、多大の便宜を得たり。

四本木の近くに、支那人の墓地もあつたと見えます。

戦闘も稍ゝ間になつた。間になれば中隊では、手を空けてまでも、傷者を打捨てゝはおきませぬ。其人情の繋る所は、前に言つた通りですから、一時も早くよくしてやりたいと思ふのです。で、收容隊、これは退却の時の收容隊とは違ふ、傷者の收容隊です。それを出して、先づ安全な一地に集めるやうにしたのです。之が爲め、衛生勤務の方では其處此處と捜し廻るに及ばないので、大に便利を得たのです。

(三) 負傷者の狀態

(イ) 戦線に在る傷者の狀態　三月二日、拂曉以來、愴烈悲慘の光景は、益ゝ其度を高め來る。零下十五度の風雪と、彈雨下に曝露せる傷者の衷心、其れ如何ぞや。壮間負傷者の後退は、途中第二彈を被るの不利あるを悟りし以來、又其擧に出んとする者なく、皆戦

線に在りて、伏臥の姿勢にて、日沒の至るを俟てり。隨て傷者は、十時間以上永雪上に伏せる者多し、此悲絶愴絶の間にも、中隊長河野大尉が、左眼より左耳下に貫通せる重傷を負へるにも拘らず、脫出せる眼球を抑へながら、小隊長を招きて後事を託せる如き（戦て戰鬪景況の條項中にあり）聞く者をして、其忠烈義憤に、感激措かざらしめたり。大尉は出血の爲め、末梢の血温漸次低減し、其足尖は凍冱に陷れり。

末梢は、醫者の語で、身體に分布してある、神經でも血管でも、其末の方のことです。

中野一等卒は、其靴を脫して。

中隊長の靴です。

摩擦を始めたるに。嗟乎何等の悲慘ぞや、一彈飛來りて、一等卒の頭部を貫通し、摩擦の手を放つと共に、彼の心臟は、其機能を停止せり。

心臟の機能が停止ば、死です。中野一等卒は、死んだのです。中野一等卒其人は、其上官たり父たる中隊長の、深創の爲に、段々に足先の方から、冷くなつて來る其末梢の際に、幾分でも温を增させようとして、靴を脫がして、摩擦つてゐた。あゝ此時の中野一等卒の

心には、只中隊長を念ふの至誠の外、身の危險いことも何もないのです。低い散兵壕の上から、其頭はきつと見えたでせう、忽ち一發の喊彈の爲に、其忠愛至厚の熱情を竭して、九魂六魄永く其身を去つたのです。あゝ實に此等の記事を讀んで泣かない者は、大和民族ではありませぬ。日本帝國の武士ではありませぬ。此文章を見ますに、筆者少佐も、感嘆の餘に、遂に之に對しては、明に死といふ文字を書きかねられたかのやうに思はれます。

（ロ）假繃帶所に在る傷者の狀態　戰線より收容せられて、細切に傷部の治療を受け、沸水、粥汁を供給せられたるときの、狂喜感奮の精神狀態は、一時其極度に達し、重傷者と雖も、目擊したる戰況の概略を語り、自己及戰友の不運を遺憾とし、敵を罵倒し、戰友の救助を懇請する等、一も自己の傷部に介意する者なかりき。

是亦實に、一語一句、悉く涙の文字です。

（ハ）低氣溫と傷者の狀態　沙河堡攻擊中の氣溫は、攝氏の零度を下ること、五度乃至二十度にして、生理學上より論ずるときは、如何に防寒衣を著するも、氷結地上に於て、

然も降雪に埋沒せる傷者の、體温を保持し得べきにあらず。然るに負傷者は、苦此寒天に晒されて、氷雪上に伏臥し、温食、採暖、不可能なりしのみならず、出血の爲め、體温の泉源を失ひて、長時降雪に包まれしに關らず、聯隊四百二十三名の傷者中、僅に二十一名の凍傷者を見たるに過ぎざりしは、奇異の感に堪へざる所なり、畢竟各自が、凍傷膏を塗り、摩擦運動を行ひ、假睡を戒めたるに因るべしと雖も、運動の自由を失へる重傷者にして、尚ほ凍傷に罹る者少かりしは、全く精神の興奮其極度に達し、組織の抗寒力著しく發揮したるに職由せしや疑なし。

組織。これも醫者の語です。此處ではつまり、身のことです。

(四) 傷者後送の景況

假繃帶所より、三家子繃帶所及長興甸野戰病院に到るの距離は、戰線に到る距離の三倍以上にして、殊に第二大隊假繃帶所よりの距離は、最も遠く、三千米以上なりしを以て傷者の收容と後送とは、一致の進捗を望む能はず、隨て傷者は、二十四時間以上繃帶所に留まる者多く、之に飲食を供する爲め、三名の兵卒を要し、重傷室に數名の看護者を要

當時此後送目的予定に達したるに擔架卒の不足し、しの擔架隊を編成せざるを得なかつた

する等、宛然衛生隊開設の繃帶所に、其趣を同じくせり、後送の方法は、歩行に耐ふる者は、其上級者に指揮せしめて、擔送と同時に獨歩後退せしめ、歩行に耐へざる者は、衛生隊擔架小隊をして、擔送せしめたり。然れども、後方勤務の擔架は、蛇曲狹隘なる交通路を行くと、其距離の遠きと、重、野砲彈の落下するとに由り、一日僅に三四回、往來せしに過ぎず、三月四日以來は、前面の歇鄣戦となり、占領陣地の防禦工事も、著しく進捗したるに由り、傷者の發生極て少く、前方の勤務緩となりしを以て、爾後主として衛生隊擔架小隊の力に依り、後送せり。然れども、擔架數少きを以て、三月六日に至るも、未だ悉く傷者を後送すること能はず、六日午後九時、命に由り、第二、第三大隊假繃帶所を閉鎖するに當り、傷者の運搬、幾に其終を告ぐるを得、死體は之を屍室に移し、豫定の時間に、業務を了れり。第一大隊假繃帶所も、三月八日、前進の命あると共に、業務を了り、同日午前六時、之を閉鎖せり。

此戰鬪に於て將校以下死傷者を出せしこと、實に六百五十名の多に達せり。之を區別すれば左の如し。

負傷將校　十四名（準士官三名を含む）
下士以下　百十九名　負傷　五百十七名
計　六百五十名

第一線傷者と豫備隊負傷者と銃砲創及部位

（1）第一線部隊傷者銃砲創及部位

銃創　五百二十五名
砲創　五十九名

胸部以上　三百八十名
腹部以下　百七十六名

（2）豫備隊傷者銃砲創及部位

死傷者六十六名中（銃創　四十三名　砲創　二十三名）
銃創四十三名中
胸部以上の受傷員數　二十三名
腹部以下の受傷員數二十名

右の如く、第一線部隊にありては、砲創甚だ少く、銃創の八十九●五%に對し、十●五%を示すに過ぎず。

%は、百分比例です。小銃の創は、傷者百人に付、八十九人五に當るけれども、砲彈の創は、傷者百人に付、十人五の割合に外ならないといふのです。

部位に就て見れば、上體の受傷、六十八●十%、下體は、三十一●五%にして、上體の負傷は、下體の二倍强なり。之に反し、豫備隊にありては、銃創六十五●二%、砲創三十四●八%にして、上體と下體との負傷數、殆ど同一なり。

此負傷したる當時の狀況を案ずるに、第一線部隊に於て、腹部以下の負傷は、大概行動間に生じ、胸部以上の負傷は、停止伏臥しある場合に生じたること明なり。

豫備隊にありては、伏臥して、僅に上體を露せる場合には、負傷者を生ぜること少くして、全身を曝露し、目標を大にしたる場合に、負傷せること多きを推知するに足る。

第三大隊に於て、死者の數比較的多く、第一大隊に於て、比較的少かりしは、全く負傷部

位に因する現象にして、甲にありては、顏面、頭の負傷者七十四名の負傷總數の、四分の一弱に當り、頭部、顏面の貫要部を傷げたるに由る。

第三大隊に於て、死者の割合に少きは、頭、顏の負傷者、僅に十名にして、負傷總數の六分の一なるに由る。

以上傷部の景況に據りて察するも、敵の射擊の如何に正確なりしかを知るに足る。

これで見ると、いかにも敵の射擊は立派なものです。

これで衛生のことは終りましたが、どうです。諸君は、衛生勤務に、これほどのことのあらうといふことを、豫て、想はれてありましたか。恐らくは、諸君の意外であらうと思ふのです。又衛生勤務に就ての、これほどの記事は、餘り御覽にはなるまいと思ふ。隨て繃帶所、假繃帶所、衛生部員の作業などのことは、これまで隨分御會得になりかねてをつたこともあるでせう。が、此記事を見られたによつて、幾分御はかりになつたでせう。

さて、此からは、飯の方です。

(戊)給養に關する景況

給養の名稱は正野戰外務令に廢止せられたるも、其實は、なほ、各部隊に於て、慣例として、大いに、これを、使用せらるるものなり

陸軍では、飲食の給與を、給養といひます、戰地での給養の方法は、先づ宿舍給養、倉庫給養、携行糧秣給養、徵發給養の四大別ありまして、又外に、部隊に現金を渡して、其土地々々で、買ひ調べらせるといふ方法があります。此事を現地調辨といひます。

宿舍給養は、其宿舍で賄はせるのが本義ですから、これは支那地のやうな、食物の習慣の違つてをる處では、とても出來ませぬ。

倉庫給養といふのは、倉庫から直に、軍隊に糧秣、即ち人間の食物や、馬飼を渡すので、倉庫が遠ければ出來ませぬから、攻擊が日々に進行して、戰鬪部隊がずん〳〵進んでゆくといふやうなときには、此法に由れませぬ。

しかし、野戰倉庫といふものは、軍隊が少し長く駐屯するやうな處には、大概開かるゝものであります。此には、兵站のことは略します。

携行糧秣給養は、持つてある糧秣を使ふので、此中には、隊の大行李、携帶口糧携帶馬糧、師團の糧食縱列も含まれてあります。携帶口糧といふのは、諸君も名

を御聞きでせう。人皆各自に持つてあるくもので、携帯馬糧といふのは、其馬につけてゆくものです。此携帯口糧及携帯馬糧は、非常特別の場合に、特別の命令あるでなければ、使はれない性のものです。

大行李の糧秣を使ふにも、亦夫々法があります。さうして大行李の糧秣を使つたときには、直に補充して、大行李は、いつでも充實になつてをるやうにしなければならぬのです。ですから、倉庫から眞に給養を受け得ますときは大行李のは使ひませぬ。即ち倉庫給養になるのです。そこで大行李のを使つたときの補充は、倉庫が近ければ、倉庫からしますが、行進中などの、倉庫のないときは、其ときは、糧食縱列から受けるのです。すると糧食縱列は又、後方にもどつて、其不足を補充します。

それから後方のことは、野戰軍ではなく、兵站の管轄になります。

徵發給養は、普通の買買では物を得られませぬときに、已むなくする方法で、これには、嚴重な規則があります。そうして決して、只取るものではありませぬ。後に相當の價を拂ふのです。

まあこんなものです。けれども、成るべくは、其土地々々で調辨した方が、總てに都合がよい。全部現地調辨とはゆきませんでも、其一部でも都合がよいです。で、大抵は成るべく、然うするやうにされるのです。それが前に言つた、隊に金を渡して隊に買はせるといふばかりでなく、兵站部でも、野戰軍でも、其倉庫を充たすには、成るべく然うするやうにするのです。で、八方に手を廻して、物資、物資、といふのは品物です。其有無を調査をして、買集めるやうにするのです。尤も其もやたらには出來ない、種々顧慮なければならぬこともあるのですが、しかし然うして土地の物資に據るといふと、第一生物をあてがふことも出來ろし、又本國から送るものも、それだけ少くすることが出來るのです。實に此本國から送るといふことは、これは實に大へんなことで、或時などは、僕等の食た米が、一升の價二圓からになつてあつたと聞いてゐます。それから見ると、土地で買ふのは、いくら貴いといつてみても、本國から送るよりは、大抵は廉いし、且つ便利なのであります。

大へん長くなりましたから、まづ此位にしておきませうが、俚俗にも、腹が空ては

戰が出來ぬといふ通り、給養は、實に大事のことで、各指揮官は、皆これに就ての、重い責任を持つてゐます。それを僕が、前には輕卒にも、これからは飯の方だと申しました。あれは甚だよくない。いかにも給養を輕しめたやうで、又眞面目とは聞えない言ひ方でした。あれは實に、僕が惡かつたのです。仍て此に取消します。

それから、しまひに、もう一言申し述べておきます。野外要務令の目次の順にも、又其外にも給養は衛生よりも、前の順になつてをるのですが、此記事には、衛生が前になつてをります。で、若し諸君が氣がつかれると、これはへんだと思はれるかも知れませぬが、これは決して、序を間違つた次第などではありませぬ。つまり此記事は、戰鬪が主なのですから、戰鬪のことから負傷者のことに移ると、見よくもあるし、移りもよい。で、故と斯うされたことに思はれます。

聯隊が沙河堡の敵に薄り、急造不完全なる散兵壕に據り、彈雨の下に、殆ど七日間、停止せざるべからざりし時に方り、寒威凜烈、地表深く凍結し、降雪之に加はり、慘況實に名狀すべからざりき。此時に方り、凍傷の豫防と體力の維持とは、戰鬪の勝敗に關する一大

第一線に在る者の給養を出來得るだけ完全ならしむることは、後勉むる方針であります。此場合に於ける時に、期の繰り延しを惜む

緊急事にして、之を督するの方、一に繫りて給養の一點に存すると謂ふも、過言にあらざりしなり。是に於て各大隊の給養官は、一大奮勵を以て、之が給養の事に任じ、只管給養品の豐富と、温食の供給とに、全力を遏盡せり。

こゝで給養官といふのは、主計官です。

各大隊は、于家窪子を距る、約二千米の長興甸に炊事場を開設し。殘留せる輕症患者、及輸卒を以て、炊爨に當らしめ、湯は于家窪子に於て沸せり。

糧食、及薪炭の運搬は、長興甸より于家窪子までは、駄馬及支那車輛を以て、多くは日沒後に於てし、于家窪子より第一線までは、多く旅團の隨備たる二個中隊を以てせり。當時湯水の運搬は、其容器に窮し、初は二個中隊全部の、水筒を以て運び、第一線の空水筒と交換の方法を採りしも、繁雜にして、十分の給水をなすを得ず、仍て遠く拉木屯附近まで、穴居の跡を搜索して、漸く二十四個の大小空樽を得、

穴居の跡といふのは、我軍の冬營の跡で、全く穴を掘つて居つたのです。それが此奉天の會戰の爲に、前進した跡でせう。

第三日、即ち三月四日より、此空樽を以て、毎夜殆ど終夜、給水に從事せり。彼の寒威酷烈の時に當り、或は炊爨に、或は糧秣の補充に、或は糧食の運搬に、其他の雜役に、終日終夜奮勵し、尚ほ及ばざらんことを恐れて、熱血事に從へるの狀は、今尚ほ目睫の間にあり。適〻困憊に耐へざる者あれば、僚友相勵まして曰く、敵と近く相對し、然も氷上に伏し、雨便も自由ならざる、第一線苦慘の狀態を思へと、誰か涙なきを得るや。

實に、誰か涙なきを得るや。此情を以て運ばれた兵糧ですもの、前線でも缺せずにはをられませぬ。斯うして、前線後方ともに一致して、上下、身を粉に碎いて働くところ、

これが即ち我軍の、大捷を得た一因です。

以上の狀況に於て、三月六日（第一大隊は、三月八日）まで繼續し、飢寒を凌ぎ、兵力を維持するを得たるは、因より盡忠の性と、敵愾の情とに因ると雖も、亦給養其宜きを得たる、効果の大なるを言はざるを得ず。以下其狀況を摘記せんとす。

一　炊爨地

水爨地は、于家窪子の南方約二千米、奉天街道に沿へる、長興甸といへる一部落にして、

（我軍は無論とし、彼の用ひたる上に其の數は輕數倍も使用せり）

戸數七十餘あり。人民の一部は殘留せるも、一般我軍の占位する所たり。此部落は、非水多量にして、水質良好、且つ地形の關係上、炊爨地に適す。各大隊は、三月三日、此地に炊事場を開設せり。

二　炊爨狀況

炊事場は、大隊毎に設備せり。此地は敵の展望臺の視界内に在りて、其砲戰射距離内に位置するを以て、火光を防ぐべく設備せられたり。

敵は、展望臺を設けてあつたと見えます。視界内は、一口にいへば見えるところで。射距離は、砲口から彈著點までゝす。

幸に此地は、某師團野砲兵の冬營したる跡にして、土窟處々に散在せり。仍て炊爨に適當せる、數個の土窟舍を利用し、急造厩舍の木材を以て結搆し、

急造厩舍云々。野砲隊の急造厩舍に使つた材木、それで炊事場を組立てたのです。

高粱及空叺等を以て掩蔽し、眞に野戰的急造掩蔽部を設置するを得たり。

掩蔽部といふのは、掩蓋とは違ひます。掩蔽部は、彈藥を置いたり、又は守備兵が交代

して、休むときなどの爲に、堡壘内に設くるもので、成るべく敵彈を避け得る、安全の場所にこしらへるのです。野戰的といふのは、野戰築城の掩蔽部は、いづれ急造に成りますから、つまり其のやうなといふ意味で、間に合せの仕事ながら、なか〳〵旨く出來たといふのでせう。

炊具は、主として携行炊具を使用せしも、破損等の不足に由り、支那釜及朶桶等を使用せり。

携行炊具は、大行李でもつてあるくものです。

炊事當番は、輸卒及免留せる輕症者を用ひ、

當番は、當番卒といふの略です。當番卒といふのは、從卒の外、總て使役に出る兵士の稱です。其炊事に當らせらるゝのが、即ち炊事當番であります。

大隊毎に、十五名乃至二十二名を使役し、主計監督の下に、計手及炊事掛をして、炊飯其務に從事せしめ、之を飯、副食物の二部に班ち、其過半部を副食物に充てたり。其故は、牛肉の如き、凍結して、固きこと恰も木の如く、一大隊の人員に供する多量の肉を、細切

肉を調理する に斧薪割又は用ふる は内地に於ては想像は出來ぬことです

調理するには、豫想外の大難事たりしが爲なり。

爾に、主計官といふことを言ひましたが、此本文にもあります。御承知でもありませうが、主計は官名で、一等主計から三等主計まであります。其一等主計は、大尉相當官で、二等は中尉、三等は少尉と同じことです。計手は下士官で一等計手が曹長、二等が軍曹、三等が伍長と同じことです。炊事掛も下士官で、大隊の主計の下に居ります。又中隊にも、給養係軍曹といふものがあつて、給養の事を司ります。

副食物といふのは、御菜のことです。其御菜をこしらへるに、大へん手がかゝつたから、人員の半分餘も、其方に使つたといふのです。

之を調理するには、先づ薪割小斧、鋸等を以て、大割をなし、次に庖丁を以て、細斷せり。一食分の炊爨時間は、二時乃至二時三十分間にして、一釜の煮成時間は、平均二十分を要せり。而して爲し得る限り、溫食を供給するの目的を以て、夕食は日沒までに、朝食は拂曉までに、炊爨を終る如くし、時間を切迫して、炊爨せしめたり。此の如く注意を加へたるにも關らず、運搬と分配の困難に由り、多くの時間を要し、遂に溫食給養をなすこ

とを得ざりしは、遺憾とする所なり。夕食は、凍るまでには至らざりしも、朝食は、殆ど凍結して、石の如くなりき。晝食には、重燒麵包を用ひたり。飯は、摶飯となし、副食物は、煮附として供給せしも、摶飯とするは、却て大なる時間を要し、且つ溫度を冷却するの不利なると、運搬の爲め、容器の壓迫と、動搖とに由り、各人に分配するまでには、多くは、原形を存せざる一團となり、便利なりと信じたる分配も、却て困難を來し、其結果甚だ不良なりしを以て、後には、摶飯とすることを止め、之を運飯布に包み、叺に入れて運搬したり。

分配よからうと思つて、折角摶飯になしてみたけれども、其中には、冷えもするし、又運搬の爲に、形が皆崩れてしまつて、一つになつて、却ていけなかつたので、後には布に包んで、叺に入れてやつたといふのです。運飯布といふものは、僕は知りませぬが、大なな、丈夫な、風呂敷のやうなものでせう。一人づゝの飯を包むものなれば、僕も見たことがあります。それは布巾のやうなものです。

第一大隊にては、後に雜飯（副食物を混合したるもの）とし、氷結を防ぐを得たり。

これは、五目飯飯のやうなものでせう。五目飯にすると、其鹽分と、飯と菜の、兩方の暖かみで持合ふので、冷たくなりかたが、遲いといふことを聞きました。

當時天候、攝氏零下十八九度を示し、殊に二日正午頃よりは、降雪之に加はり、暫時にして、一面銀世界と化し、寒風凛然、肌を刺し、釣瓶繩は、氷りて鐵棒の如く、生肉は、石の如く、其他生野菜、器具等、苟も水氣を含むもの、一として氷結せざるはなかりき。此時に於て、一提の水を汲む、尙は難事に屬す。況や一大隊の炊爨に要する、多量の水を汲み、氷の器具、氷の材料を取扱ひ、炊爨をなすをや。其困難、實に豫想の外にありき。此困難に打克ち、長時間交代なく、炊爨業務を完くしたる士卒の奮勵、稱するに餘ありと謂ふべし。

實に然うです。此困難は、當事者でなければ知りませぬ。

三月三日、午後五時頃、敵野砲彈三個、第三大隊炊事場附近に落下せしも、損害なし。之が爲め、士氣却て振興したりき。

これ決して、似而非元氣ではありませぬ。斯ういふことは、實際あるものです。戰場そ

踏んでみますと、斯ういふときは、大に妙味を感ずるものです。

三　糧食、木炭補搬の景況

炊事場たる長興甸と、干家窪子間、約二千米、干家窪子より藤本堡壘（對陣間、右翼隊砲兵陣地の最右翼にして、此地點より、第一線に交通せり）まで、約六百米にして、長興甸より藤本堡壘間には、堀開されたる通路あれども、

前に交通路とあつたのです。

狹隘且つ淺くして、車輛は勿論駄馬といへども、容積の大なるものを、積載して通行するを得ず。又人馬とも、完全に其頭部を蔽ふに足らず。然れども、之れあるが爲に、後方との聯絡、運搬に、多大の利益を得たり。

此後方は、戰線から見て言ふのです。

藤本堡壘より第一線まで、約六百米、此間は、全く敞開して通路なく、晝間の往復は、殆んど不可能なるのみならず、夜間と雖も、往々敵の掃射を受くるを以て、其中間に土囊を以て、三個所の避難所を設けたり。敵の重、野砲彈は、晝間殆ど間斷なく、干家窪子の陣地

附近より、長興甸の北方約千米にある、我砲兵陣地の中間地區に落下し、又我第一線に向てする、敵の小銃彈は、干家窪子附近に跳飛し、夜間と雖も、時々銃砲火の掃射に遭遇し、甚だ危險の狀況なりき。

跳飛といふのは、一旦物にぶつかつて、其勢で反れて飛ぶのです。

以上の狀況に於て、糧食、木炭の運搬をなせり。飯は約四十名乃至五十名分を、運搬囊及其他の布にて包み、之を叺に入れ、副食物は、鑵詰の空箱に入れ、蛮食たる重燒麵包は外箱を除き、木炭は俵裝のまゝ、共に支那車輛及行李駄馬に分載し、行李員及支那苦力を以て輸送隊を組織し、行李監視員たる、輜重兵下士を長とし、之に監視員たる兵卒を附し、干家窪子に在る、炊事掛の許に送達し、炊事掛は、豫備隊の兵力を以て、之を更に第一線に運び、各大隊に分配せり。時には輸卒を以て、直に第一線に運ばしめたることもあり。

支那車輛といふのは、此前にも見えましたが、傭上げたので、馬や驢や牛に輓かせる、運送車です。

支那苦力の逃出したのは一般の人民が生活の為めに忠勇なる我軍のすらむ所です。

若力は、支那語で、人夫のことです。馬丁のことは馬夫といひます。

前に、本國から物を送るの、大へんなことを一寸言ひましたが、全體なら此處で輸送の困難のことを申したいのです。けれどもさうすると、餘りことが汎くなつて、此記事の註釋ではなくなりますから、止しました。

三月二日、第二大隊は、壹間二回敵彈を冒して、長興甸より、干家窪子に運搬せり。此時砲彈附近に落下し、常備の支那若力之に恐れて、牛車を放棄し、或は長興甸に逃るゝあり、或は附近の壕に入りて出でざるあり。尙ほ駄馬一頭斃れたるありて、輸送大に滯溜せり。

是に於て、壹間の運搬を止め、日沒後に於てするに決す。

支那若力の大騒をするところ、一幅のボンチ畫のやうにも思はれませうが、しかし支那苦力にとつては、生命までなくしては、耐つた譯ではありませぬ。逃げるのがあたりまへです。で、其壹間の運搬を止めたといふのも、已を得ないが第であります。

夜間も亦、時時敵の掃射を受けたり。

三月四日、日沒後、第三大隊は、支那車輛を以て運搬中、支那若力一名、右靴に彈子を受け、四名逃走し、馬も壕音に驚きて、逸走せるもありたり。敵彈下に於ける、糧秣輸送の困難、亦大なりと謂ふべし。

夕食及壹食（壹食は重燒麵包）は、毎日日沒後、朝食は、拂曉前到着する如く發送せり。而して、干家窪子までの到着時間は、約四十分を要せり。

干家窪子より戰線までは、二箇中隊の豫備隊を以て運搬せること、前に言へるが如し。其法、甲中隊には、右翼第一線大隊と、豫備一中隊分を、乙中隊には、左翼第一線大隊と、豫備一中隊と、聯隊本部分を分擔せしめ、各下士を長とせる、約三十名の兵を以て、各人一梱包づゝを擔はしめ、

一梱包といふのは、叺に入れた一梱です。

彈藥補充に於けるが如く、躍進を以て、第一線に送達せしめたり。其送達時間は普通約一時間を要せり。或は、途中時々敵の掃射に逢ひ、伏臥したるまゝ、三十分時も經過し、爲に多くの時間を要せしことあり。

三月六日夜半、第二、第三大隊、及聯隊本部の、他方面の攻擊に轉じたる後は、第一大隊

は、輸卒を以て、第一線まで運搬せしめたり。此間に於て、輸卒二名戦死し、支那車輛の輓馬三頭負傷せり。

戰鬪部隊に、糧食供給の困難は、實に以上の如きものであります。然もこれは、一日でも休むことが出來ませぬ。只其常事者が、即ち給養官以下、兵士は勿論輸卒に至るまでもが、君國に對する熱誠でもつて、緻に此間を維いだのです。國民たる者は、よく此等後方勤務の事情を知つて、深く其勞を記さなければならぬのです。

四　戰線に於ける糧食分配の景況

各中隊多少異なれども、其多くは概ね左の如くせり。

給養係は、各小隊より出せる、上等兵一、兵卒四名乃至八名づゝを率ひ、大隊本部所在地に於て、炊事掛より分配を受け、其場に於て、之を各小隊の受領者たる、上等兵に分配す上等兵は、之を引率せる四名乃至八名の兵卒に擔はしめ、散兵壕の小隊所在地に歸り、該所に於て、直接各人に分配せると、更に之を分隊に分配して後、各人に分配せるの二樣ありたり。何れの方法に由れるも、之を各人に分配するときには、各飯盒を集め、敵射線

の中絶せる時に於て、之に盛り、各人に分配せり。此分配間、敵の亂射を受け、分配を一時中止したること、一再に止まらず。已を得ず散兵壕内に於て、飯盒を手より手に遞傳して、分配したることあり。

木炭の分配も、概ね之に準せり。

どうです、此炊事場の狀態から、運搬、分配の景況など、是れ實に諸君の、知らんと欲するも能はざりし所であらうと思ふのです。實際此やうな詳細な、然も事實的な、然も規則だつた記事は、例の僕の口闘ながら、外にあるものではありませぬ。これで諸君も、大に學問をせられたであらうと思ふのです。これ實に皆軍者少佐の賜です。諸君は忘れてはなりませぬ。

五　給養品の種類及數量

（略す）

六　給養品の調辨方法

主食、副食物、調味品、燃料、加給品、馬糧は、總て野戰倉庫三家子及長興甸出張所に

就き、現品を受領し、夜食は十里河に於て買辨せしも、空乏となりしに由り、已を得ず、隊附酒保に就きて買辨せり。

十里河は、土地の名です。其處で支那人から買つたのでせうが、忽ち空くなつてしまつたのです。

七　飲料水給與の景況

沸湯は、豫備隊の兵卒を以て、于家窪子の支那家屋内に於てせしめ、壺間に於て、豫備たる二個中隊の全水筒に盛り、日沒後直に第一線に運び、第一線の空水筒と交換せり。此の如くすること數次に及ぶも、尚ほ多人數の渇を濕すに足らざるのみならず、敵前に於て、到底此繁雜を繼續し得べきにあらざりしを以て、于家窪子附近は勿論、遠く拉木屯附近の穴居の跡を搜索して、漸く兩中隊にて、二十四個の大小空樽を得、三月四日より、此空樽を以て給水せること、既記の如し、木炭給與後は、湯水の給與を止め、生水を供給し、第一線にて、水筒を以て煮沸せしめたり。

水筒は、御承知でせう。飯盒と同じく金屬製ですから、それで直ぐ水を沸されるのです。

決戰内に相對し、距離なきも、又塹壕の中に居りきて、渴炭を沸かす困難な所あり

水を第一線に運搬するには、壺間に於て、全部の桶に水を汲み溜め、之を藤本堡壘の通路口附近に排列し、夜に入り、射擊の中絶するを俟ち、兵卒二人をして、一桶を擔はしめ、急速の歩度を以て、之を第一線部隊に送致せり。

歩度は、歩み方の速さの度合です。陸軍では、乘馬でも、徒歩でも、皆ちやんと歩度がきまつてありますけれども、此處では、たゞ成るべく速くといふのであつたでせう。

敵彈下に於て、流動物の運搬より困難なるはなし。躍進すれば溢出し、然らざれば敵彈を受くるの虞あり。之が爲め、高粱稈等を切入れ、水の溢出を豫防したれども、尚ほ遂に躍進するを得ざりき。

斯ういふ間を辛苦して往つて、やつと著いてみると、溢れて、半分もなくなつてゐようといふものです。實に泣きたくもなりさうなことではありませぬか。あゝ實に貴い水ではありませぬか。

此の如き方法を以て、終夜給水に從事したれども距離の遠隔と、交通の不便と、井の乏しきと、釣瓶、釣繩、桶等悉く凍結し、汲水の困難なる等に由り、第一線部隊をして、

飲料に滿足せしむるに至らざりき。第一線部隊に於ても、亦各小隊毎に、十名乃至十五名を、下士の指揮に屬し　屢〻干家窪子に到り、水筒を以て水の補給をなさしめたり。

此の如き戰線に炭薪の補給を行ふ方法の苦心の力作とす

八　薪炭の補給

薪炭は、糧食と同じく、師團野戰倉庫三家子及長興甸出張所より受領し、薪は炊爨用とし、木炭は、第一線採暖用として使用せり。其運搬法は、糧食に同じ。

其數量は、薪は一人一日の量五百匁とし、木炭は、三月三日より同五日までは、毎日三百匁、六日以後は、四百匁に增額せられ、多少寒を緩するを得るに至りき。

極寒の地に吹曝されて、それで炭が多くなつても、一日一花僅に六百匁です。戰場の苦辯察するに餘あるでせう。しかもこれだけを給するに就ては、其向々の苦心は、實に非常なものなのであります。

以上の如く全力を注ぎて、給養の道を講じたるも、戰場彈雨の間、固より十分の結果を得ず。然るにも關らず、數日に亘りて竟に克く饑渴を凌ぎ、嚴寒に耐へ、能く戰鬪力を維持し得たるは、蓋し士氣の旺盛と、確乎不拔の精神とに因るものなるを信ず。

或る關係の爲め原稿を一部分削除したりまた殺ぎ去りたるものがあります

此段は已に公表せられたるものなれども、由あるを以て、原著者の承諾を得ずして、あえて掲載せり。

これで此記事は終です。これで諸君も、現今戰鬪の實際の狀況を、餘程知り得られたことであらうと思ふのです。

一般に戰鬪記事といふと、大抵は前方の動作のみを書いて、其他に及ぶことは少いですが、此記事は此の如く、前線の動作は勿論、彈藥補充から、給養、衛生のことまで、殘らず一篇の中に經めて、然も詳細く、實際の通に書かれてある。實に此の如き記事は、唯り僕の稱揚て言ふばかりでなく、誰が見ても珍しい稀有のもので、なか〳〵雜錄などいふべきものではない。立派に、一部の戰記とも謂ふべきものです。即ちこれによつて、諸君が軍事知識の幾分を得られたとすれば、それは原著者に負ふ所實に多いのです。で、こゝに終に臨んで、原著者に感謝の意を表されんことを希望します。例によつて、僕が發聲を致しません。

執筆者某少佐殿拜謝

畢矣

稀有の戰記 完

明治四十一年二月一日印刷
明治四十一年二月五日發行

定價 金三十錢

著者 東京府下豐多摩郡中野町本郷三七六番地 中島直清

發行者 東京市麹町區平河町四丁目一番地 横尾民藏

印刷者 東京市神田區三河町一丁目十四番地 垣内伊太郎

印刷所 東京市神田區三河町一丁目十四番地 丸利印刷合資會社

發行所 東京市麹町區平河町四丁目一番地 兵林館 電話番號 六八九番 振替口座 四九三六番

不許複製

42
284

Ex 2
Ex 2